

# 齋宮跡発掘調査報告Ⅲ

下園東区画の調査  
出土遺物編

2021

齋宮歴史博物館



## はじめに

令和2年度、齋宮跡の発掘調査の歴史は50年の年輪を重ねることができました。現在国の史跡に指定されている齋宮跡は、全国屈指の広大な指定面積と飛鳥時代から南北朝時代に至る悠久の歴史を持っています。しかし、実際に指定された段階では、齋宮とその時代の遺構・遺物が地下に良好に残っていること、それが東西約2km、南北約700mの範囲に広がっていること以外は、ほとんどその実態がわからず、史跡指定後の調査と幅広い研究によりその価値を高めていくことが期待されていました。

現在、齋宮跡に関する知識は飛躍的に増え、方格街区という古代の都市計画による平安時代の齋宮の構造、その内部の斎王の宮殿である「内院」、齋宮寮の中心的な施設であった「寮庁」の解明や、その成果としての史跡公園の整備が進められています。

また近年では、平成28年度に策定しました「史跡齋宮跡発掘調査基本方針」に基づいて飛鳥～奈良時代齋宮の中心的施設の解明を進めており、とりわけ飛鳥時代の齋宮の解明が飛躍的に進んでいるところです。

一方、齋宮歴史博物館は、過去の発掘調査成果を整理し、地区ごとに総括しなおす正報告書の刊行事業を併行して実施することにより、これまでの調査成果から新たな齋宮の価値の発見・公開を進めています。今回は方格街区内の下園東区画の出土遺物の再検討結果を上梓することができました。

こうした齋宮跡で築き上げてこられた大きな調査研究成果は、多くの方々の支援の賜物でもあります。平素から齋宮跡の調査研究に貴重なご指導をいただいております齋宮跡調査研究指導委員の諸先生方をはじめ、文化庁、明和町などの関係機関、発掘調査の実施にご理解・ご協力をいただいております地元関係者のみなさまに、あらためて厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

齋宮歴史博物館

館長 上村 一 弥

## 凡 例

- 1 本書は、三重県教育委員会（昭和43年度から平成19年度）および、三重県（平成20年度から令和2年度）が、文化庁の国庫補助等を受けて実施した史跡斎宮跡の発掘調査の中で、史跡東部に位置する方格街区（方格地割）内の下園東区画での発掘成果のうち、出土遺物を総括したものである。
- 2 斎宮跡の方格街区における各区画の名称については、現在の小学名に基づく名称を採用している。
- 3 遺構・遺物の時期区分の指標となる段階設定は、「斎宮跡の土器編年の再検討」（『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』2019）での段階区分に基づき、その表記は「第1段階第2期」などを便宜的に「1-2期」と記述している。
- 4 本書に関連する遺構表示記号は次のとおりである。  
SA：塀・柵    SB：掘立柱建物    SD：溝    SF：道路    SK：土坑    SH：竪穴建物  
SZ：落ち込み・その他
- 5 遺物が出土した遺構番号の表記は『斎宮跡発掘調査報告Ⅲ 下園東区画の調査 遺構編』に則り、従来、遺構番号の桁数を合わせるために行ってきたSK0555のような表記はせず、SK555のように番号の頭に0をつけない表記に切り替えている。
- 6 遺物の漢字表記については、材質の違いによる漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「腕」、「つき」は「杯」を用いている。ただし参考文献からの引用はこの限りではない。
- 7 遺物実測図の縮尺は1/4を基本とし、一部については1/2を用いた。
- 8 本書の執筆は斎宮歴史博物館調査研究課の大川勝宏が行った。なお、刊行に向けての編集作業や、出土遺物の整理作業・図版作成には、下記の協力を受けた。  
斎宮歴史博物館調査研究課  
山中由紀子 川部浩司 宮原佑治 八木光代 森本周子 中西宏美
- 9 本書の執筆にあたっては、「斎宮跡調査研究指導委員」の各委員の指導・助言を受けた。本書刊行時点の委員は下記のとおりである。（五十音順 敬称略）  
浅野 聡（三重大学大学院教授） 稲葉信子（筑波大学名誉教授） 小澤 毅（三重大学教授）  
金田章裕（京都大学名誉教授） 京楽真帆子（滋賀県立大学教授） 黒田龍二（神戸大学名誉教授）  
増淵 徹（京都橋大学教授） 松村忠司（奈良文化財研究所長） 本橋裕美（愛知県立大学准教授）  
渡辺 寛（皇学館大学名誉教授） 綿貫友子（神戸大学大学院教授） 仁藤智子（国士館大学教授）  
また、報告遺物の検討にあたって、下記の方々に格別のご協力をいただいた。  
杉山 洋（龍谷大学教授） 間瀬 創（三重県総合博物館(当時)）

## 目次

第1章 序言	
第1節 刊行の方針	1
第2節 刊行の体制	1
第2章 下園東区画の出土遺物	
第1節 建物遺構出土の遺物	2
第2節 土坑・溝の出土遺物	
(1) 斎宮Ⅱ-1期を中心とする遺構出土遺物	6
(2) 斎宮Ⅱ-2～4期を中心とする遺構出土遺物	12
(3) 斎宮Ⅲ～Ⅳ期を中心とする遺構出土遺物	18
第3節 下園東区画を特徴づける遺物	
(1) 墨書土器	20
(2) 刻書土器	21
(3) 緑釉陶器・貿易陶磁	21
(4) 硯類	21
(5) 祭祀具類	23
(6) 特徴的な土器類	23
(7) 金属製品・石製品・ガラス製品	23
(8) 製塩土器・土錘	23
第3章 下園東区画の出土遺物の検討	
第1節 第23次調査出土の唐鏡について	41
第2節 西加座北区画との比較について	
(1) 須恵器壺G	43
(2) 緑釉陶器	45
(3) 志摩式製塩土器	46
(4) 祭祀具類	49
(5) 墨書土器・刻書土器	49
(6) 硯類	52
第4章 遺物編総括	
第1節 出土土器群からみた下園東区画	53
第2節 特徴的な遺物からみた下園東区画	53

## 表目次

第1表 出土遺物観察表(1)	26
第2表 出土遺物観察表(2)	27
第3表 出土遺物観察表(3)	28
第4表 出土遺物観察表(4)	29
第5表 出土遺物観察表(5)	30
第6表 出土遺物観察表(6)	31

第7表	出土遺物観察表 (7) .....	32
第8表	出土遺物観察表 (8) .....	33
第9表	出土遺物観察表 (9) .....	34
第10表	出土遺物観察表 (10) .....	35
第11表	出土遺物観察表 (11) .....	36
第12表	出土遺物観察表 (12) .....	37
第13表	出土遺物観察表 (13) .....	38
第14表	出土遺物観察表 (14) .....	39
第15表	出土遺物観察表 (15) .....	40
第16表	『延喜寺宮式』にみる諸国の調庸雑物と殿部司の年料 .....	51

## 挿 図 目 次

第1図	下園東区画及び周辺調査区位置図 .....	2
第2図	下園東区画の建物遺構出土の遺物 (1) .....	3
第3図	下園東区画の建物遺構出土の遺物 (2) .....	4
第4図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (1) .....	7
第5図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (2) .....	8
第6図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (3) .....	10
第7図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (4) .....	11
第8図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (5) .....	13
第9図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (6) .....	14
第10図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (7) .....	16
第11図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (8) .....	17
第12図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (9) .....	18
第13図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (10) .....	19
第14図	下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (11) .....	20
第15図	下園東区画を特徴づける遺物(1) .....	22
第16図	下園東区画を特徴づける遺物(2) .....	24
第17図	下園東区画を特徴づける遺物(3) .....	25
第18図	第23次調査出土唐鏡実測図・写真 .....	42
第19図	斎宮跡出土須恵器壺G実測図 .....	44
第20図	斎宮跡出土須恵器壺G分布図 .....	44
第21図	下園東区画と西加座北区画の緑釉陶器出土分布図 .....	46
第22図	西加座北区画出土の緑釉陶器 .....	47
第23図	下園東区画と西加座北区画の製塩土器出土分布図 .....	48
第24図	下園東区画と西加座北区画の小型模造品出土分布図 .....	48
第25図	下園東区画と西加座北区画の墨書土器・刻書土器出土分布図 .....	50
第26図	下園東区画と西加座北区画の陶硯類(定型硯)出土分布図 .....	50

# 第1章 序 言

## 第1節 刊行の方針

本書は、史跡畜宮跡東部で確認されている方格街区のうち、下園東区画からの出土遺物を総合的に報告するものであり、畜宮歴史博物館がすでに令和元年度に刊行した『畜宮跡発掘調査報告Ⅲ 下園東区画の調査 遺構編』（以下『遺構編』という）と対になるものである。

下園東区画については、『遺構編』の中で、区画の規格、外周の区画道路の変遷、区画内建物の変遷をA～F期に画期づけている。その中でも畜宮跡土器編年<sup>(1)</sup>のⅡ-1期新相～2期古相に併行する下園東区画B期には、東接する西加座北区画でⅡ-1期の古い段階から造営された、5間×2間の掘立柱建物を区画内に16棟を均等に配置した「寮庫」の構造が下園東区画でも敷行され、二区画が一体的に「寮庫」機能を有した段階があることが確かめられた。また、天長元(824)年～承和六(839)年にかけて畜宮全体が度会郡の離宮院に移設され、この空白期ののち度会畜宮の火災に伴って、再び多気郡に畜宮が戻された後は、区画内の少なくとも南東部分は、南の柳原区画との機能的一体化が進んだとみられること、下園東区画E 1期（Ⅱ-3期新相～4期頃）に北半中央で区画溝（SD913・1140）による細分が行われたことなど、区画全体の流れが示されている。

本書では、下園東区画の性格や変遷を示す出土遺物を報告するが、掲載する資料は、遺構出土遺物のうち残存状況の良いものや一括性の高いもの、あるいは主要遺構の時期決定の根拠となるもので、これまで未整理で公開されていないもの、および遺構外からの出土も併せて下園東区画の性格を反映すると考えられるものに重点を置き、これまで刊行した概要報告に掲載されたものは、重複を最小限にするため、特に重要性が高いなど、今後の研究の良好な資料となるものに掲載をとどめた。

本書での遺物の時期の表現は、畜宮跡の土器編年による段階表記に拠り、「第Ⅱ期第1段階」は煩雑さを避けるため「Ⅱ-1期」のように記載している。

なお、出土遺物の写真図版は、遺構写真と合わせて別途刊行している<sup>(2)</sup>。

[註]

(1) 「第3章 畜宮跡の土器編年の再検討」『畜宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土遺物編』畜宮歴史博物館 2019

(2) 『畜宮跡発掘調査報告Ⅲ 下園東区画の調査 写真図版編』畜宮歴史博物館 2021

## 第2節 刊行の体制

本書の刊行に向けて、令和元年度から出土遺物の抽出や整理作業を行っている。

令和元年度から2年度にかけての刊行の体制は下記のとおりである。

館長 上村一弥 調査研究課 大川勝宏・山中由紀子・川部浩司・宮原佑治  
八木光代・森本周子・中西宏美

また、刊行にあたっては「畜宮跡調査研究指導委員会」の指導と助言を受けている。委員の構成は下記のとおりである(五十音順 敬称略)。

浅野 聡(都市工学)・稲葉信子(文化遺産学)・小澤 毅(考古学)・金田章裕(歴史地理学)・京葉真帆子(女性史)・黒田龍二(建築史学)・仁藤智子(古代史・令和2年度から)・本橋裕美(国文学)・増淵 徹(文化財学)・松村恵司(考古学)・綿貫友子(中世史)・渡辺 寛(古代史)

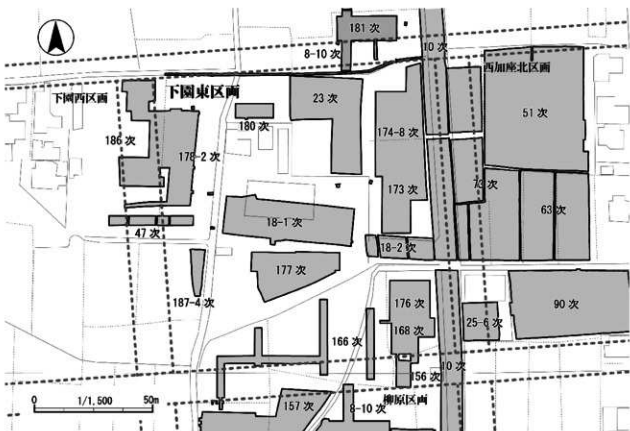
## 第2章 下園東区画の出土遺物

### 第1節 建物遺構出土の遺物

下園東区画は、『遺構編』において、円墳である第174-8次調査のSD11139以降、奈良時代後期に遡る可能性のある土坑以外は、次のような区画内の変遷を想定している。まず斎宮跡の土器編年<sup>(1)</sup>の段階区分でⅡ-1期古～中相にあたる下園東A期から建物遺構が現れ、Ⅱ-1期新相～2期古相に、約400尺四方を基本とする方形区画内に5間×2間の東西棟の掘立柱建物が11棟以上規則的に配置され、東接する西加座北区画と並列して「寮庫」の機能を有したとしている。その後、天長元(824)年に斎宮が度会郡の離宮院に移転した際には、下園東区画の規則的な建物配置は解体され、承和六(839)年に度会郡の斎宮が火災に遭い、再び多気郡に戻された下園東C期には、新設された区画道路により、区画の一部が南接する柳原区画に取り込まれていたと考えられている。このC期以降は、区画全体に及ぶ規則的な建物配置はみられなくなる。出土土器のⅡ-4期新相～Ⅲ-1期に相当すると考える下園東E期には、区画内部をさらに分割するような溝SD913・1140が現れ、区画内の各所に主たる建物とそれに付属する建物の群が、下園東区画の外周道路に沿って複数成立し、Ⅲ-2～3期の下園東F期以降、建物は消失していくとみている。

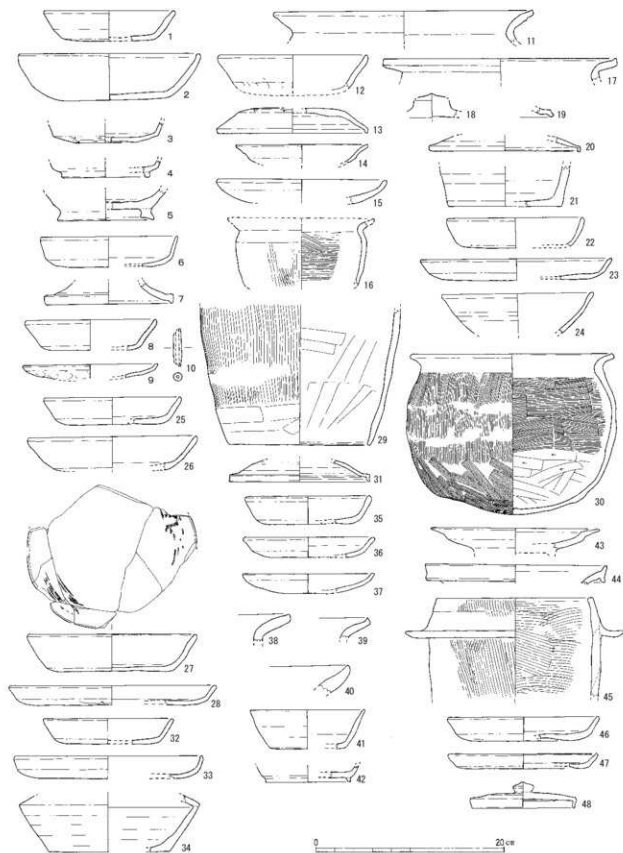
これらの建物遺構から出土した遺物は、ごく一部を除いて大半が土器類である。本節では、この区画の主たる掘立柱建物の柱穴から出土した遺物のうち、図化できたものを紹介していく。

SB1170(1・2) 第23次調査で検出した4間×2間の南北棟で、柱間寸法は10尺(3.0m)を基本とする。下園東A期に属し、当該期の区画内最大規模の建物である。同じ調査区のSB1160・1180とは棟方向が直交し、同時期と考えている。調査時期が古く、出土遺物が柱穴掘形出土か柱痕跡出土かの峻別がつけられないが、(1)の土師器杯Aは型式から斎宮跡の土器編年でⅡ-1期中～新相、(2)の土師器椀A1はⅠ-3期新相～Ⅱ-1期古相のものと考えられる。いずれも器表面の磨滅が進んでいる。



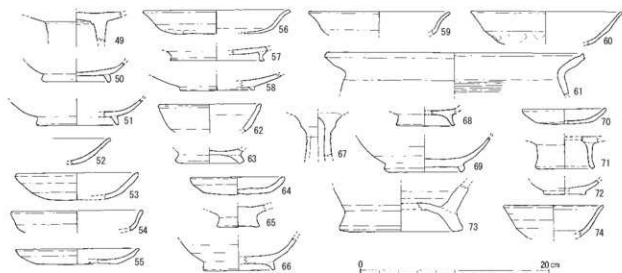
第1図 下園東区画及び周辺調査区位置図(1500分の1)





第2図 下園東区面の建物遺構出土の遺物(1)

SB1170 (1・2)    SB1180 (3~5)    SB1160 (6・7)    SB935 (8~10)    SB10873 (11~13)    SB930 (14~21)    SB11130 (22~24)  
 SB10490 (25~31)    SB10887 (32)    SB10630 (33・34)    SB900 (35~42)    SB932 (43~45)    SB10511 (46)    SB10512 (47・48)



第3図 下園東区画の建物遺構出土の遺物(2)

S B 931 (49~56)    S B 924 (52~55)    S B 929 (56~58)    S B 933 (59~61)    S B 921 (62・63)    S B 11150 (64~66)    S B 11149 (67~69)  
 S B 11149 (70~72)    S B 10882 (73)    S B 11170 (74)

**S B 1180 (3~5)** 第23次調査で検出した、S B 1170に直交する桁行4間以上、梁間2間の東西棟である。図化できたのは須恵器のみだが、(3)の杯A、(5)の胴部が卵形になる長頸壺などは折戸10号竈式期のものとみられようか。

**S B 1160 (6・7)** 第23次調査で検出した、これもS B 1170と直交する東西棟で、第174-8次調査区まで延びれば桁行5間、梁間2間の建物となる。第180次調査区のS B 10633とも柱筋を描えている。土師器杯A(6)は底部から口縁の立ち上がりが高く、型式的にはⅡ-1期古~中相のものともみられる。(7)は焼成がやや軟調な須恵器の器台脚部とみられるが、調査時に後世の遺物が混入した可能性がある。

**S B 935 (8~10)** 第18-2次調査で検出した、A期に属するとみられる3間×2間の東西棟である。B期とみられるS B 930の柱穴に重複されている。土師器杯A(8)はⅡ-1期中~新相のものだが、土師器皿A(9)は型式的にはⅡ-3期以降のもので、調査時の混入とみられる。

**S B 10873 (11~13)** 第178-2次調査で検出した、A期に属するとみられる3間×2間の東西棟である。出土遺物は、土師器杯A(12)はⅡ-1期中相のもの、須恵器蓋(13)は鳴海32号竈式期のものとみられるが、いずれも柱掘形からか柱痕跡からのものか判断できない。

**S B 930・11130・10490・10887・10630 (14~34)** 下園東区画B期の「寮庫」を構成する5間×2間の東西棟から出土した遺物である。第18-2次調査のS B 930出土遺物(14~21)のうち、土師器杯A(14)はⅡ-3期の型式であり、内外面をロクロケズリで調整する無軸陶器壺(21)は調査時の混入品とみられる。第174-8次調査のS B 11130出土遺物(22~24)のうち土師器杯A(22)と皿A 2(23)はⅡ-1~2期古相のものである。須恵器椀(24)は底部を欠損するが、口唇部が肥厚し、畜宮跡ではあまり類例を見ないものである。第177次調査のS B 10490出土遺物(25~31)では、土師器杯A(25~27)・皿A 2(28)はⅡ-1期中相の型式である。(27)の内面には墨痕もみられる。土師器甕A(30)は破片の一部が柱痕跡からも出土していることから、概要報告ではS B 10490に先行するS B 10491(A期)の遺物が混入したと判断して建物時期をⅡ-2期としているが、(30)も底部外面はハケ調整し、古い調整技法を残しており、出土遺物全体でⅡ-2期以降とみられる要素は見受けられない。須恵器蓋(31)も口縁の屈曲が強く、折戸10号竈式期のものとみられるので、全体にⅡ-1期中相頃のものともて矛盾はない。第178-2次調査のS B 10887柱穴から出土した土師

器杯A(32)はⅡ-1期中相頃のもの、第180次調査区のS B10630出土遺物のうち土師器皿A1(33)は外面をへラケズリしており、Ⅰ-3期新相～Ⅱ-1期のものとみられる。以上の状況から下園東B期に規則的に配置される5間×2間の掘立柱建物出土遺物は、後世の混入遺物も若干みられるものの、斎宮の土器編年でⅡ-1期中相を中心としており、遺構の実年代観も8世紀末から9世紀初頭とすることができ、「寮庫」の成立を度会郡への斎宮移転に先行する時期と考えることができるだろう。

**S B900(35~42)** 第18-1次調査で検出したC期の5間×2間の東西棟で、柱掘形が一辺約1m、柱間がおよそ8尺の、区画内では大型の建物である。土師器杯A(35)・皿A(36・37)は器壁も厚く、Ⅱ-1期中～2期古相とみていいだろう。土師器盤(40)は細片になっているため、正確な口径は測れないが、おそらく径30cm以上の大型の皿の形態になるものだろう。須恵器杯A(41)・杯B(42)はいずれも折戸10号窯式期のものとみられる。

**S B932(43~45)** 第18-2次調査で検出した区画南東部の5間×2間の東西棟である。黒笹90号窯式期の灰軸陶器段皿(43)が出土している。土師質の土管(45)はジョイント部分に羽釜状の罫がある。内外面を粗いハケ調整する。使用痕跡は判別できない。土管は、下園東区画では第10次調査で、区画東辺道路の西側溝であるS D520からも出土している。

**S B10511(46)・10512(47・48)** 第177次調査の東辺で検出している。S B10512は第18-2次調査のS B932と南側の柱筋を揃えている。土師器皿A2(46・47)はⅡ-1期中相～2期古相の型式である。灰軸陶器蓋(48)は黒笹14号窯式期のものであろう。

**S B931(49~51)** 第18-2次調査で検出した3間×2間の南北棟である。須恵器高杯(49)の他、灰軸陶器で折戸53号窯式期とみられる碗(50)・黒笹90号窯式期後半とみられる碗(51)が出土している。(50)は混入品であろうか。

**S B924(52~55)** 第18-2次調査で検出した3間×2間の南北棟とみられる建物である。土師器杯A(52)・皿A(55)はⅡ-3期中相頃のもの、皿A2(54)はⅡ-1～2期のものである。『遺構編』では大型建物S B10330と直角のL字形配置となることから、下園東D期としている。土師器杯D(53)は判別が難しいが、Ⅲ-1期頃の遺物の混入だろうか。

**S B929(56~58)** 第18-2次調査で検出した桁行4間以上、梁間2間の東西棟である。Ⅱ-3期の土師器杯A(56)が出土しており、下園東D期に位置づけている。

**S B933(59~61)** 第10次・18-2次・173次調査にまたがって検出した桁行5間以上、梁間2間の東西棟である。土師器杯A(59)・碗A2(60)はⅡ-3期、土師器甕C(61)はⅡ-1～2期のものである。建物は下園東E1期に位置づけており、この期では区画最大の建物である。

**S B921(62・63)** 第18-1次調査区の南東隅で検出した、東西2間以上南北2間の建物である。図示した遺物はいずれも黒色土器A類の碗でⅡ-4期～Ⅲ-1期頃のものであろうか。

**S B11150(64~66)** 第174-8次調査で検出した5間×2間の東西棟である。土師器皿D(64)・クロロ土師器小型杯(65)はⅢ-2期頃のものである。無軸陶器碗(66)は第2形式の山茶碗とみられる。『遺構編』では下園東E期に置いたが、若干後出のものである可能性がある。

**S B11140(67~69)** 第174-8次調査で検出した5間×2間の東西棟で、下園東区画E～F期では最大の規模になる。京都系土師器である高杯(67)、東山72号窯式期の灰軸陶器碗(68)、第4型式の無軸陶器碗(山茶碗 69)が出土している。

**S B11149(70~72)** 第174-8次調査で検出した3間×2間の東西棟である。Ⅲ-2期頃の土師器皿D(70)・杯B2(71)、クロロ土師器杯(72)が出土している。E期より若干後出するかもしれない。

**S B10882(73)** 土師器の台付鉢(73)は、破片の断面観察から高台部を成形し、その後体部から口縁部を積み上げる成形法を取っている。胎土にも砂粒が多く全体に粗雑な作りである。類例が少ないが、斎宮Ⅲ-3期の基準資料であるS K1074(第20次調査)によく似た成形法の台付碗がある。

**S B11170(74)** 第10次から174-8次調査区にかけて検出した5間×2間の東西棟で、大宰府分類で白磁V類の小碗(74)が出土している。斎宮跡ではⅢ-2期～Ⅳ期にかけての遺構で出土する遺物である。

## 第2節 土坑・溝の出土遺物

### (1) 斎宮Ⅱ-1期を中心とする遺構出土遺物

今回、出土遺物を図化できた遺構では、斎宮編年のⅡ-1期以降で、下園東区画の時期区分ではA・B期に当たるものが最も多い。

**SK1156 (75~77)** 第23次調査で検出した、直径約0.9mの円形の土坑である。ほぼ完形で復元できる須恵器鉢(75)、土師器杯A(76)・盤(77)が出土しており、あまり一般的ではない(77)などを伴っていることから埋納的な遺構であった可能性がある。土師器杯A(76)は厚めの器壁で、底部外面をヘラケズりするb手法によっており、形式的にⅠ-3期まで遡る可能性がある。しかし、土師器盤(77)は、Ⅰ-3期新相~Ⅱ-1期古相のものは精良で赤く発色する胎土を用い、外面をヘラミガキし、しばしば把手を付けるが、(77)は器表面の摩耗が進んでいるものの外面は底部付近をヘラケズリ、体部上半はナデ調整が、あまり丁寧ではないヘラミガキとみられ、把手もないことから後出的なものとして、おおむねⅡ-1期古~中相と考えられる。須恵器鉢(75)は口径14.7cm、高さ8.0cmを測るが、斎宮跡では出土例は乏しい。色の明るい胎土でやや軟調な焼成となっている。美濃須衛窯の製品であろうか。

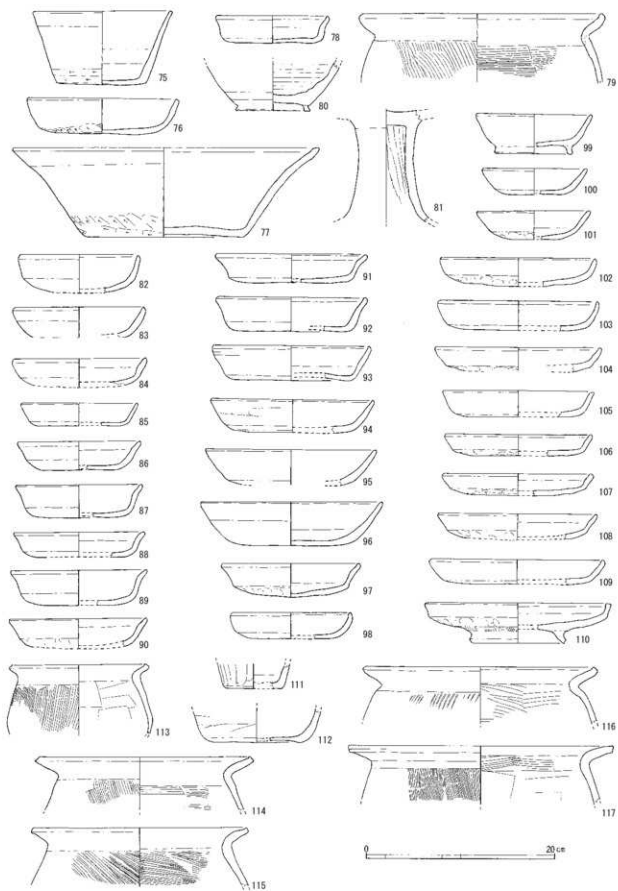
**SK11205 (78~81)** 下園東区画南東の第10次調査で検出した、直径約2.8mの不整形円形土坑で、区画東辺道路西側溝のSD520に沿って道路内に掘削されている。斎宮Ⅱ-1期古相の形式の土師器杯A(78)や折戸10号窯式期のものとみられる須恵器長頸壺(80)などが出土している。側溝際とはいえ道路上に掘削されているため、後代に掘削された土坑にSD520埋土の遺物が混入している可能性はある。

**SD520 (82~134)** 第10次調査で検出した、下園東区画と西加座北区画間の区画道路SF11209の西側溝にあたる。この側溝がいつまで機能したかは不明で、『遺構編』では下園東C~D期頃までは何らかの形でSF11209は存続した可能性があるとしている。SD520の出土遺物には、下園東区画の南北中心軸付近で路面上まで非常に多数の不整形土坑が掘削されており、SF11209が後続するSF11210に変遷した後の遺物の混入も若干みられるが、大部分はⅡ-1~2期の土器類で、大型の破片も多い。土師器杯G(82・83)のうち(83)は、残存率が少ないものの径高指数が0.23と扁平な器形であり、Ⅱ-1~2期のものとみられる。杯A(84~94)は器壁が厚く、平坦な底部から強い屈曲で口縁部に向けて立ち上がる器形で、Ⅱ-1期古~中相のものとみられ、同じ杯Aでも(97)はⅡ-1期新相~2期にかけてのものとみられる。土師器皿A1(102~104)・A2(105~109)も同様にⅡ-1期古相~2期までの幅がみられる。このように方格街区の区画道路側溝が、造営期とあまり間をあけない時期の遺物を伴って埋没している事例は、南接する柳原区画の東辺道路側溝であるSD530でもみられる。土師器杯D(98)は類例の乏しい器種だが、内湾する口縁部を持ち、外面はナデ調整で一部ヘラケズリを施した可能性もある。土師器短頸壺(118・119)もこれまで類例の乏しい器種である。砂粒の少ない精緻で橙色の胎土である。土管(120)は下園東区画では第18・2次調査のSB932、その他にも史跡西部古里地区での第39次調査のSK2250(奈良時代)や、斎宮跡Ⅱ-2期古相の基準資料でもある東加座地区の第77次調査のSK5200にみられる。

須恵器では、蓋(121・122)・杯B(123~126)・台付盤(129)の器形から、鳴海32号窯式期~折戸10号窯式期のものとみられる。口径が約24cmに復元される深鉢(132)は、Ⅱ-1期頃ではこれまで類例を見ない器種である。器壁が薄く精緻な胎土を用いている。(134)も類例が乏しく、大型の盤状の器形になるとみられるが、口縁端部を丸く収めていること、陶器質ながらやや粗糲な胎土であることから、Ⅲ期の遺物が混入した可能性もある。

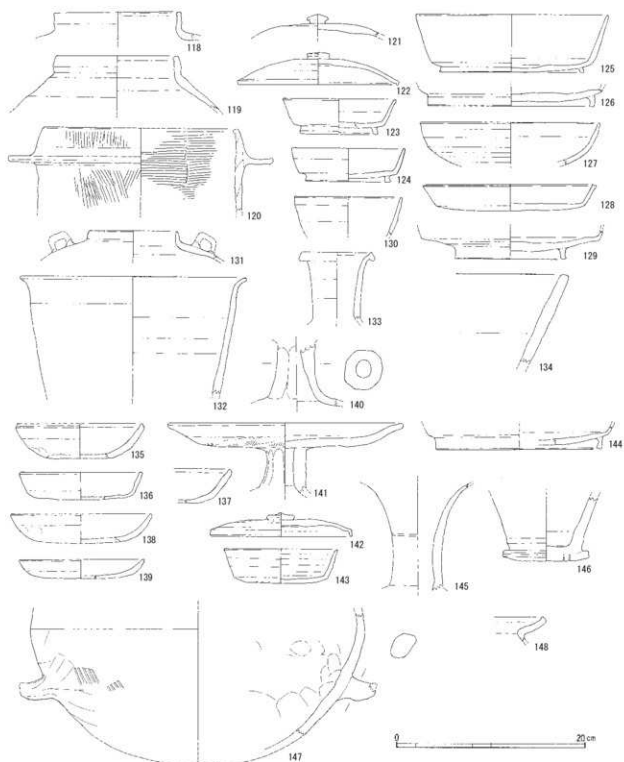
**SD515 (135~146)** SD520の北側延長にあたる。SD520との間に攪乱土坑があり、これまで分けて遺物を収納してきたことから、そのまま遺構番号を残している。SF11209西側溝にあたるが、方格街区北辺道路の南側溝に接続することなく、約5mの間隔をあけている。

図化した土師器杯G(135)・杯A(136~138)・皿A1(139)・高杯(140・141)の他、須恵器でも蓋(142)・杯A(143)・杯B(144)はⅡ-1~2期のものあるいは長用したものが同時に埋められたとみて矛盾はない。ただ単純口縁の長頸瓶(145)は7世紀まで遡る可能性があり、後述する(621)同様、第174・8次調査で検出した円墳SD11139に関連するものが混入した可能性が考えられる。



第4図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物(1)

SK1156 (75~77) SK11205 (78~81) SD520 (82~117)



第5図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物(2)

SD529 (118~130) SD515 (135~146) SD529 (147) SD1627 (148)

**SD529(147)** 下園東区西南辺道路SF11211の北側溝で、第10次調査で検出している。検出長は長くないが、図化できる出土遺物としては、丸底になるとみられる須恵器鍋B(147)がある。柳原区画の東辺区画道路側溝SD530からほぼ完形の鉄鉢形の須恵器鉢が出土しており、これらは関連するものかもしれない。

**SD1627(148)** 第25-6次調査で検出した、SF11209の東側溝である。出土遺物は西側溝に比較して少ないが、口縁端部を上方向へわずかに積み上げる土師器甕Cの口縁部(148)が出土している。

**SK10888(149~190)** 下園東区画北西部の第178-2次調査で検出した、5.6m×4.4m、深さ0.2mの大型土坑だが、重複するSK10889も含めて複数回の掘削と土器の廃棄が想定される。『遺構編』ではA期に属するとしている。土師器杯G(149)は径高指数0.26とⅡ-1期の幅に収まるものである。土師器杯A(150~161)は器壁が肉厚で、平坦な底部からの屈曲が明瞭なⅡ-1期古~中相の形式のものが多い。(156)には内面に焼成後の線刻が三本みられる。土師器碗A2は外面をヘラミガキする(162)とナデ・オサエで調整する(163)がある。同じく土師器碗である(164)は、口唇部をわずかに肥厚させており、金属器を意識した形態かもしれない。土師器平底鉢はⅠ-3期新相~Ⅱ-3期にかけて、主に方格街区内で見つかっている。(177)は、内外面をヘラズリで調整する。

須恵器は杯A(178)・杯B(179~183)・蓋(184・185)は、いずれも折戸10号窯式の範疇に収まるものであろう。(178)の口縁部内側には灯心による油煙が付着する。皿A(187)は、内面に焼成前の「安」の線刻がある。同様の刻字は伊賀国府跡で須恵器蓋が2例見つかっている他、伊賀市唐木谷遺跡・森脇遺跡・中出向井遺跡でも見つかっている<sup>(2)</sup>。また伊賀国府では(187)によく似た須恵器皿も出土しており、伊賀との関連がうかがえる資料である。

この他、志摩式製塩土器(188)や鉄製品(189・190)が出土している。鉄製品は破断面の形状から刀子と考えられる。

**SK10883(191~195)** 第178-2次調査で検出した、1.0m×0.9m、深さ0.15mの略円形の土坑である。土師器杯A(191)・碗A2(192)や、高杯(193)など、Ⅱ-1期の土器が出土しており、A期に位置づけている。

**SK11200(196~201)** 第10次調査の区画道路西側溝SD520に沿って集中的に掘削された土坑の一つで、長径は約1.1mとみられるが、遺構の重複のため正確な大きさはわからない。Ⅱ-1期新相~2期の土師器杯A(196)・碗A2(197)・皿A(198)・平底鉢(199)が出土している。土師器甕A(200)は球形の体部の外面下半をヘラズリし、頸部から「く」の字の強い屈曲で口縁部を作る。Ⅱ-1期でも後出のものともみられる。焼成がやや軟調な須恵器広口壺(201)が出土しており、口縁のゆがみが大きい。A期に位置づけている。

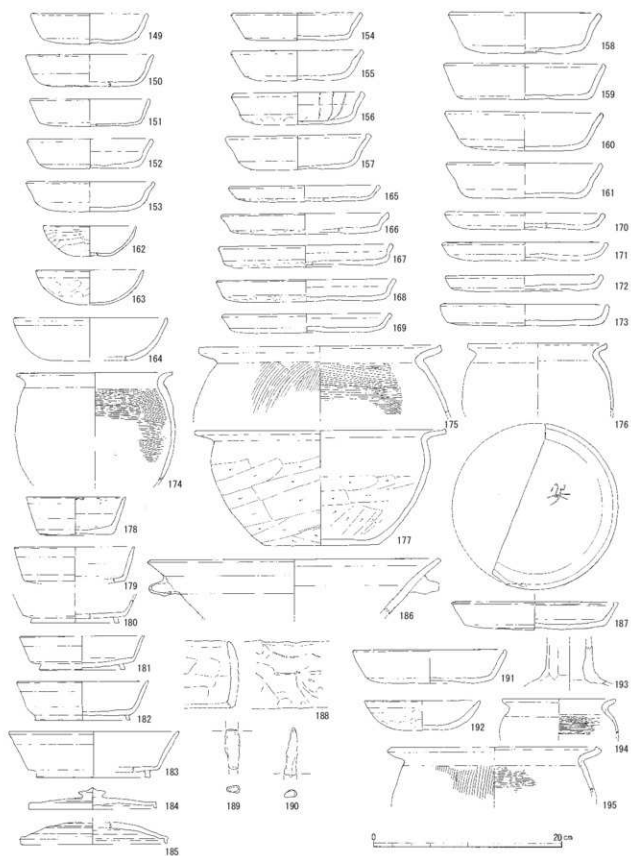
**SK526(202~206)** 下園東区画の南東部の第10次調査で、区画道路側溝であるSD520に重複して検出した、東西5.0m、深さ0.3~0.5mの不整形の土坑である。Ⅱ-1期の土師器杯A(202・203)・皿A1(204)がある。(206)は大型の土師器甕である。外面をタテハケとケズリ、内面をヨコハケとヘラズリ調整する。須恵器杯B(205)は折戸10号窯式期のものとみられる。SK526にはSD520埋土の遺物が混入した可能性はあるが、A期に位置づけている。

**SK11197(207~212)** SK11200と同様、第10次調査のSD520に重複して区画道路内に掘削された土坑群の一つである。土師器杯A(207・208)・碗A2(209・210)・高杯(211)はⅡ-1期中相の形式とみられる。須恵器杯B(212)も折戸10号窯式期のものとみてよいだろう。A期に位置づけている。

**SK527(213~220)** 第10次調査で検出した、一辺約2.5m、深さ約0.15mの方形の土坑である。下園東区画南東隅に単独で掘削されており、遺構の重複はない。Ⅱ-1期中相の土師器杯A(213)・皿A2(214・215)の他、土師器風炉(217)がある。風炉は第98次調査でⅡ-3期とみられるものが出土している他は例がない。鉢形の体部に細長い方形の透かし穴を四方向に設けるものであろう。須恵器杯B(218)・台付盤(219)はいずれも折戸10号窯式期のものとみられる。A期に位置づけている。

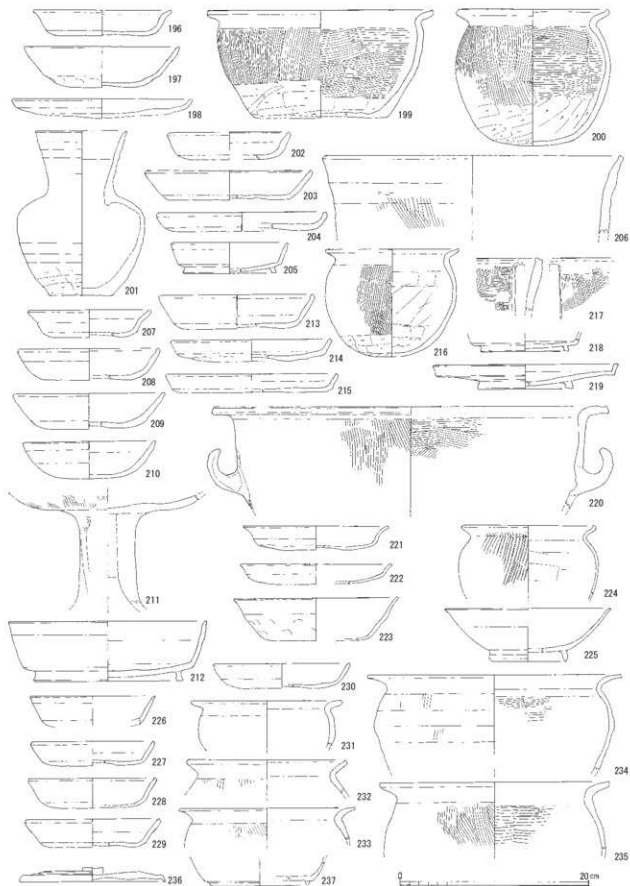
**SD291(221~225)** 第10次調査で検出した、方格街区北辺道路の南側溝にあたる溝である。何度も再掘削されていたとみられ、Ⅱ-1期~Ⅲ期に及ぶ遺物が出土しているが、遺構の初現はⅡ-1期とみられる。土師器皿A2(222)や碗A2(223)は器壁も薄くⅡ-3期の形式で、灰軸陶器碗(225)は黒笹90号窯式期の後半の型式である。

**SD901(226~237)** 下園東区画の中央部、第18-1次調査の北西隅で検出した、長さ7.5m、幅0.5mの溝である。図示できた遺物は、土師器杯A(226~229)・皿A1(230)などはいずれもⅡ-1期の形式に収まる。須恵器蓋(236)は、



第6図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物(3)  
 SK10888 (149~190) SK10883 (191~195)





第7図 下関東区画の土抗・溝の出土遺物(4)

SK11200 (196~201) SK526 (202~206) SK11197 (207~212) SK527 (213~220) SD291 (221~225) SD961 (226~237)

Ⅱ-2期古相の基準資料であるSK1045に類似した資料があるため、遺構の時期はⅡ-2期古相併行まで下る可能性がある。SD901はC期と考えられる大型のSB900と位置的に重複するが、出土土器の年代観では懸隔があり、同時期のものとは考えにくい。

**SK10889(238~245)** 第178-2次調査で検出した、1.6m×1.0m、深さ0.3mの略楕円形土坑で、大型のSK10888と重複している。Ⅱ-1期中へ新相の土師器杯A(238)や皿A2(239・240)・高杯(241)とともに、SK10888と同様、土師器の平底鉢が複数出土している点が注目される(242~244)。遺構番号の上では二つの土坑に分けているが、本来は同一かあるいはほとんど時期差がないものと考えられる。

**SK10865(246~253)** 第178-2次調査で検出した、1.7m×1.2m、深さ0.15mの不整形土坑である。形式的にⅡ-1期新相とみられる土師器杯A(246)・杯B(247)・皿A1(248)・甕A(249・250)がある。鳴海32号窯式期とみられる須恵器蓋(252)もあるが、A期に位置づけられる。胴部中央が若干膨らむ小型の土鍾(253)も出土している。

**SK10874(254~261)** 第178-2次調査で検出した、南北1.5mの不整形土坑で、土師器杯A(254)はⅡ-1期中ごろのものともみられる。椀A2(255)は器壁が薄く外面を丁寧にヘラケズリし、砂粒の小さなきめの細かい胎土で、堅緻な焼成だが外面に黒斑がみられる。斎宮周辺以外からの搬入品と考えられる。型式的には平安京編年の京Ⅱ期中へ新相に近い<sup>12)</sup>。皿A2(256・257)はⅡ-1期新相~2期のもの、須恵器蓋(259)は折戸10号窯式期のものであろう。小型の土鍾(261)も出土している。B期に位置づけている。

**SK1181(262~265)** 第23次調査の南半部で検出した、1.5m×1.3m、深さ0.15mの楕円形土坑である。土師器椀A(262・263)の他、須恵器壺(264)、灰軸陶器椀(265)がある。(265)は口縁部を端反りさせる黒笹14号窯式期のものである。B期に位置づけられる。

**SK11204(266~268)** 第10次調査で検出した、南北2.9m東西1.5m以上の不整形土坑である。区画道路SF11209の西側溝SD520とSD525の交点部分に接する。SD520でも出土している土師器短頸壺(266)がみられる。土師器甕A(267)は口縁部が水平に近くなり、やや新しい要素と考えられることから、B期に位置づけられる。

## (2) 斎宮Ⅱ-2~4期を中心とする遺構出土遺物

**SK1177(269~276)** 第23次調査の南半で検出した、2.1m×1.8m、深さ0.3mの楕円形土坑である。土師器皿D(269)・椀A2(270)・皿A(271・272)はいずれもⅡ-2期に位置づけられる。須恵器の高脚の盤(274)は黒笹14号窯式に相当するだろうか。土師器の型式的に幅もみられるため、遺構はB~C期の幅の中に位置づけている。中型の土鍾(276)が出土している。

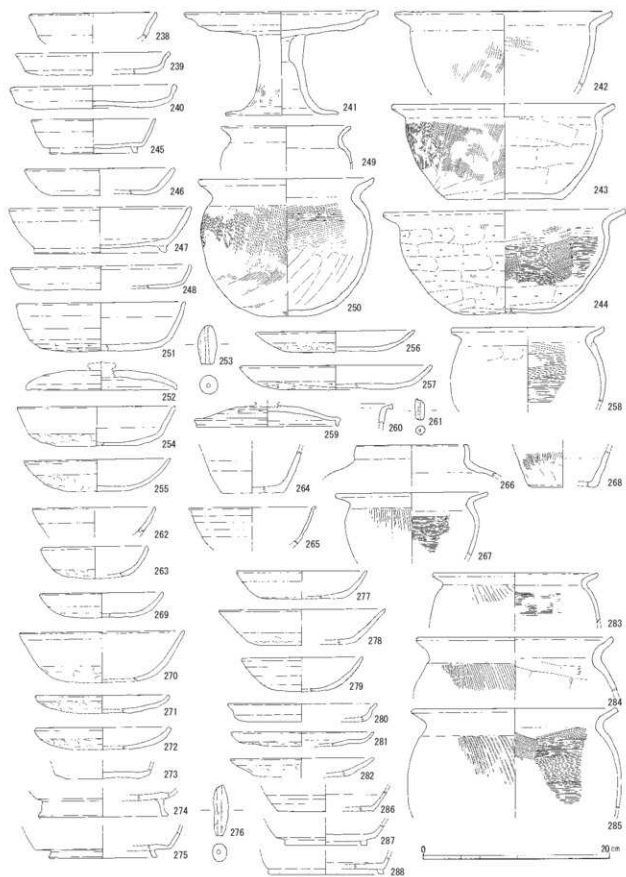
**SK11136(277~288)** 第174-8次調査の北端近くで検出した、2.5m×2.0mの略円形土坑である。C期のSK11137に重複される。土師器杯A(277・278)・椀A(279)・皿A(280~282)・甕A(283~285)はⅡ-2期~3期の型式幅がある。B~C期の幅の中に位置づけている。

**SK1184(289~292)** 第23次調査南半で検出した、2.3m×1.5m、深さ0.1mの不整形土坑である。図示した土師器皿A(289)や須恵器蓋(290)・皿(291)・短頸壺状になる甕C(292)の他にⅡ-3期の土器片もみられ、斎宮が度会郡の離宮院に移転した断絶期からC期にかけてのものともみられる。

**SK1157(293~297)** 第23次調査北半で検出した1.8m×1.6m、深さ0.3mの楕円形土坑である。図示した須恵器杯A(293)・杯B(294・295)・蓋(296)、志摩式製塩土器(297)の他に灰軸陶器片などが出土している。斎宮が多気郡に戻されたC期に位置づけている。

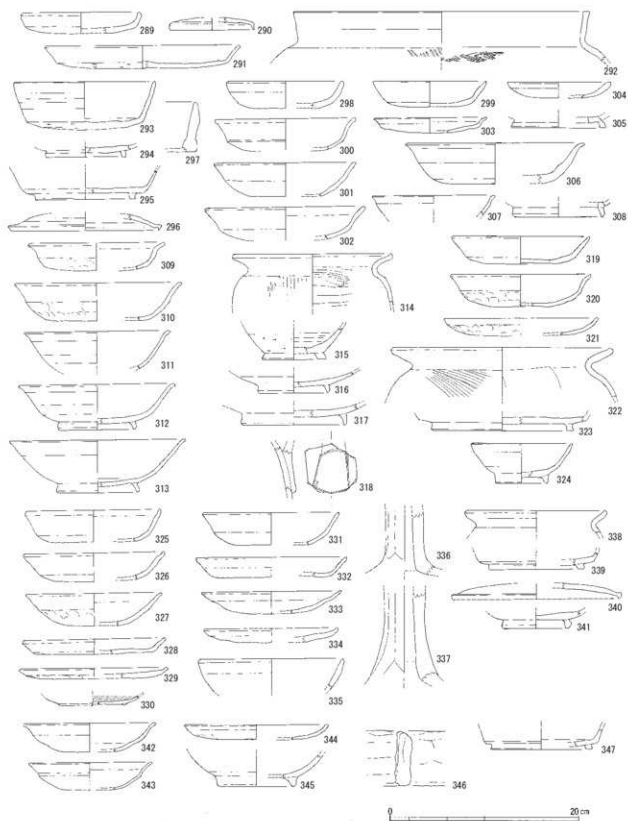
**SK919(298~308)** 第18-1次調査の北東隅で検出した、4.3m×1.7m、深さ0.6mの不整形土坑である。Ⅱ-2期の土師器杯A(298・299)、Ⅱ-3期古相の土師器杯A(300~302)がある。灰軸陶器椀(307・308)は小片ではあるが黒笹90号窯式期のものだろうか。C期に位置づけている。

**SK11202(309~313)** 第10次調査で区画道路SF11209の西側溝SD520に沿って道路上に掘削された土坑群の一つである。1.2m×0.8mの不整形形を呈する。Ⅱ-2期の土師器杯A2(309)・椀A2(310)の他、黒笹90号窯式期の灰



第8図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物(5)

SK10889 (238~245) SK10865 (246~253) SK10874 (254~261) SK1181 (262~265) SK11204 (266~268) SK1177 (269~276)  
 SK11136 (277~288)



第9図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物(6)

SK1184 (289~292)

SK1157 (293~297)

SK919 (298~308)

SK11202 (309~313)

SK10876 (314)

SK11173 (315~318)

SK1153 (319~320)

SK11166 (325~330)

SK905 (331~341)

SK925 (342~347)

釉陶器碗(311~313)がある。C~D期の幅の中に位置づけられる。

**SK10876(314)** 第178-2次調査の北東部で検出した、東西2.0m×南北1.6mの楕円形土坑である。重複するC期のSK10875と出土遺物が混交している可能性がある。図示したのはII-2~3期のものとみられる土師器甕A(314)である。本土坑もC期に位置づけられる。

**SK11173(315~318)** 第174-8次調査のほぼ中央で検出した、東西2.7m×南北1.9mの楕円形土坑である。須恵器長頸壺(315)はII-1期まで遡る可能性があるが、灰軸陶器碗(316・317)と緑軸陶器把手付瓶の把手部(318)は黒笹90号窯式期のものである。C期に位置づけられる。

**SK11553(319~324)** 第23次調査の北半で検出した、2.5m×1.7m、深さ0.1mの不整形土坑で、II-2期の土師器杯A(319・320)・皿A(321)が出土している。灰軸陶器の小碗(324)は、折戸53号窯式期以降のもの可能性がある。C~D2期の幅の中に位置づけている。

**SK11166(325~330)** 第174-8次調査のほぼ中央で検出した、1.1m×0.8m、深さ0.2mの隅丸方形の土坑である。土師器杯A(325・326)・碗A(327)・皿A2(328)はII-1期新相~2期の形式のものだが、土師器皿A(329)や黒色土器A類碗(330)はII-3期中~新相からII-4期のものである。C~D期の幅の中に位置づけられる。

**SK905(331~341)** 第18-1次調査の北西端で検出した1.4m×1.1m、深さ0.1mの楕円形土坑である。図示した土師器杯A(331)・皿A(332~334)・高杯(336・337)はII-2期~3期新相のもの、土師器甕A(338)はII-3~4期のもの、灰軸陶器碗(341)は折戸53号窯式期のものともみられる。C~D期の幅の中に位置づけられる。

**SK925(342~347)** 第18-2次調査で検出した1.9m×1.6m、深さ0.15mの隅丸方形の土坑である。土師器杯A(342・343)・皿A(344)はII-3期新相とみられるが、土師器碗B(345)はIII-1期から出現するとみられ、この他にも折戸53号窯式期まで下るとみられる灰軸陶器片がある。D期のSB924の柱状が重複しているため、これらからの調査時の混入があるかもしれない。

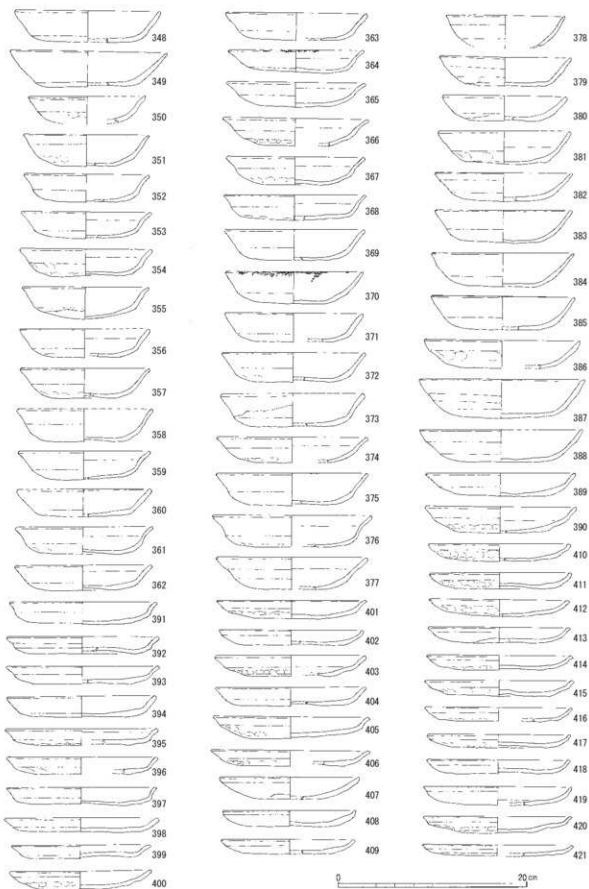
**SK926(348~464)** 第18-2次調査で検出した2.0m×1.6m、深さ0.15mの隅丸方形の土坑である。遺構の規模に比べ遺物の出土量は多く、遺物整理箱で15箱分の出土をみた。土師器杯AはII-1期まで遡る可能性があるもの(348~350)も含むが大部分(351~377)や土師器碗A(378~390)はII-2期~3期古相のものである。皿Aも(391)などはII-2期に含まれるとみられるが、大部分(392~421)はII-3期の型式に属する。なお、土師器杯A(364・370)は口縁端部に油煙が付着している。

その他の土師器には台付碗になるとみられる(422)・台付杯(423~425)・蓋(426)・壺(427)・高杯(428~430)・甕A(431~437)・甕C(438・439)・甕(440)・平底鉢(441)といった多彩な器種がある。平底鉢(441)は体部から底部の境が不明瞭になっていく最終的な形態のものであろう。

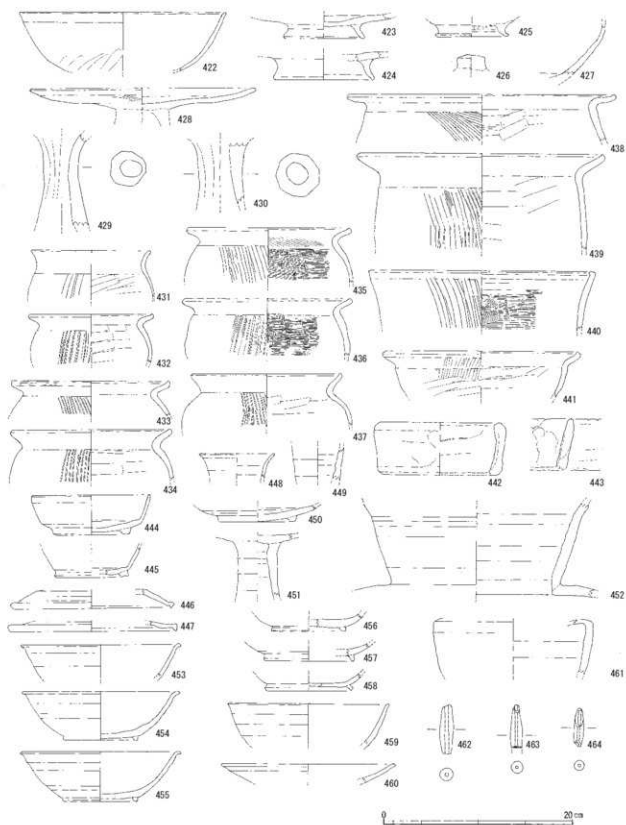
須恵器には杯B(444・445)・蓋(446・447)・台付盤(450)・高杯(451)・壺(452)があるが、多くはII-1~2期のものが混入しているとみられる。灰軸陶器碗は黒笹14号窯式期のもの(453~456)も目立つが、黒笹90号窯式期のもの(457・458)や東山71号窯式期まで下る可能性のある深碗(459)もみられる。調査時の混入であろうか。

この他、志摩式製塩土器(442・443)や中型の土鉢(462~464)も出土している。SK926は、おおむねC~D期の幅を持つ、下園東区画有数の廃棄土坑と考えられるが、第18-2次調査区には、C期のSB932、D1期のSB10330、D2期のSB929と9世紀後半の下園東区画の最大級建物に近接していることと無関係ではないと考えられる。出土遺物の構成は、「内院」地区の廃棄土坑に見られるような9割以上が土師器供膳具というのではなく、煮炊具や陶器類も多い。また緑軸陶器を含まないのも相違点である。南接する「寮庁」と推定される柳原区画にも土師器の廃棄土坑はあるが、緑軸陶器など高級品を伴わない点は共通するが、柳原区画ではSK926よりも土師器供膳具が多いという相違点がある。この差異は区画の性格を反映するものと考えられる。

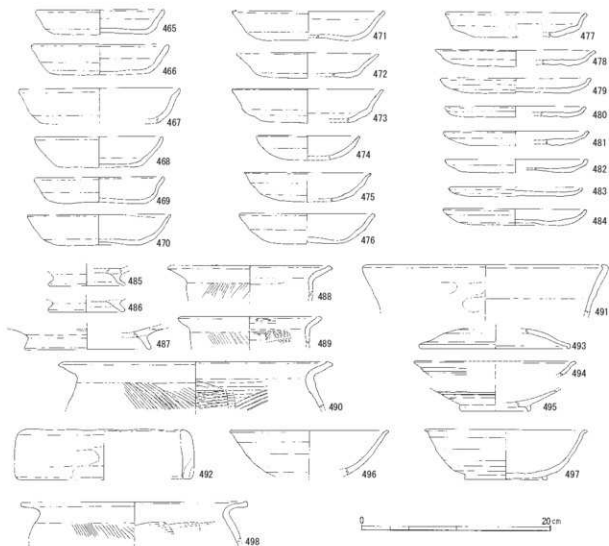
**SK928(465~497)** 第18-2次調査で検出した、東西3.2m×南北0.9m以上、深さ0.1~0.15mの隅丸方形とみられる土坑である。土師器杯A(465~473)・碗A(474~476)・皿A(477~484)はII-1~3期の型式幅がある。灰軸陶器碗も、黒笹14号窯式期のもの(496・497)と黒笹90号窯式期のもの(495)がある。その他、土師器杯B(485~487)・甕A



第10図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物(7)  
SK926 (348~421)



第11図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物(8)  
 SK926 (122~160)



第12図 下園東区画の土坑・溝の出土遺物(9)

SK928 (165~197) SK11187 (198)

(488・489)・甕C(490)・瓶(491)、須恵器蓋(493)・台付の椀ないしは皿(494)、志摩製塩土器(492)がある。規模は小さいがSK926と同様の性格が考えられる。

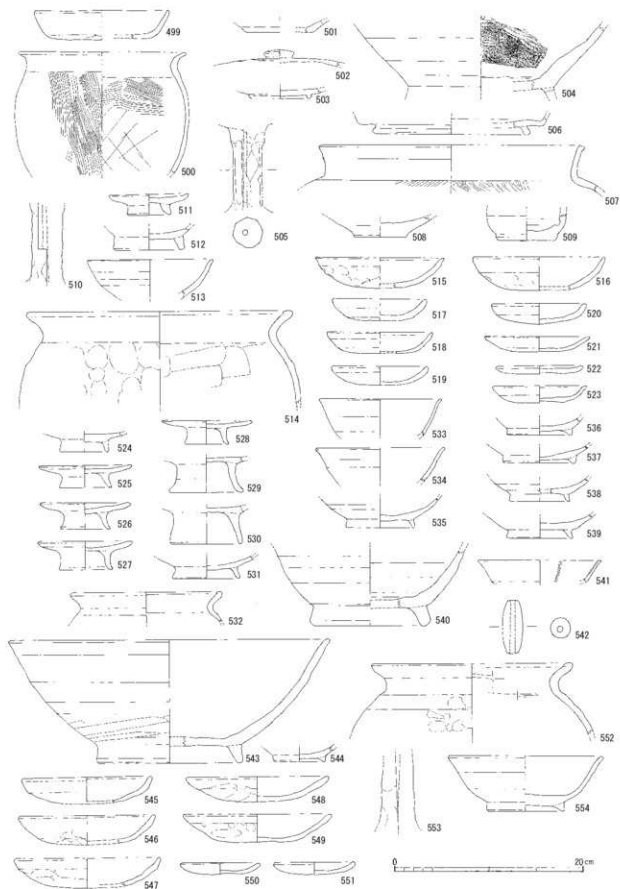
SK11187(498) 第10次調査で検出した区画道路西側溝SD515に重複する長径1.6m×短径1.2mの楕円形土坑である。図化できたのは土師器甕C(498)のみで、Ⅱ-2~3期ころのものであろうか。

### (3) 斎宮Ⅲ~Ⅳ期を中心とする遺構出土遺物

SD913(499~504) 第18-1次調査で検出した南北長約12.0m、東西長23.0m、幅0.6~1.0mの「L」字形の溝で、下園東区画内を細分するためのものであろう。土師器杯A(499)・甕A(500)、須恵器蓋(502)はⅡ期の範囲に入るが、ロクロ土師器杯(501)、無軸陶器椀ないしは皿(503)・台付鉢(504)はⅢ-1期以降のものである。

SD1140(505~509) 第23次調査の北から東に沿って掘削された「L」字形の溝で、SD913とは対照的な位置関係にある。下園東区画の北平中央を細分する区画溝の可能性がある。京都系の土師器高杯(505)、須恵器杯B(506)・甕C(507)、無軸陶器杯(508)・壺(509)を図示した。(508)は底部に糸切痕が残り、形態だけみればロクロ土師器杯Aと区別がつかない。SD1140は、Ⅲ-1~2期頃まで存続したのであろう。





第13図 下園東区画の土抗・溝の出土遺物 (10)

SD913 (499~500)

SD1140 (505~509)

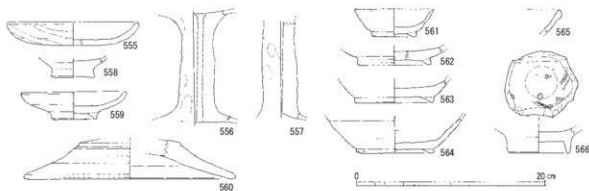
SD1167 (510)

SK1152 (511~514)

SK11186 (515~542)

SK11195 (543~544)

SK11207 (545~554)



第14図 下園東区画の土坑・溝の出土遺物 (11)

SK10877 (555~566)

**SD1167(510)** 第23次調査の北東部で、区画溝と考えられるSD1140から東に分岐するもので、東の第174-8次調査区では続きが検出されていない。Ⅲ-1~2期のものとみられる土師器高杯の脚部(510)を図示した。

**SK1152(511~514)** 第23次調査の北半で、C期のSD1141の南端に重複して掘削されている。1.8m×1.2m、深さ0.2mの不整形土坑である。小型の土師器杯B2(511)・甕A(514)、無軸陶器碗(512・513)を図示した。(514)は口縁端部を内側に丸めるように作られ、球状の胴部を持つことから、Ⅲ-2期の型式とみられる。下園東区画ではE2~F期に位置づけられる。

**SK11186(515~542)** 第10次調査の方格街区北辺道路南側溝のSD291近くで検出した、東西1.5m以上、南北1.2m、深さ0.6mの隅丸方形の土坑である。土師器杯D(515・516)・皿D(517~522)・杯B2(524~530)・台付碗(531)・甕A(532)はⅢ-1~2期の形式のものである。灰軸陶器碗(533~535)は東山72号竈式期から現れる深碗を含む。無軸陶器台付鉢(540)・碗(536~539)は、山茶碗の第2~3形式とみられる。白磁輪花碗(541)は薄手の器壁で透明感のある釉がかかり、大宰府分類のXI類に相当する。全体的に斎宮Ⅲ-2期に併行するとみられ、F期に属する。

**SK11195(543・544)** 第10次調査区内で、SD520の西側で検出した1.8m×0.9m、深さ0.25mの長楕円形土坑である。無軸陶器の台付鉢(543)・第4型式の小碗(山皿544)があり、F期に属する。

**SK11207(545~554)** 第10次調査で検出した東西1.0m以上、南北1.0m、深さ0.25mの楕円形土坑である。土師器杯D(545~549)のうち、(545~547)は口縁端部を肥厚させるⅢ-3期頃の特徴を持っている。他の杯D(548・549)・皿D(550・551)・球胴化し口縁部を内側に巻き込む甕A(552)・高杯(553)もⅢ-2期新相~3期のものとみられる。無軸陶器碗(554)は第3型式のいわゆる初期山茶碗である。こうした内容からSK11207はF期に属す。

**SK10877(555~566)** 第178-2次調査で検出した不整形土坑である。風倒木痕の可能性がある。中世的な形態に変化した土師器皿D(555)・高杯(556・557)や、Ⅲ-2~3期の柱状高台を持つロクロ土師器小型杯(558)、無軸陶器の台付小皿(559)・器台の脚部(560)、渥美湖西窯編年<sup>(4)</sup>のⅡa期頃とみられる小碗(山皿561)・碗(山茶碗562~564)が、この他に大宰府分類で白磁Ⅱ類の碗(565)・V類碗(566)があり、Ⅲ-3~4期に併行するとみられる。下園東区画F期以降のものである。

### 第3節 下園東区画を特徴づける遺物

#### (1) 墨書土器(567~575)

下園東区画で判読が可能な墨書土器の出土は少ない。調査次第別に見ていくと、下園東区画の南東隅で実施した第168次調査では、斎宮の土器編年でⅡ-1期、下園東区画の画期でA期のSK10248から須恵器杯A(567)の底部外面に「上大口」と墨書されている。三文字目はうがむりの漢字であり、「宮」などの可能性が考えられる。また、包含層から出土したⅡ-1期新相~2期古相の土師器杯A(568)の底部外面に「殿部」の墨書がある。これら(567・568)は斎宮跡の墨書土器の中でも能筆であり、特に「殿部」はこれまでに鍛冶山地区の第29次調査で「殿」と刻書した土

師器片(Ⅱ-2期頃)が、東加座地区の第57次調査で「殿司」と墨書した土師器皿(Ⅱ-1期)が出土している。第168次調査周辺は、下園東区画の中でもB期以降、S D525によって特に区画され、D期まで高い建物密度を保っている。この他S K10248からは内面に墨書のある土師器皿A 2(569)があるが判読できない。

第176次調査ではピットから須恵器皿A(570)の底部外面、Ⅱ-2～3期のS K10480から土師器碗A(571)の底部外面に漢字とみられる墨書がある。(570)は判読できないが、(571)は「桧」あるいは「終」「於」などの可能性がある。人名に関係するものだろうか、「桧」は鍛冶山地区の第44次調査で出土している。

第173次調査では、灰釉陶器碗・皿類(572～574)がある。Ⅱ-2期のS K10325のもの(574)は記号状の交差する線を描く。Ⅱ-3～4期のS K10329の(572)とⅢ-1期のS K10326の(573)はいずれも漢字とみられるが判読できない。第166次調査では、表土から底部外面に「にく□□のす口」とひらがなを墨書した山茶碗(575)が出土している。

## (2) 線刻土器(576～581)

下園東区画の南東隅に位置する、第168次調査のⅡ-1期のS K10248から出土した土師器皿A 2(576)の底部外面に「木」字状の線刻がある。

区画北西隅の第186次調査の区画西辺道路S F10850の東側溝の位置に重複する遺構からの出土が多い。Ⅱ-1期のS K10856からドーマン状の交差する5本×2本の線刻が土師器高杯(577)の見込み部に施されるもの、土師器皿A 1(579)の見込み部に「井」字状の線刻を施すもの、S D10852から土師器皿A 1(578)の底部外面に「奉」を線刻するものがある。「奉」の文字は、下園東区画南東隅近くの第156次調査でも、Ⅱ-2期古相の土器を主体とするS K9689から土師器高杯の脚部に「奉」と墨書されたものや、土師器碗A 1の外面に「奉」や「子」など多数の文字を墨書したものである。これらは、区画道路交差点付近での祭祀に用いられた可能性も考えられる。Ⅱ-1期のS K10857からは土師器皿A 1(580)の見込み部に複数の線刻がみられる。同じく下園東区画北東部の第178-2次調査区では、区画道路S F10850の東側溝に近い位置にあるS K10888からも土師器杯A(156)の内面に三本の線刻を施すものがある。「井」字状の記号は、畜宮跡では墨書のものと同様のものがあるが、ドーマン状の記号は線刻のみである<sup>(1)</sup>。

下園東区画中央付近の第177次調査のⅡ-2期の遺物が出土するS K10502からは土師器皿A 1(581)の見込み部に不定方向ながら円をつくるように複数の線刻したものがみられる。

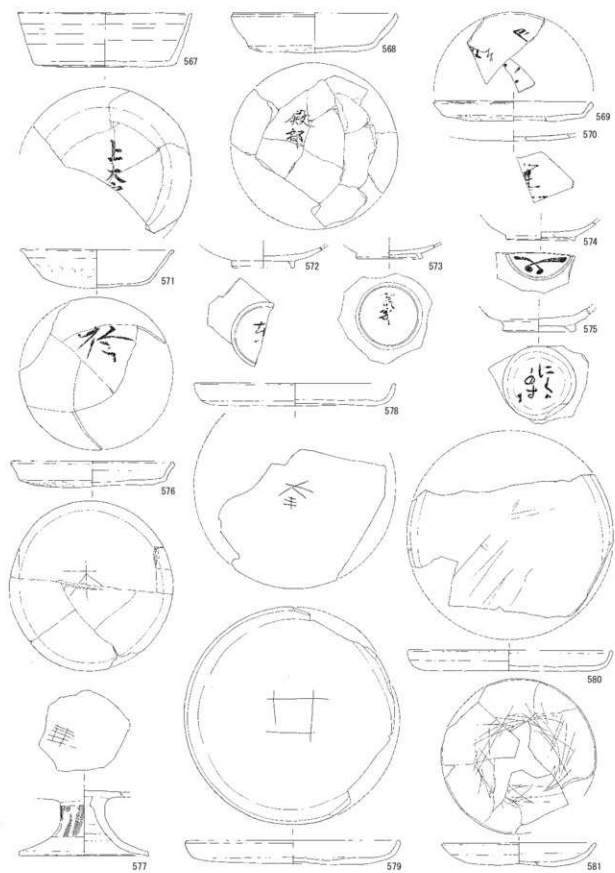
## (3) 緑釉陶器(582～595)・貿易陶磁(596～605)

下園東区画から出土した緑釉陶器は、現在管見に触れたもので約120片であり、畜宮跡の中では決して多くはない。猿投産の外面に陰刻花文を施す蓋(第166次 582)、見込み部に大きく陰刻で法相華文を施す碗(第173次 583)、把手付瓶(第173次 584)は比較的希少性もある器種といえるが、この他は無文の碗・皿類である。先述のもの以外に、猿投産とみられるもの(318・585～589)、京都産とみられるもの(590)、東濃産とみられるもの(591)、近江産とみられるもの(592～595)がある。

貿易陶磁では(596)の玉縁口縁の碗が大宰府の陶磁器分類の白磁Ⅱ類、(597)はⅣ類、(74・598～602)が白磁Ⅳ類ないしはⅤ類の碗とみられる。(603)が青白磁の合子蓋、(604)が龍泉窯系の青磁碗、(605)が同安窯系の青磁碗である。畜宮跡で出土する貿易陶磁の出土状況は、白磁Ⅰ類が畜宮跡土器編年のⅡ-3期まで遡る可能性が、白磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類はⅢ-2期頃から、同安窯・龍泉窯系の青磁はⅢ-3～4期から出現している。また、貿易陶磁類の中でもⅡ-2期頃から出現する越州窯系青磁は、南接する柳原区画や「内院」の牛業東・鍛冶山西区画の他、西加座北・南区画でも出土しているが、下園東区画では確認されていない<sup>(1)</sup>。

## (4) 硯類(606～615)

定型硯は少なく、須恵器円面硯が2点出土しているのみで、風字硯や形象硯等は出土していない。第174-8次の(606)は脚部外面に縦方向のヘラ描き沈線を、第186次調査の(607)は櫛状工具を押圧した列点文を施す。



第15図 下關東区画を特徴づける遺物(1)  
 黒書土器(567~575) 緑刺土器(576~581)

転用硯は複数見つまっている。須恵器蓋(608)、無軸陶器の碗や皿(609~611)などがある。灰軸陶器碗を転用した第174-8次の(70・612・613)は内面に朱墨の痕跡を残し、灰軸陶器片の(614・615)には赤色の顔料が付着する。

#### (5) 祭祀具類(616~618)

東接する西加座北・南区画に比べ数少ないが小型模造品の土師器甕A(616)、土師器碗(617)がある。(617)の内面は棒状工具を引っ掻くようにして成形した痕跡がそのまま残る。

第186次調査で出土した土師質の土馬(618)は中実の胴部から尾部にかけてが残存している。胴部に脚部の接合のためとみられる棒のようなものを挿入した痕跡とみられる直径約6mmの孔がある。

#### (6) 特徴的な土器類(619~627)

区画北半中央の第23次調査から灰軸陶器の香炉(619)が出土している。袴状の脚部には直径5mmの円孔が二個一対で開けられている。同様の形態の香炉は第109次の被熱痕のある体部の他、第130次調査の蓋を含め緑軸陶器のものは出土例があるが、灰軸陶器は唯一の例である。

土師器杯Aの底部に少なくとも三個の焼成後穿孔がある(620)は、下園東区画南東隅の第168次調査区S K 10247から出土しており、同じ調査区内のS K 10248から「木」字状の線刻土器(576)も出土している。

須恵器高杯(621)は第178-2次調査の包含層から出土しているが、第10次調査区S D 515出土の須恵器長頸瓶(145)と同様、本来は円墳S D 11139に伴う可能性がある。須恵器壺Gは、(622)と第18-2次調査のS K 926出土の二片(448・449)の三例がある。土師器甕(623)は第10次調査区で出土しているが、完形品でありながら出土遺構・状況はわからない。内面に煤が付着しており、使用痕はある。口径14.8cm、高さ16.0cmで、小型模造品とは言えないが小型品である。通常の大きな甕とは異なる使用目的も考えられる。小型の短頸壺である壺Eには土師器のもの(111・268・624)、須恵器のもの(625・626)がある。葉種などを保管した可能性がある。灰軸陶器の器台脚部(627)は燭台であろう。

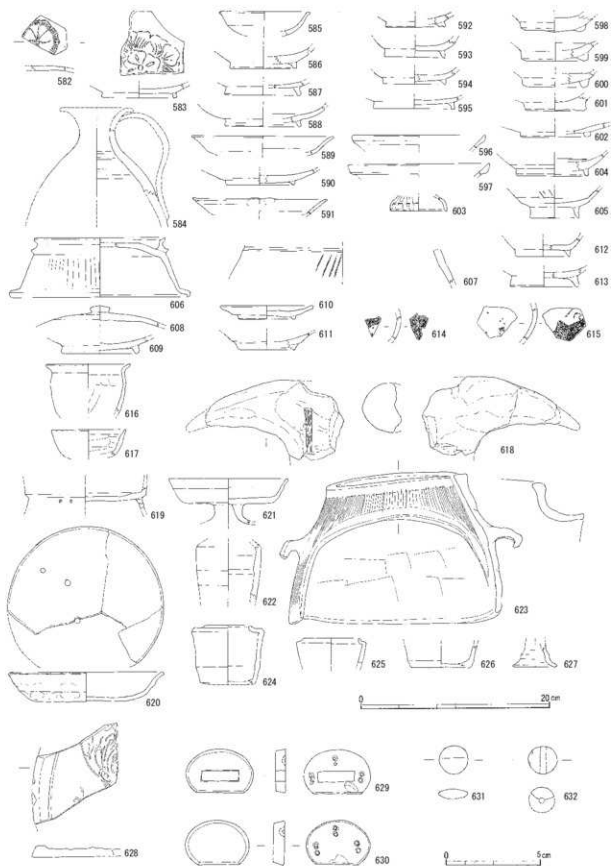
#### (7) 金属製品(628)・石製品・ガラス製品(629~632)

(628)は第23次調査で出土したとされる八花双鸞鏡の破片とみられる。破断面は研磨されておらず、意図的な破壊はうかがえない。出土状況はよくわからないが、第3章で検討を試みた。石帯(629・630)はいずれも第23次調査区のⅡ-2~3期のS B 1155の柱穴から出土したものである。いずれも丸斬で三箇所のがりがり孔を持つ。(629)は横3.5cm、縦2.3cmで方形の透かし穴を持ち、黒灰色を呈する<sup>17)</sup>。(630)は横3.4cm、縦2.3cm透かし穴を持たない灰色を呈する。(631)は第178-2次調査の表土から出土した直径1.5cm、厚さ0.5cmの白色の基石とみられるものである。(632)も第178-2次調査の表土から出土した直径1.6cmで、径3mmの穿孔がある水色のガラス玉である。このガラス玉については、平成28年度に三重県総合博物館の間瀬創氏により、ハンドヘルド型の蛍光X線分析装置を用いて成分分析を行った。その結果K(カリウム)の含有率が低く、Pb(鉛)の比率が高いことから鉛ガラスの可能性が高い。状況的に中国産が輸載された弥生時代のものとは考えにくく、朝鮮半島産の7世紀初頭~中葉のものか、国内で生産が開始された7世紀後半以降のものと推測できる。この他、加工はされていないが、Ⅱ-2期の土器類を出土する第177次調査のS K 10502から華大の石英塊が出土している。葉種などとして意図的に搬入されたものだろう。

#### (8) 製塩土器(633~636)・土鍾(637~663)

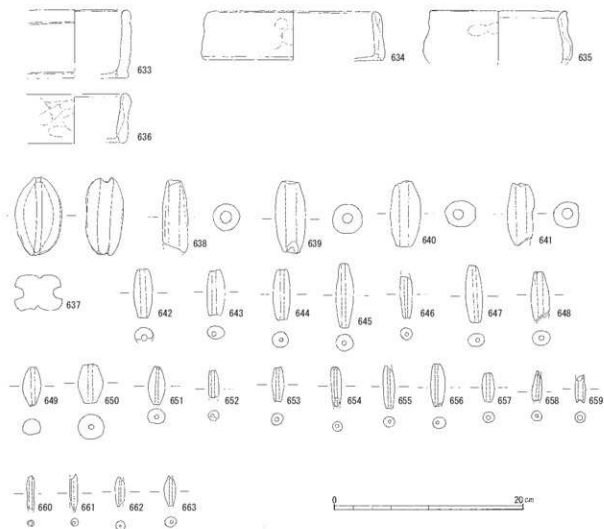
第173次調査の遺構から出土した志摩式製塩土器を掲載した。(633)はS K 10321出土のⅡ-1期のもの、S K 10325出土の(634・635)・S K 10318出土の(636)はⅡ-2期のものである。

土鍾のうち(637)は下園東区画で唯一の大型有溝土鍾である。重さ141gで四方向に綱を固定するための溝がある。外洋で使用される有溝土鍾は、この他熊谷山地区の第108次調査出の出土例があるが畜宮跡では少ない。畜宮跡で一般的な有孔土鍾では、長さ5~7cm、重さ30~70gの大型品(638~641)、長さ4~6cm、重さ6~30gの中型品(642~649)、



第16図 下園東区画を特徴づける遺物(2)

緑釉陶器(582~595) 青釉陶器(596~605) 磁器(606~615) 小型模造品(616~617) 土馬(618) その他の土器類(619~627) 金属製品(628)  
 石・ガラス製品(629~632)



第17図 下園東区画を特徴づける遺物(3)

製塩土器(633~636) 土鐘(637~663)

長さ3~4cm、重さ3~6gの小型品(650~662)がある。中型品の中でもそろばん玉状に胴部が張る(648・649)がある。これらが漁網錘とすれば、想定される漁網の目の大きさから内水面での使用が考えられるだろう。斎宮跡での土鐘の出土は、柳原地区の第143次調査のS H9001で150点以上が一括で出土している例を除き散発的だが、史跡内な各地で相当量出土しており、今後総体的にその意味を検討すべきだろう。

[註]

- (1) 第3章 斎宮跡の土器編年の再検討『斎宮跡発掘調査報告Ⅱ 柳原区画の調査 出土文物編』斎宮歴史博物館 2019  
また、他地域の土器・陶磁器との比較の上で、下記の文献を参照した。
  - ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業Ⅰ 古代 猿投系』愛知県 2015
  - ・愛知県史編さん委員会『愛知県史 別編 窯業Ⅰ 中世・近世 瀬戸系』愛知県 2007
  - ・小森俊寛『京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7~19世紀—』京都編集工房 2005
  - ・太宰府市教育委員会編『大宰府条坊跡Ⅹ—陶磁器分類編—』2000
- (2) 竹内英昭『伊賀国府跡(第6次)』『研究紀要 第13号』三重県埋蔵文化財センター 2003
- (3) 小森俊寛『京から出土する土器の編年の研究—日本律令的土器様式の成立と展開、7~19世紀—』京都編集工房 2005
- (4) 鈴木敏則『澁美湖西窯の山茶碗編年』『澁美窯編年の再構築』東海土器研究会 2013
- (5) 大川勝宏『斎宮跡の祭祀と出土遺物』『三重県史 資料編 考古2』三重県 2009
- (6) 大川勝宏『斎宮跡における平安期貿易陶磁の基礎的研究』『斎宮歴史博物館 研究紀要十九』2011
- (7) 駒田利治「一三 ■帯」『明和町史 斎宮編』明和町 2005

第1表 出土土物観察表(1)

番号	登録番号	器種	器形	調査次数	通稱・部位	法量(m)	調査・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	報道09-02	土師器	杯A	23次	S81170	口径 14.0 残高 3.2	口縁部コナデ、体部ナデ	密	良	明赤黒 5185/8	口縁の1/4	器表面の 磨耗量多い
2	報道09-01	土師器	碗A1	23次	S81170	口径 18.4 残高 4.0	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5186/8	全体の 約90%	器表面の 磨耗量多い
3	報道09-03	須恵器	杯A	23次	S81180	口径 6.5 残高 2.0	体部口クロナデ、底部外面口クロナ ズリ	密 →3mmの小石含む	良	灰黄 2.517/2	底縁の 約1/4	
4	報道09-04	須恵器	杯B	23次	S81180	口径 9.4 残高 3.0	体部口クロナデ、貼付高台	密	良	灰白 517/2	高台縁の 1/6	
5	報道09-05	須恵器	長頸壺	23次	S81180	口径 10.2 残高 2.9	体部口クロナデ、貼付高台、底部外面 糸切痕	密	良	灰黄 2.517/2	高台縁の 1/4	内面に自然 継ぎ目
6	報道18-01	土師器	杯A	23次	S81160	口径 14.4 残高 3.2	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5186/6	口縁の 1/4	
7	報道18-02	須恵器	盃台?	23次	S81160	口径 13.2 残高 2.2	口縁部コナデ、体部口クロナデ	密	やや軟	焼 5185/2	高台縁の 1/12	
8	報道38-04	土師器	杯A	18-2次	S8935	口径 13.8 残高 3.2	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5187/6	口縁の 1/12	
9	報道38-05	土師器	皿A	18-2次	S8935	口径 14.4 残高 1.5	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 7.5187/6	口縁の 1/12	
10	報道36-05	土製品	土埴	18-2次	S8935	全長 高さ 4.1 径 2.834	外面ナデ	密	良	焼 5186/6	全体の 約90%	
11	報道21-01	土師器	甕C	178-2次	S810873	口径 27.6 残高 3.3	口縁部コナデ	密	良	灰黄緑 10185/3	口縁の 1/12	
12	報道21-03	土師器	杯A	178-2次	S810873	口径 15.8 残高 3.2	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5186/6	口縁の 1/12	
13	報道21-02	須恵器	盃	178-2次	S810873	口径 18.8 残高 2.7	口縁部コナデ、体部外面口クロナ ズリ・内面口クロナデ	密	良	灰白 7.517/1	口縁の 1/12	
14	報道34-04	土師器	杯A	18-2次	S8930	口径 13.0 残高 1.9	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰白 2.517/1	口縁の 1/12	
15	報道34-01	土師器	皿A1	18-2次	S8930	口径 18.0 残高 2.5	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5186/6	口縁の 1/12	
16	報道34-08	土師器	甕A	18-2次	S8930	口径 約12.0 残高 6.9	口縁部コナデ、体部外面タテハケ・ 内面ヨコハケ	密	良	にぶい焼 7.5187/4	口縁の 1/6	
17	報道34-02	土師器	甕C	18-2次	S8930	口径 23.8 残高 2.5	口縁部コナデ	密	良	灰黄緑 5186/6	-	
18	報道34-06	土師器	盃	18-2次	S8930	残高 2.5	外面ナデ	密	良	焼 5187/6	つまみ部 のみ残	
19	報道34-03	須恵器	盃	18-2次	S8930	残高 1.1	外面口クロナデ	密	良	灰 7.516/1	口縁の 1/12	
20	報道34-05	須恵器	盃	18-2次	S8930	口径 15.8 残高 1.6	口縁部コナデ、体部外面口クロナ ズリ・内面口クロナデ	密	良	灰白 7.517/1	口縁の 1/12	
21	報道34-07	須恵陶器	盃	18-2次	S8930	口径 12.0 残高 4.3	外面口クロナズリ、内面口クロナデ	密	良	灰黄 2.517/2	底縁の 1/6	
22	報道18-03	土師器	杯A	174-8次	S811130	口径 14.4 残高 3.0	口縁部コナデ、体部ナデ	密	良	灰白 10188/2	口縁の 1/12	
23	報道18-05	土師器	皿A2	174-8次	S811130	口径 20.2 残高 2.2	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5187/6	口縁の 1/4	
24	報道18-04	須恵器	碗	174-8次	S811130	口径 15.8 残高 3.2	口縁部コナデ、体部口クロナデ	密	良	灰白 517/1	口縁の 1/6	
25	008-04	土師器	杯A	177次	S810490	口径 14.2 残高 2.8	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5186/6	口縁の 1/12	
26	008-03	土師器	杯A	177次	S810490	口径 17.6 残高 3.5	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5186/6	口縁の 1/12	
27	012-01	土師器	杯A	177次	S810490	口径 17.5 残高 4.0	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5186/6	口縁の 1/12	内面に墨痕
28	008-02	土師器	皿A2	177次	S810490	口径 21.4 残高 2.1	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい焼 7.5186/4	口縁の 1/12	底部に粘土 接合痕
29	008-05	土師器	瓶	177次	S810490	口径 14.6 残高 14.5	体部外面タテハケ、底部付近ヘラケ ズリ、内面ヘラケズリ	密	良	にぶい焼 7.5186/4	全体の 1/3	外面にスス 付着
30	009-01	土師器	甕A	177次	S810490	口径 21.1 残高 17.0	口縁部コナデ、体部外面タテハケ・底方向ヘ ラケ、体部内底ヨコハケ・下ヘラケズリ	密	良	にぶい焼 7.5186/4	全体の 約30%	外面にスス 付着
31	008-01	須恵器	盃	177次	S810490	口径 14.6 残高 2.3	口縁部コナデ、体部内外面口クロ ナデ	密	良	灰 516/1	口縁の 1/4	
32	報道21-04	土師器	杯A	178-2次	S810887	口径 13.8 残高 2.6	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5186/6	口縁の 1/12	
33	006-02	土師器	皿A1	180次	S810630	口径 19.4 残高 2.4	口縁部コナデ、外面ヘラケズリ・ 内面ナデ	密	良	焼 5187/8	口縁の 1/12	
34	006-03	須恵器	平瓶	180次	S810630	口径 13.0 残高 1.9	体部外面口クロナデ・口クロナズリ・ 内面口クロナデ	密	良	灰黄 2.517/2	底縁の 1/6	
35	報道31-01	土師器	杯A	18-1次	S8900	口径 13.2 残高 3.0	口縁部コナデ、体部ナデ	密	良	にぶい焼 7.5187/3	口縁の 1/6	
36	報道31-02	土師器	皿A2	18-1次	S8900	口径 14.0 残高 2.1	口縁部コナデ、体部ナデ	密	良	焼 7.5186/6	口縁の 1/6	
37	報道31-03	土師器	皿A1	18-1次	S8900	口径 13.8 残高 2.1	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5186/6	口縁の 1/6	
38	報道31-04	土師器	甕	18-1次	S8900	残高 3.0	口縁部コナデ	密 底部に砂粒多い	良	にぶい焼 7.5187/4	-	
39	報道31-05	土師器	甕	18-1次	S8900	残高 2.2	口縁部コナデ	密 底部に砂粒多い	良	灰黄緑 7.5186/6	-	
40	報道31-06	土師器	盃	18-1次	S8900	残高 2.9	口縁部コナデ、内面ケズリ	密 底部に砂粒多い	良	にぶい焼 10187/3	-	
41	報道31-09	須恵器	杯A	18-1次	S8900	口径 13.1 残高 4.1	口縁部コナデ、体部口クロナデ・ 底部外面ナデ	密	良	灰 7.516/1	口縁の 1/12	
42	報道31-07	須恵器	杯B	18-1次	S8900	口径 9.0 残高 1.8	体部口クロナデ、貼付高台、底部外面 ナデ	密	良	灰 7.516/1	高台縁の 1/6	
43	報道35-04	灰釉陶器	段皿	18-2次	S8932	口径 18.0 残高 2.6	体部口クロナデ、口縁部コナデ・ 灰釉縁取り	密	良	黒地・灰黄 2.517/2 緑・黄褐色 865	全体の 約1/4	
44	報道37-04	須恵器	盃	18-2次	S8932	口径 19.2 残高 2.1	口縁部口クロナデ	密	良	灰白 1017/1	口縁の 1/12	
45	報道37-01	土製品	土管	18-2次	S8932	口径 16.5 残高 10.5	外面タテハケ、内面ヨコハケ・ 貼付交番	密	良	にぶい焼 7.5187/4	口縁の 1/6	被熱痕あり



第2表 出土遺物観察表(2)

番号	登録番号	器種	器形	調査次数	通稱・部位	流量(m)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存率	備考
46	010-02	土師器	皿A 2	177次	S810511	口径 15.7 底径 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 5Y86/6	1/6	体部に粘土 接合痕
47	010-03	土師器	皿A 2	177次	S810512	口径 15.3 底径 1.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 2.036/8	口縁の 1/12以上	
48	010-04	灰輪陶器	蓋	177次	S810512	口径 10.7 底径 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ロコナデ	密	良	黄緑: 灰白 2.5/7/1 黄: 緑色 938	口縁の 1/12	内面に重ね 焼き痕
49	010-05	灰磁器	高杯	18-2次	S80931	口径径 5.8 底径 2.3	体部ロコナデ、内面ナデ	密	良	灰白 2.5/7/1	体部の 1/12	内面に黒色 物付き
50	010-06	灰輪陶器	椀	18-2次	S80931	口径 7.2 底径 2.3	体部ロコナデ、貼付高台、灰輪 掛け跡か	密	良	黄緑: 灰白 2.5/7/2 黄: 山黄 849	台縁の 1/3	
51	010-07	灰輪陶器	椀	18-2次	S80931	口径 10.4 底径 2.8	体部ロコナデ、灰輪 掛け跡か	密	良	灰白 2.5/7/1	台縁の 1/6	
52	010-08	土師器	杯A	18-2次	S80924	口径 7.0 底径 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 5Y86/6	口縁の 1/12以下	
53	010-09	土師器	杯D	18-2次	S80924	口径 13.1 底径 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄黄緑 7.0Y83/6	口縁の 1/6	
54	010-10	土師器	杯A	18-2次	S80924	口径 13.8 底径 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 7.5Y86/6	口縁の 1/12	
55	010-11	土師器	皿A	18-2次	S80924	口径 12.8 底径 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 7.5Y87/6	口縁の 1/12	
56	001-05	土師器	杯A	18-2次 173次	S80929	口径 15.1 底径 2.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 7.5Y87/6	口縁の 1/12	
57	001-04	灰磁器	杯B	18-2次 173次	S80929	口径 9.6 底径 3.6	体部ロコナデ、貼付高台、底部外 面糸切痕	密	良	灰白 5/7/1	高台縁の 1/12	黄緑の砂多 い
58	001-06	灰輪陶器	皿	18-2次 173次	S80929	口径 7.5 底径 1.7	体部ロコナデ、貼付高台、底部外 面糸切痕	密	良	黄緑: 灰白 2.5/7/1 黄: 砂色 900	高台縁の 1/6	
59	010-02	土師器	杯A	18-2次	S80933	口径 14.8 底径 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 7.5Y87/6	口縁の 1/12	
60	010-03	土師器	椀A 2	18-2次	S80933	口径 16.0 底径 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 7.5Y87/6	口縁の 1/12	
61	010-08	土師器	甕C	18-2次	S80933	口径 27.4 底径 4.1	口縁部ヨコナデ、体部内面ヨコハケ・ 外面ハケカ	密	良	黄黄緑 10Y83/3	口縁の 1/12	
62	010-04	黒色土師 入瓶	椀	18-2次	S80921	口径 10.9 底径 3.2	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	密	良	黄緑 10Y85/1	口縁の 1/12	
63	010-02	黒色土師 入瓶	椀	18-2次	S80921	口径 7.2 底径 1.6	内外面ナデ、貼付高台	密	良	黄緑 10Y6/1	台縁の 1/4	
64	010-04	土師器	皿D	174-8次	S811150	口径 9.6 底径 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰白 10Y89/2	全体の 約70%	
65	010-06	土師器	小型杯	174-8次	S811150	口径 4.4 底径 2.3	体部ロコナデ、底部外面糸切痕	密	良	黄黄緑 10Y83/3	高台部 のみ残存	
66	010-05	無釉陶器 (山形陶)	椀	174-8次	S811150	口径 7.6 底径 3.4	体部ロコナデ、貼付高台、底部外 面糸切痕	密	良	灰白 5/7/1	口縁の 1/2	内面に黒色 物あり
67	010-03	土師器	高杯	174-8次	S811140	口径 12.7 底径 3.8	外面ナデ、7~8面の面取り	密	良	黄黄 5Y83/3	—	
68	010-02	灰輪陶器	椀	174-8次	S811140	口径 6.2 底径 1.8	体部ロコナデ、貼付高台、底部外 面ナデ	密	良	灰白 5/7/1	高台縁の 1/6	見込みに 黒痕
69	010-01	無釉陶器 (山形陶)	椀	174-8次	S811140	口径 8.4 底径 1.8	体部ロコナデ、貼付高台、底部外 面糸切痕	密	良	黄黄緑 2.5/7/2	高台縁の 1/4	
70	010-01	土師器	皿D	174-8次	S811149	口径 8.9 底径 1.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄黄緑 7.5Y83/4	全体の 約40%	外面に黒痕
71	010-02	土師器	杯B 2	174-8次	S811149	口径 6.3 底径 3.3	体部ナデ、貼付高台	密	良	黄 5Y86/6	高台部 のみ残存	
72	010-03	土師器	杯	174-8次	S811149	口径 4.4 底径 1.5	体部ロコナデ、底部外面糸切痕	密	良	黄黄緑 10Y87/3	底縁の 1/2	
73	010-02	土師器	台付鉢	178-2次	S810882	口径 12.8 底径 5.0	体部内外面ナデ、貼付高台	密	良	黄黄緑 10Y83/3	高台縁 の1/2	
74	010-01	白磁	椀	174-8次	S811170	口径 10.4 底径 3.4	体部ロコナデ、見込みに黒痕	緻密	良	黄緑: 灰白 2.5/7/2 黄: 黒色 947	口縁の 1/4	大塚野山 のV型
75	010-01	灰磁器	鉢	23次	S81156	口径 14.7 底径 8.0	体部ロコナデ、口縁部ヨコナデ、 底部外面ロコナデ	緻密	良	灰白 2.5/7/1	全体の 約70%	
76	010-01	土師器	杯A	23次	S81156	口径 15.8 底径 3.8	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、底部外 面ヘラズリ	密	良	黄 5Y86/6	全体の 約70%	
77	010-03	土師器	甕	23次	S81156	口径 31.8 底径 3.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部外 面ヘラズリ	密	良	黄 7.5Y86/6	全体の 約70%	
78	010-04	土師器	杯A	10次	S81205	口径 11.9 底径 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黄 5Y86/8	全体の 約40%	
79	010-01	土師器	甕C	10次	S81205	口径 26.1 底径 2.4	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ 内面ヨコハケ	密	良	黄 5Y86/8	全体の 約70%	
80	010-04	灰磁器	長頸壺	10次	S81205	口径 7.8 底径 5.1	体部ロコナデ、貼付高台、底部外 面糸切痕	密	良	オリーブ灰 2.50/1/1	高台縁の 1/6	
81	010-06	灰磁器	高杯	10次	S81205	口径 11.8	外面ナデ、内面シボリ痕	密	良	灰白 2.5/7/1	脚付部 のみ	
82	010-20-3	土師器	杯G	10次	S0620	口径 12.8 底径 4.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 2.5/6/2	全体の 約70%	内面に黒色 物付き
83	010-02	土師器	杯G	10次	S0620	口径 13.4 底径 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	灰白 2.5/8/2	口縁の 1/6	
84	010-24-05	土師器	杯A	10次	S0620	口径 14.2 底径 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黄黄緑 10Y87/4	口縁の 1/12	
85	010-23-06	土師器	杯A	10次	S0620	口径 12.2 底径 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 5Y86/6	口縁の 1/12	
86	010-04-05	土師器	杯A	10次	S0620	口径 12.9 底径 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 5Y86/6	全体の 約20%	
87	010-24-03	土師器	杯A	10次	S0620	口径 13.4 底径 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黄 5Y86/6	全体の 1/3	
88	010-24-06	土師器	杯A	10次	S0620	口径 13.6 底径 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黄黄緑 10Y87/4	口縁の 1.5	
89	010-24-02	土師器	杯A	10次	S0620	口径 14.4 底径 3.7	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ・ オサエ	密	良	黄 5Y86/6	口縁の 1/12	
90	010-18-03	土師器	杯A	10次	S0620	口径 14.6 底径 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 5Y86/6	口縁の 1/6	

第3表 出土文物観察表(3)

番号	登録番号	器種	器形	調査次数	通溝・層位	法量(m)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考
91	塚田04-02	土師器	杯A	10次	S0620	口径 15.8 底径 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR7/6	全体の約20%	
92	塚田04-04	土師器	杯A	10次	S0620	口径 15.8 底径 3.6	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、底部外面ヘラケズリ	密	良	焼 5YR6/6	口縁の1/10	
93	塚田23-04	土師器	杯A	10次	S0620	口径 16.3 底径 3.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	焼 5YR6/6	口縁の1/5	
94	塚田21-06	土師器	杯A	10次	S0620	口径 17.0 底径 3.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ・内面ナデ	密	良	焼 5YR6/8	口縁の約50%	体部に粘土接合痕
95	塚田05-02	土師器	椀A 2	10次	S0620	口径 17.8 底径 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 2.5YR6/8	全体の約20%	
96	塚田04-01	土師器	椀A 2	10次	S0620	口径 19.2 底径 4.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR7/6	全体の約50%	
97	塚田18-06	土師器	杯A	10次	S0620	口径 14.8 底径 3.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR7/6	全体の約80%	
98	塚田04-07	土師器	杯D	10次	S0620	口径 12.5 底径 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR6/6	全体の約15%	
99	塚田05-04	土師器	椀B	10次	S0620	口径 12.0 底径 4.1	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ、貼付高台	密	良	焼 5YR7/8	高台部の約10%	
100	塚田24-04	土師器	椀A 2	10次	S0620	口径 11.2 底径 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	焼 7.5YR7/6	口縁の2/5	
101	塚田20-01	土師器	椀A 2	10次	S0620	口径 11.9 底径 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 7.5YR7/6	全体の約30%	
102	塚田18-07	土師器	皿A 1	10次	S0620	口径 16.6 底径 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR6/6	全体の約20%	
103	塚田20-04	土師器	皿A 1	10次	S0620	口径 16.7 底径 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 7.5YR7/6	全体の約80%	
104	塚田22-03	土師器	皿A 1	10次	S0620	口径 17.6 底径 2.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 7.5YR6/6	全体の約50%	底面に粘土接合痕
105	塚田21-05	土師器	皿A 2	10次	S0620	口径 15.7 底径 2.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ・内面ナデ	密	良	焼 5YR6/6	口縁の約1/4	
106	塚田22-02	土師器	皿A 2	10次	S0620	口径 15.6 底径 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR6/6	全体の約30%	
107	塚田22-04	土師器	皿A 2	10次	S0620	口径 15.6 底径 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR6/6	全体の約30%	
108	塚田24-01	土師器	皿A 2	10次	S0620	口径 16.4 底径 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	焼 5YR6/6	口縁の1/10	
109	塚田21-07	土師器	皿A 2	10次	S0620	口径 18.2 底径 2.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ・内面ナデ	密	良	焼 5YR7/6	全体の約1/2	
110	塚田22-07	土師器	皿B 2	10次	S0620	口径 19.6 底径 4.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ、貼付高台、底付高台にハケ目、裏面内面ナデ	密	良	焼 5YR6/6	全体の約30%	底径カ
111	塚田24-09	土師器	壺	10次	S0620	口径 6.2 底径 2.7	外面タテ方向のナデ、内面不定方向のナデ	密	良	焼 5YR6/6	底径の約1/3	
112	塚田21-04	土師器	壺	10次	S0620	口径 9.1 底径 3.8	体部外面板ナデ・内面ナデ、底部外ナデ	密	良	焼 7.5YR7/6	底径の約1/10	
113	塚田18-05	土師器	甕A	10次	S0620	口径 14.4 底径 7.3	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・内面板ナデ	密	良	焼 5YR6/6	口縁の約1/3	
114	塚田18-04	土師器	甕A	10次	S0620	口径 23.1 底径 8.7	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・内面ヨコハケ	密	良	焼 5YR6/6	口縁の1/5	
115	塚田22-05	土師器	甕A	10次	S0620	口径 22.6 底径 6.0	口縁部ヨコナデ、体部外面斜め方向のハケ、内面ヨコハケ	密	良	にぶい焼 7.5YR7/4	口縁の1/6	
116	塚田22-05	土師器	甕C	10次	S0620	口径 24.0 底径 5.9	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・内面ヨコハケ	密	良	にぶい焼 7.5YR7/4	口縁の1/12	
117	塚田25-01	土師器	甕C	10次	S0620	口径 27.8 底径 6.2	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・内面ヨコハケ	密	良	焼 7.5YR7/6	口縁の約1/3	
118	塚田02-06	土師器	短頸壺	10次	S0620	口径 13.2 底径 3.0	口縁部ヨコナデ、体部をわずかに内側に肥厚させる、体部内外面ナデ	密	良	にぶい焼 5YR6/6	口縁の1/3	
119	塚田02-07	土師器	短頸壺	10次	S0620	口径 12.8 底径 3.0	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	密	良	焼 5YR6/6	口縁の1/3	
120	塚田03-01	土製品	土管	10次	S0620	口径 - 底径 9.0	外面タテハケ、内面ヨコハケ、貼付突帯	密	良	にぶい焼 7.5YR7/4	100%以下	外面にスズ状の黒色物付着
121	塚田20-02	土製品	蓋	10次	S0620	口径 - 底径 2.5	体部外面クロコズリ・内面クロコズリ・ナデ、貼付つまみ	密	良	灰白 2.5Y7/1	全体の約10%	
122	塚田22-01	土製品	蓋	10次	S0620	口径 16.8 底径 3.4	口縁部ヨコナデ、体部外面クロコズリ・内面クロコズリ、貼付つまみ	密	良	灰黄 2.5W/2	全体の約50%	
123	塚田24-08	土製品	杯B	10次	S0620	口径 12.0 底径 3.8	口縁部ヨコナデ、体部クロコナデ、底部外面クロコズリ、貼付高台	密	良	灰 7.5W/1	全体の約30%	
124	塚田04-06	土製品	杯B	10次	S0620	口径 11.8 底径 3.6	口縁部ヨコナデ、体部クロコナデ、貼付高台、底部内面ナデ	密	良	灰黄黒 10YR6/2	全体の約50%	
125	塚田23-03	土製品	杯B	10次	S0620	口径 20.2 底径 6.1	口縁部ヨコナデ、体部クロコナデ、底部外面黒切縁クロコズリ、貼付高台	密	良	灰黄 2.5Y7/2	全体の約50%	
126	塚田23-01	土製品	杯B	10次	S0620	口径 17.6 底径 2.0	内面クロコナデ・ナデ、底部外面クロコズリ、貼付高台	密	良	灰黄 2.5Y7/2	全体の約50%	
127	塚田18-01	土製品	盤	10次	S0620	口径 18.8 底径 4.5	口縁部ヨコナデ、体部外面クロコズリ・内面クロコズリ	密	良	灰白 2.5Y7/1	口縁の1/10	
128	塚田23-02	土製品	皿A	10次	S0620	口径 17.5 底径 2.8	口縁部ヨコナデ、体部クロコナデ、底部外面ヘラ切後ナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	1/4	毎に黒色・赤色の付着
129	塚田18-02	土製品	台付盤	10次	S0620	口径 11.8 底径 4.0	体部クロコナデ、見込みナデ、底部外面クロコズリ、貼付高台	密	良	灰黄 2.5Y7/2	全体の約50%	
130	塚田25-02	土製品	椀ハ	10次	S0620	口径 11.1 底径 4.0	口縁部ヨコナデ、体部クロコナデ	密	良	灰黄 2.5W/2	口縁の1/12	
131	塚田23-05	土製品	見付短頸壺	10次	S0620	口径 9.2 底径 2.9	口縁部ヨコナデ、体部クロコナデ、腹次の耳を2箇所以上貼付	密	良	暗灰黄 2.5Y5/2	口縁の1/12	口縁部内側に自然釉
132	塚田04-03	土製品	鉢	10次	S0620	口径 12.5 底径 3.7	口縁部ヨコナデ、体部クロコナデ	織漉	良	灰白 5W/2	口縁の1/4	
133	塚田05-05	土製品	長頸瓶	10次	S0620	口径 7.4 底径 7.1	口縁部ヨコナデ、体部クロコナデ	密	良	灰 5Y6/1	口縁の3/4	
134	塚田05-01	土製品	盤	10次	S0620	口径 - 底径 10.5	口縁部ヨコナデ、体部クロコナデ、内面のナデ	密	良	灰白 5Y7/2	口縁の1/10以下	
135	塚田25-04	土師器	杯G	10次	S0615	口径 13.1 底径 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄焼 10YR7/4	口縁の約1/6	底面に粘土接合痕

第4表 出土遺物観察表(4)

番号	登録番号	器種	器形	調査次数	通溝・層位	流量(m)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
136	墳田26-05	土師器	杯A	10次	SD615	口縁 12.6 底高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR7/6	口縁の 1/6	
137	墳田25-07	土師器	杯A	10次	SD615	口縁 14.7 底高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	にぶい黄緑 10YR3/3	口縁の 1/10以下	
138	墳田26-04	土師器	杯A	10次	SD615	口縁 14.8 底高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 7.5YR7/6	口縁の 1/6	
139	墳田25-05	土師器	皿A1	10次	SD615	口縁 13.1 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄緑 10YR8/4	口縁の 1/6	
140	墳田26-02	土師器	高杯	10次	SD615	残高 6.9	外面ヘラケズリで10箇の指取り、内面ナデ、脚部底ヨコナデ	密	良	黄 2.5YR6/6	脚部のみ 残存	
141	墳田26-01	土師器	高杯	10次	SD615	口縁 24.3 底高 7.5	口縁部ヨコナデ、体部外ハナリ、内面ナデ、脚部外ハナリで10箇の指取り、内面ナデ	密 ~1.5mmの小石含む	良	黄 5YR6/6	口縁の 1/2	
142	墳田25-03	煎豆器	蓋	10次	SD615	口縁 14.7 底高 2.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ヨコナデナリ、内面ヨコナデ、取付つまみ	密 ~2mmの小石含む	良	灰 5Y/1	口縁の 1/2	
143	墳田25-06	煎豆器	杯A	10次	SD615	口縁 11.9 底高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、底部外面ヨコナデナリ	密 ~1.5mmの小石含む	良	にぶい黄緑 10YR6/3	口縁の 1/6 4/5	
144	墳田26-03	煎豆器	杯B	10次	SD615	口縁 17.3 底高 2.8	体部ヨコナデ、取付高台、底部外面ヨコナデナリ	密 ~3mmの小石含む	良	黄 2.5Y7/3	高台のみ 残存	
145	墳田27-04	煎豆器	長頸瓶	10次	SD615	残高 11.3	頸部内外面ヨコナデ、外面に一条の7枚襷	密 ~3mmの小石含む	良	灰 N4/	頸部のみ 残存	
146	墳田27-03	煎豆器	こね鉢	10次	SD615	口縁 9.0 底高 6.8	体部ヨコナデ、底部外面ナデのちり4~2mmの穿孔を約90箇所	密	良	灰白 5Y7/1	頸部のみ 残存	
147	墳田12-01	煎豆器	皿B	10次	SD629	脚部 35.4	脚部外面平行リタギ目のナデ、内面ナデ+オサエ、取付突起	密	良	灰白 5Y7/2	脚部のみ 残存	
148	墳田01-03	土師器	甕C	25-60次	SD1627	口縁 — 残高 2.7	口縁部ヨコナデ	密	良	黄緑 10YR8/3	口縁の 1/12以下	
149	墳田06-06	土師器	杯G	178-2次	SK10888	口縁 12.4 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ+オサエ	密	良	にぶい黄緑	全体の 約90%	
150	墳田06-04	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 13.4 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	にぶい黄 7.5YR7/4	全体の 約50%	底部に粘土 接合痕
151	墳田07-08	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 12.6 底高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 7.5YR7/6	全体の 約90%	
152	墳田07-07	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 13.4 底高 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR7/6	全体の 約90%	
153	墳田06-03	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 13.4 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR7/6	全体の 約50%	
154	墳田06-02	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 13.4 底高 2.8	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、底部外面ヘラケズリ	密	良	黄 5YR7/8	全体の 約90%	
155	墳田06-01	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 13.6 底高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黄 5YR7/6	全体の 約50%	
156	墳田07-04	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 13.4 底高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR7/6	全体の 約90%	内面に三条 の線刻
157	墳田07-05	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 13.4 底高 3.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR7/6	全体の 約90%	
158	墳田07-01	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 16.2 底高 4.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR6/6	口縁の 2/3	
159	墳田07-02	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 17.2 底高 3.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黄 5YR7/6	口縁の 3/4	
160	墳田07-03	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 16.9 底高 4.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	にぶい黄 7.5YR6/4	全体の 約50%	
161	墳田07-06	土師器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 16.8 底高 3.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR7/6	全体の 約40%	
162	墳田06-08	土師器	碗A2	178-2次	SK10888	口縁 9.8 底高 3.1	内面ナデ、体部外面ヘラケズリ、底部外面ナデ	緻密	良	黄 5YR6/6	全体の 約90%	
163	墳田06-07	土師器	碗A2	178-2次	SK10888	口縁 11.4 底高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 7.5YR7/6	全体の 約90%	
164	墳田06-05	土師器	碗A1	178-2次	SK10888	口縁 16.2 底高 1.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黄 5YR7/8	全体の 約90%	
165	墳田13-03	土師器	皿A2	178-2次	SK10888	口縁 16.1 底高 1.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR6/6	全体の 約40%	
166	墳田09-05	土師器	皿A2	178-2次	SK10888	口縁 17.8 底高 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR6/6	全体の 約30%	
167	墳田09-06	土師器	皿A2	178-2次	SK10888	口縁 18.4 底高 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR7/6	全体の 約40%	
168	墳田09-02	土師器	皿A2	178-2次	SK10888	口縁 19.0 底高 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	にぶい黄 7.5YR7/4	全体の 約70%	
169	墳田09-03	土師器	皿A2	178-2次	SK10888	口縁 17.6 底高 2.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR6/6	全体の 約90%	
170	墳田05-01	土師器	皿A2	178-2次	SK10888	口縁 17.0 底高 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR7/8	全体の 約40%	
171	墳田09-04	土師器	皿A2	178-2次	SK10888	口縁 17.6 底高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR7/6	全体の 約40%	
172	墳田13-02	土師器	皿A2	178-2次	SK10888	口縁 16.8 底高 1.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+オサエ	密	良	黄 5YR6/8	全体の 約90%	
173	墳田13-01	土師器	皿A1	178-2次	SK10888	口縁 17.4 底高 2.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	黄 5YR6/8	全体の 約90%	
174	墳田04-03	土師器	甕A	178-2次	SK10888	口縁 16.4 底高 11.5	口縁部ヨコナデ、体部内面ヨコハケ、外面襷、上を脚部で吊り	密	良	7.5YR7/6	口縁の 1/13	
175	墳田04-02	土師器	甕C	178-2次	SK10888	口縁 28.6 底高 7.3	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ、内面ヨコハケ	密	良	にぶい黄 7.5YR7/4	口縁の 7/12	
176	墳田13-04	土師器	甕A	178-2次	SK10888	口縁 14.8 底高 7.1	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ	密	良	灰白 2.5YR/2	口縁の 5/12	
177	墳田02-01	土師器	平底鉢	178-2次	SK10888	口縁 26.8 底高 12.2	口縁部ヨコナデ、体部内外面上部ナデ+下部ヘラケズリ	密	良	黄 5YR6/6	全体の 約90%	
178	墳田11-06	煎豆器	杯A	178-2次	SK10888	口縁 16.4 底高 4.0	口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、底部外面ケズリ	密	やや 灰白	灰白 2.5YR/2	全体の 約90%	口縁部に 捺押痕
179	墳田11-03	煎豆器	杯B	178-2次	SK10888	口縁 12.6 底高 3.8	口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ、底部外面ヨコナデナリ	密	良	灰黄 2.5YR/2	全体の 約90%	高台の有無 は不明
180	墳田11-04	煎豆器	杯B	178-2次	SK10888	口縁 16.8 底高 2.5	体部ヨコナデ、取付高台、底部外面ケズリ後ナリ	密	良	灰 5Y/1	高台のみ 5/12	

第5表 出土土物観察表(5)

番号	登録番号	種類	形状	調査次数	通径・厚径	法量(m)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考
181	塚田11-05	煎茶器	杯B	178-2次	SK10888	口径 13.2 器高 3.6	白緑部ヨコナダ、体露ロコロナダ、胎付高台、底部外面ケズリ	密	良	黄沢 2.515/1	全体の約90%	
182	塚田13-06	煎茶器	杯B	178-2次	SK10888	口径 13.8 器高 4.1	白緑部ヨコナダ、体露ロコロナダ、胎付高台、底部外面ロコロナダ	密	良	灰 7.515/1	全体の約40%	
183	塚田13-05	煎茶器	杯B	178-2次	SK10888	口径 18.0 器高 4.9	白緑部ヨコナダ、体露ロコロナダ、胎付高台、底部外面ケズリ	密	良	灰白 517/1	全体の約20%	
184	塚田11-02	煎茶器	蓋	178-2次	SK10888	口径 13.6 器高 2.3	白緑部ヨコナダ、体露外面ロコロナダ、内面ナダケ	密	良	灰 515/1	全体の約7%	
185	塚田11-01	煎茶器	蓋	178-2次	SK10888	口径 15.4 器高 2.4	白緑部ヨコナダ、体露外面ロコロナダ、内面ロコロナダ	密	良	灰黄 2.516/2	全体の約30%	
186	塚田10-01	煎茶器	把 壺付	178-2次	SK10888	口径 31.2 器高 5.9	白緑部ヨコナダ、体露ロコロナダ、把子彫り彫付	密	良	灰白 517/1	口径の1/12	
187	塚田12-01	煎茶器	皿A	178-2次	SK10888	口径 17.0 器高 2.9	白緑部ヨコナダ、器底を内側に折り返す、体露ロコロナダ、底部ヘラ切付	密	良	灰白 517/1	全体の約5%	内面に「定」の浅彫りあり
188	塚田11-07	製瓶土器	刀型式 製瓶土器	178-2次	SK10888	口径 - 器高 7.3	内外面ナダ・オサエ	密	良	黄 5186/8	-	
189	塚田09-02	鉄製品	刀子小	178-2次	SK10888	刃長 4.0 柄長 1.5	-	-	-	-	-	-
190	塚田08-04	鉄製品	刀子小	178-2次	SK10888	刃長 5.1 柄長 1.5	-	-	-	-	-	-
191	塚田11-01	土師器	杯A	178-2次	SK10883	口径 18.9 器高 3.7	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 2.5186/8	全体の約90%	
192	塚田16-03	土師器	碗A 2	178-2次	SK10883	口径 12.2 器高 3.1	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 7.5187/6	全体の約7%	
193	塚田16-05	土師器	高杯	178-2次	SK10883	口径 8.0 器高 4.1	器部外面ヘラケズリ、内面ナダ	密	良	黄 5187/6	-	
194	塚田16-04	土師器	壺A	178-2次	SK10883	口径 12.1 器高 11.4	白緑部ヨコナダ、器部外面ナダ・オサエ、内面ナダ	密	良	に灰-黄 5187/4	口径の1/18	外面に黒色の付着
195	塚田16-02	土師器	壺C	178-2次	SK10883	口径 21.8 器高 5.5	白緑部ヨコナダ、器底を上と積み上げの形、体露外面タテハケ、内面ヨコハケ	密	良	に灰-黄 7.5187/4	全体の約1/6	
196	塚田01-05	土師器	杯A	10次	SK11200	口径 14.6 器高 2.7	白緑部ヨコナダ、体露ナダ	密	良	黄 5186/8	全体の約90%	
197	塚田01-02	土師器	碗A 2	10次	SK11200	口径 16.4 器高 4.3	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 5187/8	全体の約90%	
198	塚田01-01	土師器	皿A	10次	SK11200	口径 19.2 器高 2.1	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 7.5187/6	全体の約80%	
199	塚田01-03	土師器	平鉢鉢	10次	SK11200	口径 23.6 器高 11.4	白緑部ヨコナダ、器部外面上下タテハケ、下部ナダケ、内面ヨコハケ、器部内面ナダ	密	良	黄 5187/6	全体の約90%	
200	塚田01-04	土師器	壺A	10次	SK11200	口径 15.8 器高 14.4	白緑部ヨコナダ、器部外面上下タテハケ、下部ナダケ、内面ヨコハケ、下部内面ナダ	密	良	黄黄緑 10188/4	全体の約7%	
201	塚田08-01	煎茶器	広口壺	10次	SK11200	口径 13.3-9.3 器高 17.4	白緑部ヨコナダ、体露ロコロナダ、体露外面下ヘラケズリ、底部外面ケズリ	密	良	灰白 517/1	全体の約1%	白緑部の砂がみださい
202	塚田02-05	煎茶器	杯A	10次	SK826	口径 12.8 器高 3.9	白緑部ヨコナダ、体露ナダ	密	良	黄 5187/6	全体の約90%	器部外面に赤く塗り直
203	塚田02-02	土師器	杯A	10次	SK826	口径 17.2 器高 3.1	白緑部ヨコナダ、体露ナダ	密	良	黄 5187/6	口径の1/12	
204	塚田02-04	土師器	皿A 1	10次	SK826	口径 17.8 器高 2.9	白緑部ヨコナダ、体露外面ヘラケズリ、内面ナダ	密	良	黄 5186/6	口径の1/18	
205	塚田02-03	煎茶器	杯B	10次	SK826	口径 12.4 器高 3.2	白緑部ヨコナダ、体露ロコロナダ、胎付高台、底部外面ケズリ	密	良	灰白 2.517/1	口径の1/3	
206	塚田02-01	土師器	皿	10次	SK826	口径 - 器高 8.3	白緑部ヨコナダ、体露外面タテハケ、内面ナダ・ケズリ	密	良	黄黄緑 7.5188/4	口径の1/12	内面に自然付着
207	塚田11-03	土師器	杯A	10次	SK826	口径 12.8 器高 2.9	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 5187/8	全体の約90%	内面に黒色の付着
208	塚田11-04	土師器	杯A	10次	SK11197	口径 14.8 器高 3.3	白緑部ヨコナダ、体露ナダ	密	良	黄 2.5186/8	口径の1/12	
209	塚田07-01	土師器	杯A	10次	SK11197	口径 16.9 器高 3.9	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 5186/6	口径の1/8	
210	塚田11-01	土師器	碗A 2	10次	SK11197	口径 13.8 器高 4.0	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 5186/6	全体の約90%	
211	塚田11-02	土師器	高杯	10次	SK11197	口径 5.8 器高 11.5	器部外面ヘラケ、内面ナダ・シボリ	密	良	黄 2.5188/8	脚部のみ残存	
212	塚田28-02	煎茶器	杯B	10次	SK11197	口径 20.7 器高 5.4	白緑部ヨコナダ、体露ロコロナダ、胎付高台、底部外面ロコロナダ	密	良	灰黄 5.517/2	全体の約5%	
213	塚田19-02	土師器	杯A	10次	SK827	口径 16.0 器高 3.6	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 5186/6	口径の1/4	
214	塚田19-01	土師器	皿A 2	10次	SK827	口径 16.6 器高 2.1	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 5187/6	口径の1/12	内面に黒色の付着
215	塚田19-04	土師器	皿A 2	10次	SK827	口径 17.9 器高 2.0	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 5186/6	口径の5/12	
216	塚田19-04	土師器	壺A	10次	SK827	口径 13.8 器高 11.3	白緑部ヨコナダ、器部外面上下タテハケ、下部ナダケ、器部内面ナダ、器部内面ナダ・オサエ	密	良	黄 7.5187/6	全体の約90%	
217	塚田17-02	土師器	瓶 <small>ロ</small>	10次	SK827	口径 6.7 器高 6.7	白緑部ヨコナダ、体露外面タテハケ、内面ヨコハケ、器部内面ナダ、器部内面ナダ・オサエ	密	良	黄黄緑 10188/4	-	
218	塚田17-05	煎茶器	杯B	10次	SK827	台径 9.1 器高 1.4	器部内面ロコロナダ、体露外面下平ロコロナダ、胎付高台、底部外面切取	密	良	灰沢 2.516/1	台径の1/6	
219	塚田19-03	煎茶器	台付壺	10次	SK827	口径 19.2 器高 2.6	白緑部ヨコナダ、体露ロコロナダ、胎付高台、底部外面切取	密	良	灰オリーブ 5187/3	口径の1/3	
220	塚田17-03	土師器	鉢B	10次	SK827	口径 41.4 器高 10.8	白緑部ヨコナダ、体露外面タテハケ、内面ヨコハケ、把子彫り	密	良	に灰-黄 7.5187/4	口径の1/12	
221	塚田19-06	土師器	杯A	10次	SD291	口径 15.1 器高 2.6	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	黄 5187/6	口径の1/4	
222	塚田21-01	土師器	皿A 2	10次	SD291	口径 15.7 器高 2.2	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	に灰-黄 7.5187/4	口径の1/12	
223	塚田21-02	土師器	碗A 2	10次	SD291	口径 17.2 器高 4.5	白緑部ヨコナダ、体露ナダ・オサエ	密	良	に灰-黄緑 10187/3	口径の1/6	
224	塚田19-05	土師器	壺A	10次	SD291	口径 13.7 器高 7.3	白緑部ヨコナダ、体露外面タテハケ、内面ナダ	密	良	に灰-黄 7.5187/3	口径の1/11	
225	塚田21-03	灰釉陶器	碗	10次	SD291	口径 17.3 器高 5.6	白緑部ヨコナダ、体露ロコロナダ、胎付高台、底部外面切取、灰釉施す	密	良	黄 灰白 2.517/1 黄 青白緑 789	全体の約30%	

第6表 出土遺物観察表(6)

番号	登録番号	器種	形状	調査次数	通儀・部位	法量(m)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考
226	墳田26-02	土師器	杯A	18-2次	SD091	口径 13.2 底径 3.1	口縁部コナダ、体部ナダ	密	良	にぶい黄緑 10YR7/2	口縁の 1/8	
227	墳田23-05	土師器	杯A	18-2次	SD091	口径 13.9 底径 2.7	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	黄緑 5YR7/6	全体の 約70%	
228	墳田13-04	土師器	杯A	18-2次	SD091	口径 13.4 底径 3.3	口縁部コナダ、体部ナダ	密	良	黄 7.5YR7/6	全体の 約90%	
229	墳田23-01	土師器	杯A	18-2次	SD091	口径 14.2 底径 3.0	口縁部コナダ、体部ナダ	密	良	黄緑 5YR7/6	全体の 約70%	
230	墳田23-02	土師器	皿A 1	18-2次	SD091	口径 14.2 底径 2.7	口縁部コナダ、体部ナダ	密	良	黄緑帯 7.5YR6/6	全体の 約60%	
231	墳田23-06	土師器	甕A	18-2次	SD091	口径 16.0 底径 4.7	口縁部コナダ、体部内外面ナダ	密	良	にぶい黄 5YR7/4	口縁の 1/12	外面にスス 付着
232	墳田23-08	土師器	甕A	18-2次	SD091	口径 18.8 底径 3.3	口縁部コナダ、体部外面タテハケ・ 内面ナダ	密	良	にぶい黄 7.5YR7/4	口縁の 1/6	
233	墳田23-06	土師器	甕A	18-2次	SD091	口径 18.6 底径 4.5	口縁部コナダ、体部外面タテハケ・ 内面ナダ	密	良	黄緑帯 10YR8/4	口縁の 1/12以下	
234	墳田23-04	土師器	甕A	18-2次	SD091	口径 20.8 底径 4.5	口縁部コナダ、体部外面タテハケ・ 内面ナダ	密	良	黄緑帯 10YR8/4	全体の 約70%	外面にスス 付着
235	墳田26-04	土師器	甕A	18-2次	SD091	口径 25.2 底径 7.3	口縁部コナダ、体部外面タテハケ・ 内面コハケ	密	良	黄緑帯 10YR8/4	口縁の 1/12	
236	墳田23-07	須恵器	甕	18-2次	SD091	口径 15.4 底径 1.6	体部口コナダ、駝付つまみ	密	良	灰白 5Y7/1	全体の 約40%	
237	墳田23-07	須恵器	杯B	18-2次	SD091	口径 10.4 底径 1.6	体部口コナダ、駝付高台	密	良	灰 5Y6/1	高台部の 約70%	
238	墳田05-03	土師器	杯A	178-2次	SK10889	口径 13.4 底径 2.8	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	黄 5YR6/6	口縁の 1/6	
239	墳田05-02	土師器	皿A 2	178-2次	SK10889	口径 16.4 底径 2.4	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	黄 7.5YR7/6	口縁の 1/12	
240	墳田09-01	土師器	皿A 2	178-2次	SK10889	口径 17.4 底径 2.4	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	黄 5YR7/6	全体の 約90%	
241	墳田08-03	土師器	高杯	178-2次	SK10889	口径 20.6 底径 10.9	口縁部コナダ、底部内外面ナダ 頸部外周ナダ ハブ・内面ナダ・シジリ、頸部底コナダ	密	良	黄 5YR6/6	全体の 約90%	
242	墳田14-01	土師器	平底鉢	178-2次	SK10889	口径 23.2 底径 5.0	口縁部コナダ、体部外面タテハケ・ 内面コハケ	密	良	黄 5YR6/6	口縁の 約70%	
243	墳田04-01	土師器	平底鉢	178-2次	SK10889	口径 23.9 底径 10.2	口縁部コナダ、底部外面タテハケ・ 内面底ナダ、内面ナダ・底部ヘラケズリ	密	良	黄 5YR7/8	全体の 約30%	
244	墳田08-01	土師器	平底鉢	178-2次	SK10889	口径 25.6 底径 10.9	口縁部コナダ、底部・底部外面ヘラケズ リ・内面ナダコハケ・下ヘラケズリ	密	良	黄 7.5YR7/6	全体の 約70%	
245	墳田14-02	須恵器	杯B	178-2次	SK10889	口径 13.2 底径 3.6	口縁部コナダ、体部口コナダ 駝付高台、体部外面コロケズリ	密	良	灰 5Y5/1	全体の 約90%	
246	墳田17-02	土師器	杯A	178-2次	SK10865	口径 15.8 底径 2.7	口縁部コナダ、体部ナダ	密	良	黄 5YR7/6	口縁の 1/4	
247	墳田17-01	土師器	杯B	178-2次	SK10865	口径 19.2 底径 4.8	口縁部コナダ、体部ナダ、駝付高 台	密	良	黄 5YR7/6	全体の 約80%	
248	墳田17-06	土師器	皿A 1	178-2次	SK10865	口径 18.8 底径 2.5	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	黄 5YR6/8	全体の 約20%	
249	墳田17-04	土師器	甕A	178-2次	SK10865	口径 13.6 底径 1.4	口縁部コナダ、体部調整不明	密	良	黄 5YR6/6	口縁の 1/8	
250	墳田02-02	土師器	甕A	178-2次	SK10865	口径 18.8 底径 14.5	口縁部コナダ、底部外面ナダ・ナメナ ダ・内面ナダコハケ・下ヘラケズリ	密	良	黄緑帯 10YR8/3	全体の 約90%	器表面の摩 耗著しい
251	墳田17-05	須恵器	無台碗	178-2次	SK10865	口径 17.6 底径 5.1	口縁部コナダ、体部口コナダ、底部 外面コロケズリ・内面ヘラケズリ	密	良	灰 7.5Y6/1	全体の 約40%	
252	墳田17-03	土師器	甕	178-2次	SK10865	口径 15.8 底径 2.0	口縁部コナダ、体部内外面口コ ナダ	密	良	灰 5Y5/1	全体の 約70%	
253	墳田17-07	土製品	土師	178-2次	SK10865	全長 高さ 14.14	外面ナダ	密	良	黄緑帯 10YR8/4	ほぼ完形	
254	墳田19-05	土師器	杯A	178-2次	SK10874	口径 16.6 底径 4.2	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	黄 5YR6/6	全体の 約70%	
255	墳田19-03	土師器	碗A 2	178-2次	SK10874	口径 15.6 底径 3.4	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10YR7/4	全体の 約70%	外面に黒色 物付着
256	墳田19-06	土師器	皿A 2	178-2次	SK10874	口径 16.8 底径 2.2	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	黄 5YR6/8	全体の 約40%	
257	墳田19-01	土師器	皿A 2	178-2次	SK10874	口径 20.2 底径 3.6	口縁部コナダ、内面ナダ、底部外 面ヘラケズリ	密	良	にぶい黄 7.5YR7/4	全体の 約70%	
258	墳田19-02	土師器	甕A	178-2次	SK10874	口径 16.2 底径 8.0	口縁部コナダ、体部外面ナダ・オ サエ、内面コハケ	密	良	にぶい黄 7.5YR7/4	口縁の 2/5	
259	墳田19-04	須恵器	甕	178-2次	SK10874	口径 15.0 底径 2.2	口縁部コナダ、体部外面コロケズ リ・内面口コナダ	密	良	灰 7.5Y6/1	口縁の 約70%	
260	墳田19-08	須恵器	壺	178-2次	SK10874	口径 底径 2.2	口縁部コナダ、頸部口コナダ	密	良	灰 7.5Y6/1	口縁の 1/12以下	
261	墳田19-07	土製品	土師	178-2次	SK10874	残長 2.3 高さ 2.094	外面ナダ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	全体の 約80%	
262	墳田08-04	土師器	碗A	23次	SK1181	口径 16.2 底径 3.7	口縁部コナダ、体部ナダ	密	良	黄 5YR6/6	口縁の 1/12	
263	墳田08-03	土師器	碗A	23次	SK1181	口径 11.4 底径 3.2	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	黄緑帯 7.5YR6/4	口縁の 1/10	
264	墳田08-06	須恵器	甕	23次	SK1181	底径 6.4 高さ 1.5	体部口コナダ、底部ケズリ	密	良	灰黄 2.5Y6/2	底縁の 約70%	内面に自然 釉付着
265	墳田08-05	灰釉陶器	碗	23次	SK1181	口径 13.4 底径 4.0	口縁部コナダ、体部口コナダ	密	良	黄 5YR6/6	口縁の 約70%	
266	墳田08-03	土師器	短須壺	10次	SK11204	口径 11.8 底径 3.5	口縁部コナダ、体部ナダ	密	良	黄 5YR6/6	口縁の 1/12	
267	墳田08-01	土師器	甕A	10次	SK11204	口径 16.2 底径 5.8	口縁部コナダ、体部外面タテハケ・ 内面コハケ	密	良	黄 7.5YR7/6	口縁の 1/6	
268	墳田08-02	土師器	甕	10次	SK11204	底径 6.6 底径 3.9	体部外面タテハケ・ナダ・オサエ、 内面ナダ	密	良	黄 7.5YR6/6	底縁の 1/3	甕底か
269	墳田03-04	土師器	皿D	23次	SK1177	口径 12.8 底径 2.7	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	明黄帯 10YR7/6	口縁の 1/3	
270	墳田03-01	土師器	碗A 2	23次	SK1177	口径 17.4 底径 5.3	口縁部コナダ、体部ナダ・オサエ	密	良	黄 5YR7/8	口縁の 1/4	

第7表 出土遺物観察表(7)

番号	登録番号	器種	器形	調査次数	通稱・層位	法量(m)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考
271	墳田03-02	土師器	皿A	23次	SK1177	口縁高 14.2 器高 1.8	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 7.5W7/6	口縁の1/6	
272	墳田03-03	土師器	皿A	23次	SK1177	口縁高 14.4 器高 2.3	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 5Y8/6	口縁の1/4	
273	墳田03-09	煎器類	杯A	23次	SK1177	底径 7.8 残高 1.1	体部口クロコナデ、底部外面口クロコナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	底径の1/3	
274	墳田03-07	煎器類	付付盤	23次	SK1177	台径 13.6 器高 2.5	体部口クロコナデ、配付高台、底部外面口クロコナデ	密	良	灰白 5Y7/2	高台径の1/6	
275	墳田03-06	煎器類	杯B	23次	SK1177	台径 11.2 残高 2.8	体部口クロコナデ、配付高台	密	良	灰白 5Y7/2	高台径の1/12	
276	墳田03-11	土製品	土師	23次	SK1177	全長 5.4 高さ 15.96	外面ナデ	密	良	黄灰黄 10YR8/3	ほぼ完成	
277	墳田09-04	土師器	杯A	174-9次	SK11136	口縁高 13.6 器高 2.9	口縁部ココナデ、体部ナデ	密	良	黄 5Y8/7	口縁の1/4	
278	墳田09-03	土師器	杯A	174-9次	SK11136	口縁高 17.8 器高 3.7	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 2.5Y8/7	口縁の1/12	
279	墳田09-05	土師器	椀A	174-9次	SK11136	口縁高 12.6 器高 3.6	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 5Y8/6	口縁の1/6	
280	墳田10-01	土師器	皿A 2	174-9次	SK11136	口縁高 15.6 器高 1.9	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい・黄 10YR6/4	口縁の1/10	
281	墳田09-06	土師器	皿A	174-9次	SK11136	口縁高 15.0 器高 1.6	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 7.5Y8/7	口縁の1/3	
282	墳田09-07	土師器	皿A	174-9次	SK11136	口縁高 15.4 残高 3.7	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 7.5Y8/7	口縁の1/12	
283	墳田09-02	土師器	羹A	174-9次	SK11136	口縁高 17.4 残高 4.8	口縁部ココナデ、体部外面タテハケ・内面口コハケ	密	良	灰白 2.5Y8/2	口縁の1/3	
284	墳田10-02	土師器	羹A	174-9次	SK11136	口縁高 20.7 残高 5.8	口縁部ココナデ、体部外面タテハケ・内面口コハケ	密	良	にぶい・黄 7.5Y8/7	口縁の1/6	内面に多量の黒色粉着
285	墳田09-01	土師器	羹A	174-9次	SK11136	口縁高 21.8 残高 10.7	口縁部ココナデ、体部外面タテハケ・内面口コハケ	密	良	黄灰黄 10YR8/3	口縁の1/12	
286	墳田10-04	煎器類	杯A	174-9次	SK11136	底径 10.1 残高 2.1	体部口クロコナデ、底部ヘラケズリ	密	良	灰 5Y6/1	底径の1/6	
287	墳田10-03	煎器類	杯B	174-9次	SK11136	口縁高 8.6 残高 3.0	体部口クロコナデ、配付高台、底部外面口クロコナデ	密	良	灰 10Y6/1	高台径の1/6	
288	墳田11-01	煎器類	杯B	174-9次	SK11136	口縁高 12.2 残高 1.9	体部口クロコナデ、配付高台、底部外面ヘラ切ナデ	密	良	灰 5S/	高台径の1/6	
289	墳田04-03	土師器	皿A	23次	SK1184	口縁高 12.8 器高 2.2	口縁部ココナデ、体部ナデ	密	良	黄 5Y8/6	口縁の1/6	
290	墳田04-04	煎器類	蓋	23次	SK1184	口縁高 5.8 残高 1.3	口縁部ココナデ、体部口クロコナデ	密	良	黄・灰黄 2.5R6/2 黄・黄 5Y8/6	口縁の1/6	蓋裏面に外面に自然黒着
291	墳田04-01	煎器類	皿A	23次	SK1184	口縁高 20.6 器高 2.4	口縁部ココナデ、体部口クロコナデ、体部外面口クロコナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	口縁の1/3	
292	墳田04-02	煎器類	羹C	23次	SK1184	口縁高 31.2 器高 4.9	口縁部ココナデ、体部外面付タテハケ・内面背面底辺のタテキ	密	良	灰白 2.5Y7/1	口縁の1/12	
293	墳田07-01	煎器類	杯A	23次	SK1157	口縁高 14.8 器高 5.1	口縁部ココナデ、体部口クロコナデ、底部外面口クロコナデ	密	良	灰白 5Y7/2	全体の約50%	内外面に黒色粉着
294	墳田07-03	煎器類	杯B	23次	SK1157	台径 8.4 残高 1.2	体部口クロコナデ、配付高台、底部外面口クロコナデ	密	良	灰黄 2.5Y7/2	高台径の1/6	
295	墳田07-02	煎器類	杯B	23次	SK1157	台径 10.6 残高 3.0	体部口クロコナデ、配付高台、底部外面口クロコナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	高台径の1/6	
296	墳田07-04	煎器類	蓋	23次	SK1157	口縁高 15.6 残高 1.7	口縁部ココナデ、体部口クロコナデ、外面上平口クロコナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	口縁の1/8	
297	墳田07-06	製塩土師	湯式 製土師	23次	SK1157	口縁高 6.3	外面ナデ・オサエ、内面板ナデのみ	密 蓋縁の砂粒含む	良	黄 5Y8/6	—	
298	墳田27-03	土師器	杯A	18-1次	SK919	口縁高 12.4 器高 2.9	口縁部ココナデ、体部外面ヘラケズリ・内面ナデ	密	良	黄 5Y8/6	口縁の1/12	
299	墳田27-07	土師器	杯A	18-1次	SK919	口縁高 14.8 器高 3.2	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄灰黄 10YR8/3	口縁の1/6	
300	墳田27-04	土師器	杯A	18-1次	SK919	台径 15.0 残高 4.5	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい・黄 7.5Y8/7	口縁の1/6	
301	墳田27-01	土師器	杯A	18-1次	SK919	口縁高 17.1 器高 3.5	口縁部ココナデ、体部ナデ	密	良	にぶい・黄 10Y7/4	口縁の1/6	
302	墳田27-02	土師器	杯A	18-1次	SK919	口縁高 12.0 残高 2.8	口縁部ココナデ、体部ナデ	密	良	黄 7.5Y8/7	全体の約2%	
303	墳田27-05	土師器	皿A 2	18-1次	SK919	台径 12.0 残高 1.7	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄灰黄 7.5Y8/6	口縁の1/12	
304	墳田20-07	土師器	皿A	18-1次	SK919	口縁高 11.2 器高 1.9	口縁部ココナデ、体部ナデ	密	良	黄灰黄 10YR8/3	全体の約9%	
305	墳田20-12	煎器類	杯A	18-1次	SK919	口縁高 10.1 器高 1.4	体部口クロコナデ、配付高台	密	良	灰 10Y6/1	高台径の1/8	
306	墳田20-10	煎器類	無付盤	18-1次	SK919	台径 19.2 残高 4.3	口縁部ココナデ、体部口クロコナデ	密 蓋下の砂粒含む	良	灰白 5Y7/1	全体の約20%	
307	墳田20-09	灰陶器類	椀	18-1次	SK919	口縁高 13.0 器高 2.3	口縁部ココナデ、体部口クロコナデ	密	良	黒地・灰黄 2.5Y7/2	全体の約25%	
308	墳田20-11	灰陶器類	椀小	18-1次	SK919	口縁高 9.2 器高 1.7	配付高台	密	良	黒地・灰白 10Y7/1	高台径の1/4	
309	墳田15-05	土師器	杯A 2	10次	SK11202	口縁高 14.6 器高 2.9	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄 5Y8/7	口縁の1/6	
310	墳田15-04	土師器	椀A 2	10次	SK11202	口縁高 17.9 残高 4.0	口縁部ココナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい・黄 7.5Y8/7	口縁の1/4	
311	墳田15-03	灰陶器類	椀	10次	SK11202	口縁高 15.4 器高 4.0	口縁部ココナデ、体部口クロコナデ、体部外面下半口クロコナデ	密	良	黒地・灰白 5Y7/1 黒・抹茶色 83B	口縁の1/6	
312	墳田15-01	灰陶器類	椀	10次	SK11202	口縁高 16.0 器高 1.7	口縁部ココナデ、体部口クロコナデ、配付高台、底部外面半切刃	密	良	黒地・灰黄 2.5Y7/2 黒・丸白 34B	全体の約5%	
313	墳田15-02	灰陶器類	椀	10次	SK11202	口縁高 18.4 器高 5.6	口縁部ココナデ、体部口クロコナデ、配付高台、底部外面半切刃	密	良	黒地・灰黄 2.5Y7/2 黒・灰黄 890	全体の約40%	見込みに黒色粉着
314	墳田09-07	土師器	羹A	178-2次	SK10976	口縁高 16.6 器高 5.6	口縁部ココナデ、体部外面タテハケ・内面口コハケ	密	良	にぶい・黄 7.5Y8/7	口縁の1/6	
315	墳田13-02	煎器類	長碗盤	174-9次	SK11173	口縁高 14.6 器高 3.3	体部外面口クロコナデ・内面口クロコナデ、配付高台、底部外面ナデ	密	良	黄 2.5Y4/1	高台径の1/3	内面に自然黒着

第8表 出土土物観察表(8)

番号	登録番号	器種	形状	調査次数	通稱・部位	法量(m)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考
316	塚田13-04	灰緑陶器	皿	174-8次	SK11173	口径 7.2 底径 2.2	体部口ロナデ、貼付高台、底部外面糸切縁	密	良	黒色: 灰黄 2.517/2 灰白 ベージュ 784	高台後の 3/5	見込み部に 重ね焼き痕
317	塚田13-01	灰色器	台付盤	174-8次	SK11173	口径 11.5 底径 2.1	体部口ロナデ、貼付高台、底部外面ナデ	密	良	灰白 517/1	高台後の 1/10	
318	塚田13-03	緑釉陶器	把手付瓶	174-8次	SK11173	残高 4.9	体部内外面口ロナデ、把手貼付	密	良	黒色: 灰白 2.517/2 緑色 518	—	緑釉表面 表面破産
319	塚田02-03	土師器	杯A	23次	SK11153	口径 14.6 底径 3.4	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄緑 10188/6	全体の 約40%	
320	塚田02-02	土師器	杯A	23次	SK1153	口径 14.8 底径 3.4	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黄緑 2.518/4	全体の 約60%	
321	塚田02-04	土師器	皿A	23次	SK1153	口径 16.2 底径 1.8	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 7.518/4/4	全体の 約20%	
322	塚田02-01	土師器	甕A	23次	SK1153	口径 23.8 底径 5.2	口縁部口ロナデ、体部外面斜め方向の ヘケ・内面ヨコハケカ	密	良	にぶい黄緑 10187/4	口縁の 1/6	*3に3回土量 録の観察あり
323	塚田02-06	灰色器	杯B	23次	SK1153	口径 15.1 底径 1.4	体部口ロナデ、貼付高台、体部外面 口ロナデ	密	良	灰黄 2.517/2	高台後の 1/12	
324	塚田02-05	灰緑陶器	小瓶	23次	SK1153	口径 10.8 底径 4.2	口縁部口ロナデ、体部口ロナデ、 貼付高台、底部外面糸切縁ナデ	密	良	黒色: 灰黄 2.517/2 黒 1/4	全体の 約20%	
325	塚田14-02	土師器	杯A	174-8次	SK11166	口径 14.2 底径 3.3	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/6	口縁1/4	
326	塚田14-03	土師器	杯A	174-8次	SK11166	口径 14.8 底径 2.9	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/6	口縁の 1/4	
327	塚田14-05	土師器	碗A	174-8次	SK11166	口径 14.4 底径 3.0	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/6	口縁の 1/5	
328	塚田14-01	土師器	皿A 2	174-8次	SK11166	口径 15.2 底径 1.6	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/8	口縁の 1/12	
329	塚田14-04	土師器	皿A	174-8次	SK11166	口径 15.2 底径 1.1	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 7.5186/6	全体の 約20%	
330	塚田14-06	黒色土師 人型	甕	174-8次	SK11166	口径 7.0 底径 1.0	体部外面ナデ・内面ヘケミゴキ、貼 付高台、底部外面ナデ	密	良	丸に2回土量 録: 黒 5182/1	高台後の 1/6	
331	塚田27-08	土師器	杯A	18-1次	SK905	口径 14.4 底径 3.5	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5187/6	口縁の 1/6	
332	塚田27-06	土師器	皿A 2	18-1次	SK905	口径 15.8 底径 2.9	口縁部口ロナデ、体部ナデ	密	良	黄緑 10188/4	口縁の 1/12	
333	塚田29-06	土師器	皿A	18-1次	SK905	口径 — 底径 2.4	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5187/6	口縁の 1/12	
334	塚田29-05	土師器	皿A	18-1次	SK905	口径 15.6 底径 1.6	口縁部口ロナデ、体部ナデ	密	良	黒 7.5187/6	全体の 約20%	
335	塚田27-09	土師器	碗	18-1次	SK905	口径 15.2 底径 3.3	口縁部口ロナデ、体部ナデ	密	良	黒 7.5187/6	口縁の 1/6	
336	塚田29-04	土師器	高杯	18-1次	SK905	残高 6.1	胴部外面ケズリ・内面ナデ	密	良	黒 7.5187/6	胴部後の 1/2	
337	塚田29-03	土師器	高杯	18-1次	SK905	残高 9.1	胴部外面ケズリ・内面ナデ	密	良	黒 5187/6	胴部後の 1/2	
338	塚田29-02	土師器	甕A	18-1次	SK905	口径 14.4 底径 2.5	口縁部口ロナデ、体部内外面ナデ	密	良	赤赤黒 2.5187/4	口縁の 1/12	
339	塚田27-11	灰色器	杯B	18-1次	SK905	口径 9.8 底径 2.0	体部口ロナデ、貼付高台	密	良	灰白 1016/1	全体の 1/12	
340	塚田27-10	灰色器	蓋	18-1次	SK905	口径 17.8 底径 1.8	口縁部口ロナデ、体部口ロナデ	密	良	灰白 2.517/1	口縁の 1/12	
341	塚田29-01	灰緑陶器	瓶	18-1次	SK905	口径 7.4 底径 1.9	体部口ロナデ、内面ヘケミゴキ、貼 付高台	密	良	黒色: 灰白 2.518/2 黒: ベージュ 784	全体の 1/2	
342	塚田25-05	土師器	杯A	18-2次	SK925	口径 13.8 底径 3.1	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/6	口縁の 1/12	
343	塚田25-04	土師器	杯A	18-2次	SK925	口径 13.0 底径 2.9	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10187/4	口縁の 1/12	
344	塚田25-06	土師器	皿B	18-2次	SK925	口径 15.2 底径 5.6	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.5186/4	口縁の 1/12	
345	塚田25-02	土師器	杯B	18-2次	SK925	口径 8.4 底径 3.4	体部ナデ、貼付高台	密	良	黒 5186/8	高台後の 1/12以下	
346	塚田25-02	製土器 製土器	志原式 瓶B	18-2次	SK925	口径 — 底径 5.9	内外面ナデ・オサエ	密	良	黒 5187/6	口縁の 1/12以下	
347	塚田20-07	灰色器	杯B	18-2次	SK925	口径 10.8 底径 2.4	体部口ロナデ、底部外面糸切縁、 貼付高台	密	良	灰白 2.517/1	高台後の 1/12	
348	塚田05-02	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 15.4 底径 3.4	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/6	口縁の 1/6	
349	塚田01-07	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 16.4 底径 3.9	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/6	口縁の 3/12	
350	塚田17-01	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 12.2 底径 2.8	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/6	口縁の 1/6	
351	塚田16-05	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.1 底径 3.3	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5187/6	口縁の 1/6	
352	塚田05-06	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 12.9 底径 2.9	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.5187/4	口縁の 1/12	
353	塚田04-08	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.4 底径 2.7	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/6	口縁の 1/4	
354	塚田04-05	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.6 底径 3.0	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.5187/6	口縁の 1/12	ほぼ先期
355	塚田03-07	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.2 底径 3.4	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5187/8	口縁の 1/3	体部に粘土 被合痕あり
356	塚田03-06	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.5 底径 3.0	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/6	口縁の 1/12	体部に粘土 被合痕あり
357	塚田01-04	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.5 底径 3.2	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.5186/4	口縁の 1/4	
358	塚田03-09	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 14.2 底径 3.5	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5186/6	口縁の 1/2	
359	塚田04-01	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.6 底径 3.1	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10187/4	口縁の 1/6	
360	塚田16-03	土師器	杯A	18-2次	SK926	口径 13.8 底径 3.0	口縁部口ロナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄 7.5187/4	口縁の 1/4	体部に粘土 被合痕あり

第9表 出土文物観察表(9)

番号	登録番号	器種	器形	調査次数	通稱・層位	法量(m)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考
361	墳田04-03	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.1 器高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	黒 7.5BK7/6	完形	
362	墳田04-07	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.2 器高 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK7/6	白縁の 1/4	
363	墳田05-07	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.7 器高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK7/6	白縁の 1/12	
364	墳田02-04	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.0 器高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK6/6	白縁の 1/4	口縁に黒焼 付着
365	墳田05-08	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.4 器高 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK6/6	白縁の 1/6	
366	墳田08-03	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 16.0 器高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK6/6	白縁の 1/2	
367	墳田01-08	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.4 器高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~2mmの小石含む	良	黒 5BK6/6	白縁の 1/3	
368	墳田02-02	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.7 器高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK6/6	白縁の 5/12	
369	墳田04-06	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.6 器高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10BK7/4	白縁の 1/4	
370	墳田17-04	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.4 器高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 7.5BK7/4	白縁の 3/4	口縁に黒焼 付着
371	墳田05-03	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.4 器高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~2mmの小石含む	良	黒 5BK6/6	白縁の 1/3	
372	墳田05-04	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.9 器高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 7.5BK7/4	白縁の 1/3	
373	墳田02-03	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 14.7 器高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	にぶい黄緑 7.5BK6/4	白縁の 1/4	
374	墳田16-07	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 15.6 器高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 2.5BK6/6	白縁の 1/6	体部に粘土 検出機残る
375	墳田05-01	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 15.6 器高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10BK7/4	白縁の 1/12	
376	墳田04-02	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 16.5 器高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~2mmの小石含む	良	黒 5BK6/6	白縁の 1/3	
377	墳田01-01	土師器	杯A	18-2次	SK926	口縁部 15.6 器高 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明黄焼 10BK7/6	白縁の 1/3	
378	墳田16-06	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 12.4 器高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 7.5BK7/6	白縁の 1/6	
379	墳田04-04	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 13.7 器高 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10BK7/4	白縁の 5/12	
380	墳田03-01	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 12.8 器高 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明黄焼 10BK7/6	白縁の 3/4	
381	墳田02-01	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 13.6 器高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	にぶい黄緑 10BK7/4	白縁の 1/3	
382	墳田17-03	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 14.3 器高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK6/6	白縁の 5/12	
383	墳田02-06	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 14.4 器高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~3mmの小石含む	良	にぶい黄緑 10BK7/4	白縁の 5/6	
384	墳田02-05	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 14.9 器高 3.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	黒 7.5BK7/6	全体の 約90%	
385	墳田11-02	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 15.0 器高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 7.5BK7/4	白縁の 1/6	
386	墳田01-05	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 16.3 器高 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	黒 5BK6/6	全体の 約30%	
387	墳田01-03	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 17.3 器高 4.2	口縁部多段ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~2mmの小石含む	良	黒 7.5BK7/6	全体の 3/4	
388	墳田02-08	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 17.0 器高 3.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	黒 5BK6/6	白縁の 5/12	
389	墳田02-07	土師器	椀A	18-2次	SK926	口縁部 15.5 器高 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	にぶい黄緑 7.5BK7/4	白縁の 3/4	
390	墳田11-06	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.6 器高 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	にぶい黄緑 10BK7/3	全体の 約30%	
391	墳田12-09	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.2 器高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	黒 5BK7/6	全体の 約60%	
392	墳田12-02	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.6 器高 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK6/6	全体の 約3/4	
393	墳田12-06	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.9 器高 1.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~3mmの小石含む	良	黒 7.5BK7/6	全体の 約70%	
394	墳田16-01	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.5 器高 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	黒 5BK6/6	ほぼ完形	
395	墳田11-05	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.8 器高 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	黒 7.5BK7/6	全体の 約40%	
396	墳田06-06	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.5 器高 1.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 7.5BK7/4	全体の 約15%	
397	墳田12-05	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.6 器高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK7/6	全体の 約90%	
398	墳田12-10	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.9 器高 2.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK7/6	全体の 約90%	
399	墳田06-04	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 14.8 器高 1.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 7.5BK7/4	白縁の 1/4	
400	墳田12-04	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 14.9 器高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	にぶい黄緑 10BK7/4	全体の 約90%	
401	墳田12-03	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.6 器高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~1.5mmの小石含む	良	黒 5BK7/6	白縁の 3/4	
402	墳田03-03	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 14.9 器高 1.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 7.5BK7/6	全体の 約90%	
403	墳田11-01	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.6 器高 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	黒 5BK7/6	白縁の 1/2	
404	墳田10-09	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 15.7 器高 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密 ~3mmの小石含む	良	黒 5BK7/6	全体の 約90%	
405	墳田16-04	土師器	皿A	18-2次	SK926	口縁部 16.1 器高 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 7.5BK7/4	白縁の 3/4	













第15表 出土文物観察表 (15)

番号	登録番号	種類	形状	調査次数	遺構・層位	法量(m)	調査・技法の特徴	胎土	構成	色調	残存度	備考
631	塚田22-04	石製品	碁石	178-2次	表土	直径 1.5 厚 0.5	—	—	—	白色	完形	
632	塚田22-05	ガラス製品	丸玉	178-2次	表土	直径 1.6 直径 0.3	—	—	—	瓶覆 995	全体の約50%	
633	014-01	製版土器	土器式 製版土器	173次	SK10321	器高 7.2	内外面ナゲ・オサエ	粗 ～5mmの小石含む	やや粗	浅黄緑 10YR8/4	—	
634	014-03	製版土器	土器式 製版土器	173次	SK10325	口径 17.1 器高 5.4	内外面ナゲ・オサエ	粗 ～1.5mmの小石含む	良	にぶい黄緑 土 5YR6/6	口径の 1/12	
635	014-04	製版土器	土器式 製版土器	173次	SK10325	口径 13.7 器高 5.3	内外面ナゲ・オサエ	粗 ～3.0mmの小石含む	良	黄緑 5YR7/6	口径の 1/12	
636	014-02	製版土器	土器式 製版土器	173次	SK10318	口径 16.2 器高 5.2	内外面ナゲ・オサエ	粗 ～3.0mmの小石含む	良	黄緑 5YR7/6	—	
637	011-01	土製品	土締	177次	SK10502	全長 9.2 直径 141.0g	全面ナゲ。4方向に溝	密	良	にぶい黄緑 5YR7/4	ほぼ完形	
638	塚田08-01	土製品	土締	23次	SK1159	残長 7.6 直径 61.6g	外面ナゲ・オサエ	密 断面凹凸砂粒含む	良	浅黄緑 7.5YR8/4	全体の約70%	
639	013-03	土製品	土締	173次	SK10318	全長 7.5 直径 67.27g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄緑 10YR8/3	ほぼ完形	
640	021-04	土製品	土締	186次	SD10836	全長 7.0 直径 50.67g	外面ナゲ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 土 5YR6/6	完形	
641	021-04	土製品	土締	186次	SD10830	全長 6.5 直径 41.28g	外面ナゲ・オサエ	密 断面凹凸砂粒含む	良	黄緑 7.5YR7/6	完形	
642	013-05	土製品	土締	173次	溝13	全長 4.2 直径 1.31g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄緑 10YR8/4	全体の約5/12	外面に鉄線付着
643	塚田03-01	土製品	土締	174-8次	p-2 上段2	全長 4.9 直径 13.95g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄緑 7.5YR8/6	ほぼ完形	
644	塚田04-10	土製品	土締	174-8次	p-5	全長 5.4 直径 16.24g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄緑 10YR8/4	ほぼ完形	
645	塚田02-01	土製品	土締	174-8次	p-8 p9	全長 6.8 直径 19.66g	外面ナゲ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10YR7/4	完形	
646	塚田04-09	土製品	土締	174-8次	表土	全長 4.4 直径 6.72g	外面ナゲ・オサエ	密	良	黄緑 5YR6/6	全体の約70%	
647	塚田20-05	土製品	土締	178-2次	SB10868	全長 6.1 直径 17.21g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄緑 10YR8/3	ほぼ完形	
648	021-02	土製品	土締	186次	SK10843	全長 5.2 直径 14.68g	外面ナゲ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10YR6/3	ほぼ完形	
649	R 11	土製品	土締	23次	SK1161	全長 4.0 直径 10.77g	外面ナゲ・オサエ	密	良	灰白 2.5YR/2	完形	
650	023-02	土製品	土締	186次	表土	全長 4.1 直径 26.45g	外面ナゲ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10YR7/3	完形	
651	塚田02-07	土製品	土締	23次	SK1161	全長 4.1 直径 10.78g	外面ナゲ・オサエ	密	良	灰白 2.5YR/2	完形	
652	023-04	土製品	土締	186次	包含層	全長 2.9 直径 3.96g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄 2.5Y7/3	全体の約50%	
653	塚田08-02	土製品	土締	23次	SK1179	全長 3.7 直径 6.58g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄緑 10YR8/3	ほぼ完形	
654	013-04	土製品	土締	173次	SK10329	全長 3.4 直径 3.84g	外面ナゲ・オサエ	密	良	灰黄褐 10YR6/2	ほぼ完形	
655	塚田04-08	土製品	土締	174-8次	n-10	全長 4.5 直径 5.29g	外面ナゲ・オサエ	密	良	黄 7.5YR6/6	全体の約90%	
656	塚田03-03	土製品	土締	174-8次	q-2 上段35	全長 4.5 直径 8.01g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄緑 10YR8/3	全体の約90%	
657	塚田15-02	土製品	土締	174-8次	q-9 P11	全長 4.2 直径 4.29g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄緑 10YR8/3	ほぼ完形	
658	塚田03-02	土製品	土締	174-8次	n-4 溝18	残長 3.3 直径 2.99g	外面ナゲ・オサエ	密	良	黄 2.5YR/3	全体の約80%	
659	塚田01-06	土製品	土締	174-8次	q-4 P11	残長 3.0 直径 2.77g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄緑 10YR8/4	全体の約70%	
660	塚田01-10	土製品	土締	174-8次	p-3 P17	残長 3.6 直径 1.85g	外面ナゲ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10YR7/4	全体の約70%	
661	塚田01-11	土製品	土締	174-8次	p-3 P17	残長 4.0 直径 2.01g	外面ナゲ・オサエ	密	良	にぶい黄緑 10YR7/3	全体の約70%	
662	塚田01-04	土製品	土締	178-2次	SK10875	残長 3.2 直径 3.16g	外面ナゲ・オサエ	密	良	灰白 2.5YR/2	全体の約70%	
663	塚田02-02	土製品	土締	174-8次	p-8 F11	全長 3.3 直径 3.38g	外面ナゲ・オサエ	密	良	浅黄緑 10YR8/3	全体の約90%	

### 第3章 下園東区画の出土遺物の検討

#### 第1節 第23次調査出土の唐鏡について

昭和54年度の第23次調査で出土した銅鏡片は、当時の概報に同調査区の包含層出土のため時期は不明で「雙鸞鏡」と報告されている。また、平成元年度に刊行した『斎宮跡発掘資料選』掲載の写真には「唐鏡双鸞双鳳八花鏡」とクレジットされているが、このような小片からどのように判断されたのかはわからない。本品については、地元住民が表採したとの情報もあり、本書刊行にあたりあらためて検討を試みた。

まず、出土状況については、現物に付されたラベルには、「23次付近」以外に層位等の記入はない。概報であえて包含層出土と記載されていることから、第23次調査区外での出土・採集の可能性は低く、発掘調査時の排土からの採取である可能性が最も高いと考えられる。この場合でも第23次調査で出土したものと考えて間違いないだろう。

次に鏡式の検討だが、あらためて背面の文様を見ると、残存長約5cmの破片で、外縁の隆帯のすぐ内側に文様の鳥の尾羽とみられる淨線が巻き上がるように上方へ続いており、この部分は孔雀の可能性が全くないとはいえないが、鳳凰（鸞）と考えていだろう。また、尾羽の左下にややカールする細線があり、正倉院北倉の「鳥花背八角鏡」のような飛雲文が、瑞花文・唐草文の一部とみられる。また鏡背面の文様が外区と内区に分かれない。外縁の断面形は台形であり、このことから形式的にも平安時代9世紀以降に流行する仿製唐式鏡「瑞花双鳥文八花（稜）鏡」ではないことがわかる<sup>(1)</sup>。現在のところ国内で出土あるいは伝世した唐鏡の中には、同型とみられるものはない。外縁が八花をなすと考えられ、推定径は20cmを超える比較的大型の鏡とみられる。

外・内区を分けない双鳥文となる資料には、先の正倉院「鳥花背八角鏡」、興福寺中金堂の鎮壇具として出土した「瑞花双鳳八花鏡」、五島美術館蔵の「双鸞瑞花八花鏡」、千葉県谷津経塚出土の「唐花双鸞八花鏡」などがあり、これらは船載鏡とみられている<sup>(2)</sup>。

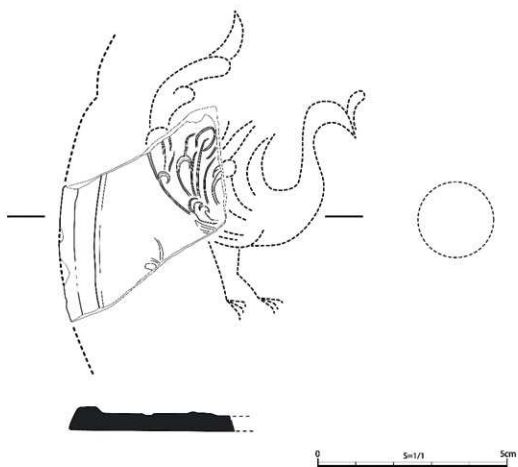
龍谷大学の杉山洋氏によるハンディタイプの蛍光X線分析では、銅70%前後、スズ30～40%、鉛2%弱で、仿製鏡に含まれるヒ素等が含まれなかったため、唐製鏡と間違いないと判断された。成瀬正和氏によれば、正倉院鏡の蛍光X線分析から銅約70%・スズ約25%・鉛約5%の「白銅」製品は唐からの船載で、この成分比率は中国鏡ではほぼ不変であるとされ、銅約80%・スズ約20%・ヒ素約1～3%の青銅鏡は国内の官営工房で製作されたものとしている<sup>(3)</sup>。

長久智子氏の研究によると、唐での鏡式は八稜鏡の最も古い例は神龍二（706）年の墓誌を持つ河南省宋偵墓で、紀元唐墓出土の唐式鏡をみると8世紀第1四半期に八稜鏡のピークがあり、第2四半期には花形鏡が主流となり、第3四半期には円形・方形が主流となっていくという<sup>(4)</sup>。

第23次調査出土の唐鏡の出土状況についても考えてみたい。日本でみられる唐鏡は、寺社での伝世品の他、経塚や墳墓の副葬品、地鎮・鎮壇や祭祀のための意図的な埋納などの例がある。神島や沖ノ島などの祭祀遺跡の他、吹田市五反田遺跡のような川の渡し場での祭祀に伴うものがある<sup>(5)</sup>。

斎宮での鏡の使用の実態はどうだろうか。『延喜式』に現れる鏡をみると、『延喜斎宮式』には鏡は全く現れない。その一方で、『延喜大神宮式』では、山口祭、心の御柱を採る祭、神田の組銀の柄を採るための山口祭・木本祭に各40枚と記される。また、神宮所禊の宮地の鎮祭（40枚）、度会宮所禊の宮地の鎮祭（10枚）と記される。もちろん、これらの祭祀に用いる鏡は儀鏡の可能性はあるが、このことから斎宮の通常の祭祀や祭の業務には鏡は使われることはなく、斎王周辺や斎宮寮の高位の官人らの所有物であったか、臨時の祭祀などで埋納された状況が考えられる。しかし前者の場合、下園東区画で出土した理由が説明できない。

このような検討から、斎宮第23次調査の鏡は、斎宮寮庫に納められ伝世したものが破損したというより、方格街区や建物の造営にあたり、地鎮等の祭祀として埋納されたものではないだろうか。第23次調査区のSK1156は直径約0.9mの円形土坑で、出土状況は不明だが、土師器杯A・盤、須恵器無台杯のほぼ完形品が出土しており、地鎮等のための埋納遺構であったと推定される。本来はこうした遺構に伴う遺物であった可能性が考えられる。



背面



鏡面

第18図 第23次調査出土唐鏡実測図・写真（実測図は原寸大）



[註]

- (1) 杉山洋『日本の美術No.393古代の鏡』至文堂 1999
- (2) 『唐鏡』泉屋博古館 2007
- (3) 成瀬正和「正倉院鏡を中心とした唐式鏡の化学的調査」『日本の美術No.393 古代の鏡』1999
- (4) 長久智子「9世紀における瑞花双鳥文八棱鏡の初現形式」『愛知県陶磁美術館研究紀要15』2010
- (5) 前掲(1)

## 第2節 西加座北区画との比較について

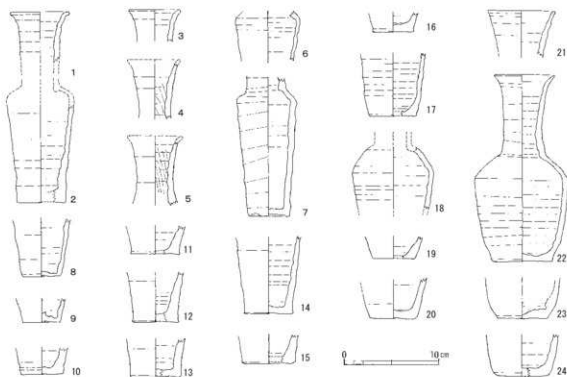
下園東区画は、従来から5間×2間の東西棟が並列し、東接する西加座北区画と同様、「寮庫」の性格を持つ段階があり、当初は西加座北区画の倉庫群が先行し、天長元(824)年に度会郡に移転した齋宮が承和六(839)年に多気郡の旧地に戻された以降にあらためて「寮庫」として整備され、西加座北区画とは時間的にずれていると考えられていた。しかし今回の『報告書Ⅲ』の検討過程で、下園東区画は9世紀前葉の度会郡への齋宮移転前(『遺構編』の「下園東B期」)に、5間×2間の東西棟をシメトリーに配置し、西加座北区画と「寮庫」としての機能を併存させていた時期があったことが明らかとなった。最大規模の時期には西加座北区画で16棟、下園東区画でも区画南部に建物が確認されていない地形的に湿潤な不適地があり、12棟程度が想定されるこの二区画について、出土遺物からいくつかの比較を行った。

### (1) 須恵器壺G

須恵器壺Gは、奈良時代後期(平城宮V期)から長岡京期を経て初期の平安京期までに多く出土する、頸部から胴部を細身に作る平底の長頸壺である。静岡県東の三島市花坂島橋窯跡(伊豆)と藤枝市助宗窯跡(駿河)に生産地が特定されている。埼玉県比企郡鳩山町鳩山窯群跡(武蔵)でも生産された可能性があるという。長岡京期を中心に短期間に全国的に流通・拡散したことが知られている。

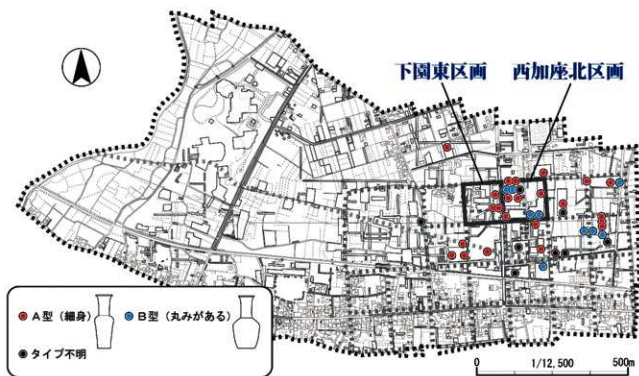
齋宮跡でも早くから存在が知られていたが、全体的な分析はされてこなかった。あらためて史跡内での出土分布をみると(第20図)、ほとんどが奈良時代末～平安時代初期に造営が進められた方格街区の中にあり、下園東区画でも今回3点を報告しているが、東接する西加座北区画で12点と最も出土が多い。出土したもののうち、図示できるものを集成したのが第19図である。山中草氏は形態と大きさから太型・中太型・細型に分類されている<sup>(11)</sup>が、齋宮跡では直線的な体部を持つ細型(Ⅰ-17)と、中太型とみられる胴部に丸みがあるもの(Ⅰ8-24)があり、その中でも細型がやや多い。西加座北区画は光仁朝に造営された「内院」である鍛冶山西区画や、「神殿」とも推定される西加座南区画の北側にあり、造営開始当初の方格街区の中心軸にある。区画として遺構・遺物の総括的な整理がまだ行われておらず、建物の時期決定も十分とは言えないが、第90次・130次調査でⅠ-3期新相～Ⅱ-1期古相の土器を伴う建物も見つかっており、方格街区の中でも早い段階から整備に着手されたと考えられる。下園東区画の3点は区画東辺寄りの18-2次・第174-8次調査区から出土している。齋宮Ⅱ-1期に相当する下園東A期から建物がみられるもの、下園東区画の壺Gの破片は、位置的に西加座北区画からの混入も考えられる。

須恵器壺Gの用途については、都城への調賈貢納物としての堅魚煮汁の運搬容器に使われたとする説<sup>(12)</sup>、軍事的行為などの人の移動に伴って使用された水筒説の他<sup>(13)</sup>、花瓶に類似した形態や東日本では集落内仏殿と考えられる建物周辺から出土することから、仏器とみる考え方もある<sup>(14)(15)</sup>。『延喜齋宮式』の諸国調賈雑物条には、伊豆国より堅魚・堅魚煎、駿河国より煮堅魚が納めることが記されている。しかし、瀬川裕市郎氏の研究では、煮汁を濃縮した調味料である堅魚煎はゼリー状で、その運搬には木製の容器が考えられ、細口の須恵器壺Gは不向きとされている<sup>(16)</sup>。また、仏器という見方については、あらためて一定量の壺Gが出土することが確認できた齋宮では、長岡京期から平安時代初期にかけては、延暦二十三(804)年に纏められた『皇太神宮儀式帳』・『止由気宮儀式帳』、散逸した『弘仁式』『貞観式』を踏襲したとみられる『延喜齋宮式』にみられる仏教を禁忌する「忌詞」の存在からも窺わ



第19図 斎宮跡出土須恵器壺G実測図

25-6次(3)・29次(19)・34次(8)・37-13次(9)・40次(17・20)・44次(16)・51次(1・2・18)・52次(6)・54次(10)・55次(11)・60次(15)・62次(4・5・12・21)・63次(14・23)・66次(22)・83次(24)・136次(13)・143次(7)



第20図 斎宮跡出土須恵器壺G分布図

れるように、最も考えられない用途といえる。斎宮の方格街区の造営開始期に多数みられること、物資の集散を伴う「寮庫」となる区画に多いことから、少なくとも斎宮跡にあっては人や物資の移動に伴う遺物と見るべきである<sup>(17)</sup>。下園東区画からの出土が少ないのは、寮庫としての機能整備が、西加座北区画がすでにⅡ-1期古相段階(おおむね長岡京期)まで遡り得るのに対し、下園東区画の「寮庫」整備がⅡ-1期新相～2期にあたる下園東B期まで遅れたためと考えられる。

[註]

- (1) 山中章「桓武朝の新流通構造—壺Gの生産と流通—」『古代文化 Vol. 49』財団法人古代学協会 1997
- (2) 巽淳一郎「都の焼物の特質とその変容」『新版 古代の日本 ⑥近畿Ⅱ』角川書店 1991
- (3) 前掲(1)
- (4) 佐野五十三「須恵器花瓶の成立—仏の手から安婆の世界へ—」『静岡県考古学研究 No. 30』静岡県考古学会 1998
- (5) 佐野五十三「壺Gの成立と伝播」『静岡県考古学研究 No. 31』静岡県考古学会 1999
- (6) 瀬川裕市郎「鯉魚木簡に見られる鯉魚などの実態について」『沼津市博物館紀要21』沼津市歴史民俗資料館他 1997
- (7) 山中章「生産と流通」『長岡京遷都 桓武と激動の時代』国立歴史民俗博物館 2007

## (2) 緑釉陶器

高級資材である緑釉陶器については、Ⅱ-3期～Ⅲ-1期(9世紀後半～11世紀前半)のものが大半を占め、その生産地についても形態や製作技法、色調など目視による判断だが、斎宮跡では猿投産・京都産・東濃産・近江産や尾北窯産・二川窯産がみられる<sup>(17)</sup>。下園東区画からの緑釉陶器の出土は、約120片と方格街区内として調査率を考えると少ないといえる。産地別では猿投産がやや多く、京都産・近江産がそれに続く。器種では碗・皿が主体で、陰刻花文を施すものは第16図に図示した区画南辺の第166次調査の(582)と、区画東辺の第173次調査の(583)のみ、壺・瓶などは把手付瓶が、第173次調査で(584)が、第174-8次調査で小片(318)が出土したのみである。全体量だけでなく裝飾性の高いものや所謂袋物が極めて少ない。

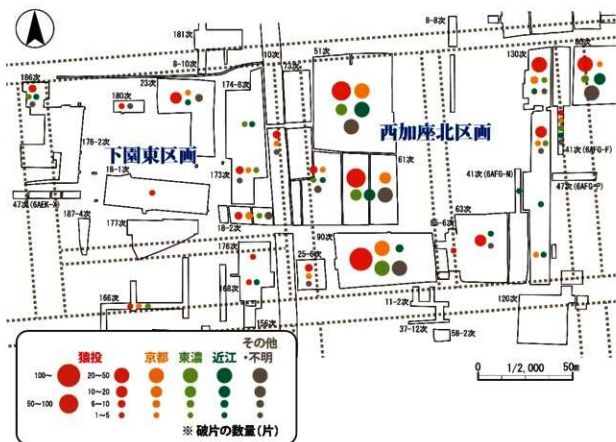
区画内ではやや区画東半に多く分布するよう見え、発掘面積100㎡あたりの破片数を見ると、特に第18-2次調査区は調査面積に対して出土量が最も多い。これら緑釉陶器が多くなるⅡ-3期に相当する下園東C～E 1期にかけては、第18-2次調査区とその周辺ではC期のS B 932、D期のS B 10330・S B 929、E 1期のS B 933と区画内では大型の建物が連続して建てられている。また、区画内でも大量の土器類が出土したS K 926・928と時期的に重複することも無関係ではないと考えられる。

一方、東接する西加座北区画と比較すると、質・量とも圧倒的に下園東区画を凌駕する。下園東区画の出土量は破片数にして西加座北区画の15%弱にとどまる。また、第22図に示したとおり、器種的にも椀や椀・段皿・耳皿・合子蓋・香炉や壺・瓶類などの袋物もある。陰刻花文も猿投窯の産品を代表するような陰刻花文椀(1)や陰刻花文と透かし彫りのある香炉蓋(42)、猿投産緑釉陶器でも最古段階の黒笹14号式期のもの(3・34)もみられる。西加座北区画内での分布の密度を見ると、西半の第51・61・90次調査区と北東隅部の第80・130調査区に多い。

『延喜斎宮式』には「瓷器」の記載ないが、西加座北区画の状況は高級資材を一括して管理収納していた状況を彷彿とさせる。緑釉陶器の出土量が増加するⅡ-3期(9世紀後半)以降は、下園東区画には明確に倉庫と判断できる建物がみられなくなるが、西加座北区画では第51・61・63・90次調査、第130次調査の北部ではⅡ-1～2期の倉庫建物に重複あるいは位置をわずかにずらして建物が継続して建てられている。中でも第51次調査のS B 3174は、桁間の柱間1.05m・梁間2.05m構造の建物を倉庫とみることができるならば<sup>(18)</sup>、西加座北区画は10世紀まで「寮庫」としての機能を維持していたといえるだろう。

[註]

- (7) 『日本の三彩と緑釉』愛知県陶磁資料館 1998
- (8) 「Ⅳ 第51次調査」『三重県斎宮跡調査事務所年報1983 史跡斎宮跡発掘調査概報』三重県斎宮跡調査事務所ほか 1984

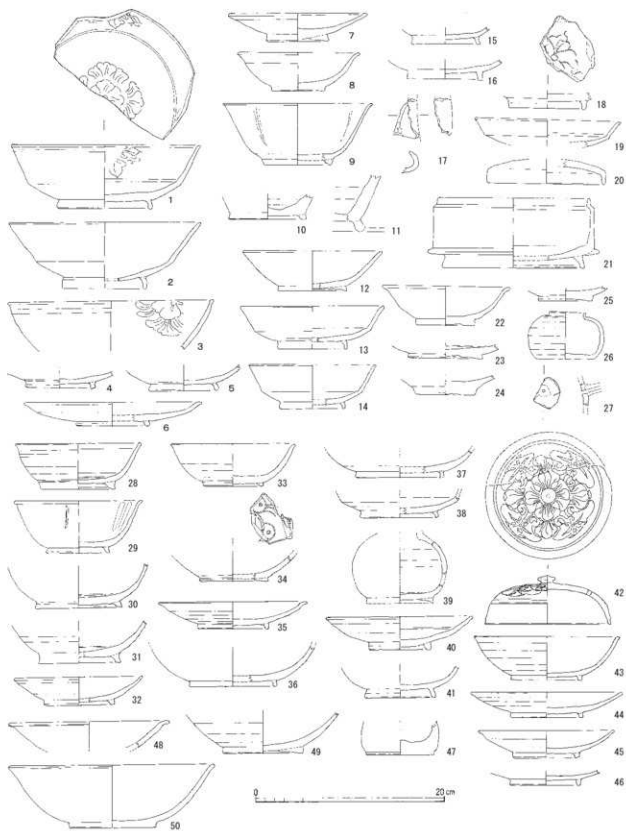


第21図 下園東区画と西加座北区画の緑釉陶器出土分布図

### (3) 志摩式製塩土器

内陸で出土する志摩式製塩土器は、食品・調味料あるいは祭祀の資材としての焼塩を運搬するのに用いたと考えられており、基本的に8世紀半ばから10世紀頃までの遺物である<sup>19)</sup>。斎宮Ⅲ-1期の遺構まで出土例が報告されているが、破砕しやすい志摩式製塩土器が、後世の遺構に混入している可能性は想定しておかなければならない。本報告で図示した下園東区画の志摩式製塩土器は、古い遺物の混入の可能性のあるものを除けば、Ⅱ-1期古〜中相のSK 10888(第178-2次)からⅡ-2期のSK 10318・10325(第173次)の頃までが中心となる。

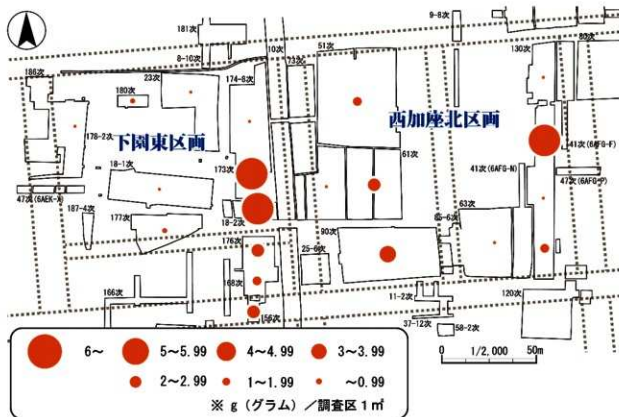
下園東区画内での分布状況を、より客観的に出土量により比較するため、調査区1㎡あたりのg数を算出した。それによると第18-2次・第173次調査区といった区画東辺中央部の出土量が特に多く、区画の中央から西はほとんどない。一方、西加座北区画では区画南西部(第90次)と北東部南寄り(第130次)に多い。緑釉陶器と異なり、下園東区画と西加座北区画で出土量や分布で大きな違いはない。また、こうした分布の偏りは、製塩土器のまま備蓄した建物あるいは、その塩を使用した場所(建物)が偏在していたことを示すのではないだろうか。塩は『延喜斎宮式』では調庸として志摩国から毎年十五石、尾張国は六十五石を納めることになっており、志摩国分は焼塩を製塩土器に詰めのまま運搬されたあと、そのまま「寮庫」に備蓄した可能性がある<sup>100)</sup>。しかし、単純に見れば志摩式製塩土器で推定できる調庸塩は全体の約19%を反映しているのがあって、残りの大部分を占め、別の輸送法が考えられる尾張国の塩は含まれないことは注意すべきであろう。下園東区画で出土量が多いとみられるⅡ-1〜2期は「寮庫」を構成していた下園東B期とも重なる。同期の主要建物でいえばSB 930・10311にあたる。今後、西加座北区画などの詳細な出土状況と比較する必要があるだろう。



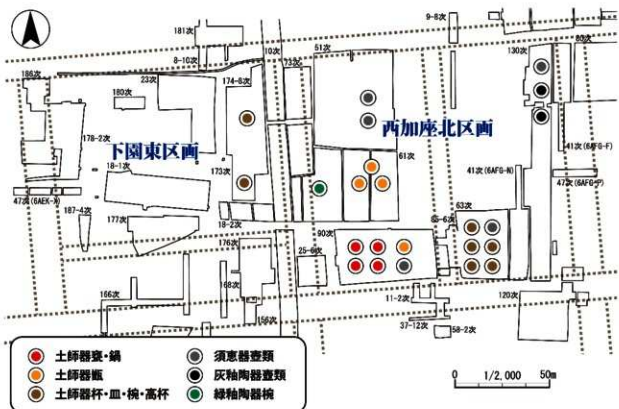
第22図 西加座北区画出土の緑釉陶器

51次(1~11)・61次(12~32)・63次(33~35)・90次(36~41)・130次(42~50)

猿投(1~6, 12~21, 33~39, 42~47) 京都(7, 8, 22~25, 40, 48~50) 東濃(9~11, 27) 近江(28~32) 篠岡・尾北(26, 41)



第23図 下園東区画と西加座北区画の製埴土器出土分布図



第24図 下園東区画と西加座北区画の小型模造品出土分布図

[註]

- (9) 山本雅晴「志摩式製塩土器考」『考古学論集 第3集』考古学を学ぶ会 1990  
(10) 新名 強「斎宮跡と塩」『斎宮歴史博物館 研究紀要二十』2012

#### (4) 祭祀具類

下園東区画では小型模造品や土馬は極めて少ない。形代となる小型模造品では、第173次調査の土師器甕A(616)はⅡ-3期新相のSK10328出土である。9.0m×3.2mで深さ0.2mの大型の隅丸長方形の土坑自体には祭祀的な性格はうかがえない。第174-8次調査の土師器甕(617)は出土遺構はよくわからない。この他に比較的大型の土師質の土馬の尾部(618)があるが、出土した第186次調査区は区画西辺道路と方格街区北辺道路の交差点でもあり、区画内祭祀というよりも交差点での路上祭祀との関連がうかがわれるが、三重県内ではこうした出土状況の例は他に無いようである<sup>10)</sup>。

一方、西加座北北区画では数多くの小型模造品が出土しており、その種類は調査区により偏在している。列記してみると、区画南西隅の第90次調査区では土師器甕・鍋といった煮炊具が、区画南東部の第63次調査では土師器杯・皿・高杯といった供膳具が、区画西辺中央の第61次調査区では土師器甕や緑釉陶器碗が、区画北半の第51次調査や第130次調査北部では須恵器や灰軸陶器の壺類がある。ただし、こうした陶器壺類は水滴として使用される場合を想定しなければならない。また、甕・壺や高杯などの小型模造品は南接する西加座南区画で多量に出土しており、西加座北北区画の祭祀的な遺物はこちらとの関連を考えるべきかもしれない。

西加座北北区画の土馬は、区画南東部の第63次調査で土師質のものが2点出土している。1点はSD2357から鞍の表現を持つ胴部から尾部が、もう1点は包含層出土の頭部である。この他西加座北北区画外ではあるが、区画北東隅の交差点部分である第80次調査では5点の土馬片が出土しており、下園東区画北西隅の第186次調査の(618)と同様の使用状況が想定される<sup>11)</sup>。

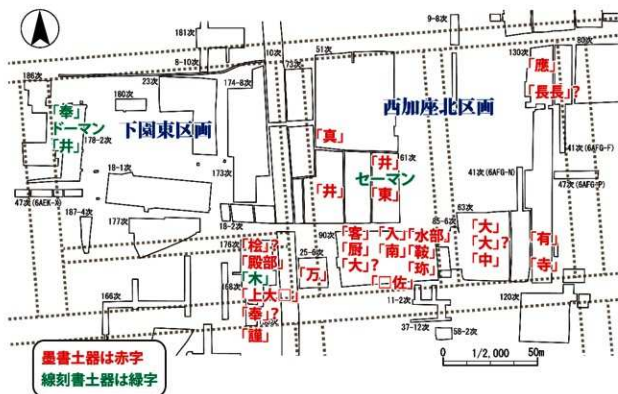
[註]

- (11) 山中由紀子「土馬」『三重県史 資料編 考古2』三重県 2009  
(12) 大川勝宏「斎宮跡の祭祀と出土遺物」『三重県史 資料編 考古2』三重県 2009

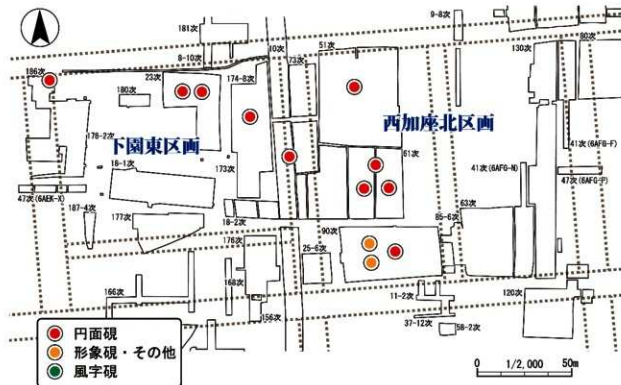
#### (5) 墨書土器・線刻土器

下園東区画の墨書土器は、区画南東部にのみ見られる。第168次調査区の「殿部」(568)は斎宮の「殿部司」との関連が考えられる。土器の型式からⅡ-1期新相頃のものと思われる。榎村寛之氏の整理では、殿部司の長は従七位下でその配下も六人とされている。また、その職掌も、『延喜斎宮式』の新嘗祭条に殿部司が受けるものとして湯槽・円槽・足洗槽などの水槽類、大型の甕・油瓶・油坏などの灯明具があること、年料として油坏・盤・湯槽・洗床・洗頭槽・洗足槽・洗物槽・灯台が列挙されていることから、斎王の入浴や灯火・油の管理の他、輿や儀仗具の管理に関することとしている<sup>12)</sup>。殿部に関する文字資料では第2章でも触れたように、鍛冶山地区の第29次調査で土師器に線刻した「殿」が、東加座地区の第57次調査では「殿司」と墨書された土師器が出土している。『延喜斎宮式』にある各種水槽類や、灯火のための油を入れた容器は、年料などとして一旦「寮庫」に収納された可能性はある。「殿部」墨書土器は、下園東B期の建物の中に、殿部司関連の資材を収納する倉庫が特定されていたこともうかがわせる<sup>13)</sup>。同じ調査区で出土した須恵器杯Aに「上大口」と墨書したもの(567)も、三文字目が「宮」の可能性もあり、殿部と斎王を関連を想起させるものである。遺構の上では、第168次調査は下園東B期以降、区画溝あるいは区画道路によって下園東区画とは一線を引かれた個所にあり、E2期まで区画内では連続して建物が集中している。『遺構編』では南接する柳原区画に取り込まれたと想定しているが、殿部は斎宮の維持管理に必要な職掌であり、その機能を持ち続けたことも考えられる。

この他、下園東区画南東隅の柳原区画と接する道路・交差点付近からは、第156次調査で「奉」や「謹」の墨書が、



第25図 下園東区画と西加座北区画の墨書土器・線刻土器出土分布図



第26図 下園東区画と西加座北区画の陶硯類（定型硯）出土分布図



第16表 『延喜書宮式』にみる諸国の調産雑物と殿部司の年料

## 諸国の調産雑物

種別	物資名	量	輸産調産 諸司名	出典	種別	物資名	量	輸産調産 諸司名	出典	
産物類	庵(あしぎぬ)	三百疋	伊勢	調産雑物全	食料品	大豆	六石	伊勢	調産雑物全	
産物類	兵衛	二十疋	尾尾	調産雑物全	食料品	小豆	六石	伊勢	調産雑物全	
産物類	白絹	三百疋	参河	調産雑物全	食料品	餅の大豆	十八石	伊勢	調産雑物全	
産物類	絹	一千五十疋	遠江	調産雑物全	食料品	胡麻子	一石	伊勢	調産雑物全	
産物類	絹	五十疋	相模	調産雑物全	食料品	み(飯詰に魚)子(9)	一石	伊勢	調産雑物全	
産物類	絹	五十疋	美濃	調産雑物全	食料品	黍子	一石	参河	調産雑物全	
産物類	糸	二百疋(く)	尾尾	調産雑物全	食料・祭祀	塩	十五石	志摩	調産雑物全	
産物類	糸	一百疋(く)	遠江	調産雑物全	食料・祭祀	塩	六十五石	尾尾	調産雑物全	
産物類	絹	一千一百疋	相模	調産雑物全	食料品	胡麻油	三石	遠江	調産雑物全	
産物類	絹布	一百疋	上総	調産雑物全	食料品	榎油(ほそき)の油	四斗四升	伊勢	調産雑物全	
産物類	絹布	一疋	常陸	調産雑物全	祭祀具?	東鏡	三百升	安房	調産雑物全	
産物類	布	五百疋	相模	調産雑物全	食料品	鯉魚	二百八十八斤	伊豆	調産雑物全	
産物類	布	三百疋	下総	調産雑物全	食料品	鯉魚	二百二十斤	伊豆	調産雑物全	
産物類	布	六百五十疋	上野	調産雑物全	食料品	表鯉魚	一百四十四斤	豊河	調産雑物全	
産物類	布	二百疋	豊河	調産雑物全	食料品	鯉魚の腹(いろり)	四斗	伊豆	調産雑物全	
産物類	襦文(しず)	二疋	尾尾	調産雑物全	祭品?	蟹の膏	三斗	信濃	調産雑物全	
産物類	木綿(ゆう)	六百五十二疋	伊豆	調産雑物全	食料品	蟹割(すはやり)の鮫	一百二十隻	信濃	調産雑物全	
産物類	木綿(ゆう)	四十九疋	遠江	調産雑物全	食料品	表風の年魚(あゆ)	二石	伊勢	調産雑物全	
産物類	麻	四百斤	下総	調産雑物全	食料品	物の年魚	一石	伊勢	調産雑物全	
産物類	熟麻(にお)	一百斤	下総	調産雑物全	食料品	餅の板	三石	近江	調産雑物全	
産物類	鹿皮	八疋	信濃	調産雑物全	食料品	鳥の脂(ほじし)	十斤	尾尾	調産雑物全	
産物類	祭祀具	鹿甲	十枚	志摩	調産雑物全	食料品	餅の蟹割	九十升	参河	調産雑物全
産物類	織(くつ)	三十九疋	伊勢	調産雑物全	食料品	油具(いがいり)の鮫	一石八斗	参河	調産雑物全	
文房具	筆	一十張	伊勢	調産雑物全	食料品	餅の板	一十斤	参河	調産雑物全	
文房具	筆	一管	伊勢	調産雑物全	食料品	餅(くさぎ)の脂	二石	志摩	調産雑物全	
文房具	筆	一管	尾尾	調産雑物全	食料品	餅(くさぎ)の脂	二石	尾尾	調産雑物全	
文房具	筆	二十八管	美濃	調産雑物全	食料品	餅(くさぎ)の脂	一石	遠江	調産雑物全	
薬品	神薬	五十九種	奥平	調産雑物全	食料品	榎油(わたづけ)の鮫	七斗	相模	調産雑物全	
産物類	白絹	六百疋	京康	調産雑物全	食料品	鯉魚の脂	五石	伊勢	調産雑物全	
金属	鉄	二百三十五口	京康	調産雑物全	食料品	鯉魚の脂	五石	尾尾	調産雑物全	
金属	鉄	五十疋	京康	調産雑物全	食料品	熊鷹脂(いりこ)	百斤	志摩	調産雑物全	
金属	砥	八疋(か)	京康	調産雑物全	食料品	物類(すしあひび)	二石	志摩	調産雑物全	
文房具	紙	十九疋	京康	調産雑物全	食料品	餅の鮫	三百四十四斤	志摩	調産雑物全	
食料品	糠米	三百四十二石	伊賀	調産雑物全	食料品	海菜(め)	三百九十四石四兩	志摩	調産雑物全	
食料品	糠米	四百七十三石二斗	伊勢	調産雑物全	食料品	海菜(め)	三百四十斤	志摩	調産雑物全	
食料品	糠米	五百五十九石三斗	参河	調産雑物全	食料品	芫菜(すまふき)	十疋	尾尾	調産雑物全	
食料品	糠米	二百九十三石	美濃	調産雑物全	食料品	苜蓿の腹(いろり)	一斗	伊勢	調産雑物全	
食料品	芥末	五百三十四石一斗	伊勢	調産雑物全	食料品	芥子	五斗	信濃	調産雑物全	
食料品	芥末	二百石	尾尾	調産雑物全	食料品	山菜(やまわさび)	二斗	豊後	調産雑物全	
食料品	芥末	二百石	参河	調産雑物全	陶磁器	陶の器	六百九十六口	美濃	調産雑物全	
食料品	芥末	四百石	美濃	調産雑物全	祭祀具	蟹の膏の籠	日御に二架	伊勢	調産雑物全	
食料品	榎皮(もちよね)	十疋	伊勢	調産雑物全	その他	鳥の脂(まてき)の籠	百二十疋	大神宮司	調産雑物全	
食料品	小麦	十石	伊勢	調産雑物全	その他	箱(まてき)	二千四百口	大神宮司	調産雑物全	
食料品	大麦	一石	伊勢	調産雑物全	その他	箱(まてき)	二千四百口	河内	調産雑物全	
食料品	粟	三石六斗	伊勢	調産雑物全						

## 殿部司が受ける年料

種別	物資名	量	輸産調産 諸司名	出典	種別	物資名	量	輸産調産 諸司名	出典
産物類	絹	五丈一尺	伊勢	供新資料全	容器・調度	明鏡(あかひつ)	二合	伊勢	供新資料全
産物類	絹布	二百二丈八尺五寸	伊勢	供新資料全	容器・調度	魚笥(あははこ)	二合	伊勢	供新資料全
産物類	袴(てつくり)の布	六尺	伊勢	供新資料全	容器・調度	燈台(あかしだひ)	二具	伊勢	供新資料全
産物類	糸	十疋	伊勢	供新資料全	容器・調度	籠(なりひさご)	三兩	伊勢	供新資料全
容器・調度	漆箱(ふるい)	二口	伊勢	供新資料全	その他	籠(かおりで)	一具	伊勢	供新資料全
容器・調度	漆箱(おけ)	二口	伊勢	供新資料全	陶磁器	山加	一口	美濃	供新資料全
容器・調度	漆箱(しもとづくえ)	一箱	伊勢	供新資料全	陶磁器	山加	四口	美濃	供新資料全
陶磁器	土出口(大壺(おほぶち))	二口	伊勢	供新資料全	陶磁器	平足(たたい)	四口	美濃	供新資料全
燃料	油	一升	伊勢	供新資料全	陶磁器	油瓶	一口	美濃	供新資料全
食料品?	小豆	一升	伊勢	供新資料全	陶磁器	油瓶・壺	各二口	美濃	供新資料全
容器・調度	漆箱・漆箱・鹿足樽	各一箱	伊勢	供新資料全	陶磁器	陶瓶(もいがた)	一口	美濃	供新資料全
容器・調度	漆箱	一箱	伊勢	供新資料全	陶磁器	陶の鉢	一口	美濃	供新資料全
容器・調度	漆箱	五枚	伊勢	供新資料全					

その対称的な位置にあたる区画北西隅の第186次調査では、土師器高杯や皿に「奉」や「井」・セーマン状の記号を線刻しており、交差点祭祀あるいは側溝・水路に伴う水の祭祀がうかがわれる。

一方、西加座北区画では漢字を墨書した土器が多数出土している。官司名に関わるものでは第90次調査区の「水部」「厨」があり、水部司との関連も考えられる。西加座北区画の西半には、この他にも「井」が複数出土しており、水との関連がうかがわれる。下園東区画の墨書・刻書土器は山茶碗にひらがなを墨書した(575)を除けば、多くはⅡ-1～2期に相当するものであるのに対し、西加座北区画ではⅡ-3～4期まで墨書土器が残っている。

[註]

(13) 榎村寛之「第三節 斎宮の官人」『明和町史 斎宮編』明和町 2005

(14) 榎村寛之「斎宮殿部司の性格について」『斎宮歴史博物館 研究紀要二十二』2014

## (6) 硯類

官衙的な性格を示す遺物として硯類がある。定型硯では、下園東区画では北東部の第23・174-8次調査と北西隅の第186次調査から須恵器円面硯が出土している。この状況は先述の墨書土器と逆の分布状況となっている。

西加座北区画では西半の第51・61・90次調査で須恵器円面硯がみられる他、第90次調査区からは須恵器鳥形硯の頭部と蓋が出土している。その反面区画東半は少なく、北東隅部の第130次調査で須恵器円面硯の可能性のある小片が出土しているにすぎない。

これらの円面硯は8世紀末からおおむね9世紀代までの時期に属するとみられるが、その一方で10世紀頃から円面硯と入れ替わっていく風字硯は1点も見つかっていない。しかし、下園東区画ではⅡ-1期頃の須恵器蓋(608)の他、Ⅲ期の無軸陶器の碗・皿類の転用硯がみられることから、実務的な文書事務は行われていたことがうかがえる。また、灰軸陶器碗を転用した朱墨硯や、赤色顔料の付着した灰軸陶器片も出土している。

硯類以外に官人に関連する遺物として、石帯が第23次調査の掘立柱建物の柱穴から丸柄が2点、西加座北区画では第90次調査で丸柄が1点出土している。これは硯類の出土状況とも整合している。

## 第4章 遺物編総括

### 第1節 出土土器群からみた下園東区画

これまで俯瞰してきた、下園東区画の出土遺物やそこからの考察等について最後に振り返りたい。まず、下園東区画から出土する遺物は大部分が土器類だが、その総体を時期別にみると斎宮Ⅱ-1～3期のものが圧倒的に多い。この区画の遺構変遷の両期でいえば下園東A～C期にあたる。その後のⅡ-4期、10世紀前半以降は、遺物量は大きく減少するようである。Ⅱ-1～2期の土器が多量に出土した遺構は、SK10247・10248(第168次)<sup>(1)</sup>・10321(第173次)<sup>(2)</sup>といった区画東辺部の土坑の他、区画道路側溝あるいは側溝に重複・近接する土坑が多い。区画東辺道路の西側溝SD515・520(第10次)、区画西辺道路の東側溝に関連するSK10888(第178-2次)・SD10859・SK10856・10857(第186次)である。このうち、第186次調査区の遺構からは「奉」や「井」、ドーマン状のを線刻した土師器皿・高杯が出土していることも注目される<sup>(3)</sup>。Ⅱ-1期古相から造営が始まった方格街区の区画道路側溝がⅡ-1～2期の遺物を含んで埋没するのは、斎宮の度会部移転と関連するとみられる。これまでも、斎宮が移転する期間を含むⅡ-2期には、方格街区を構成する区画道路の中央に廃棄土坑が多数掘削されたことがわかっている<sup>(4)</sup>。この道路上土坑と同じように、区画道路側溝も斎宮移転にあたって一斉に土器類が投棄されたのではないだろうか。榎村寛之氏は度会部から多気郡に斎宮が戻った後、この区画道路が元の50尺を基調とする幅員に戻らず、やや湾曲し幅の狭いSF11208(西辺道路)・11210(東辺道路)に変容する動きを、下園東区画の倉庫群としての性格が失われることと連動すると指摘した<sup>(5)</sup>。

Ⅱ-3期以降にはこうした出土状況の遺構はないが、SK926・928(第18-2次)、SK10325(第173次)・SK10640(第180次)<sup>(6)</sup>などまとまった遺物の出土がみられる遺構は減少し、以後はみられなくなる。Ⅲ期に入っても多量の土器が消費される「内院」牛薬東区画や「察庁」柳原区画とは明らかに状況が異なる。Ⅲ-1期以降は、方格街区東部の東加座地区では急速に建物が減少することが知られており<sup>(7)</sup>、間に西加座北区画を挟むものの、これと連動した変化といえるだろう。

[註]

- (1) 「Ⅲ 第168次調査」『史跡斎宮跡 平成22年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2012
- (2) 「Ⅲ 第173次調査」『史跡斎宮跡 平成23年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2013
- (3) 「Ⅱ 第186次調査」『史跡斎宮跡 平成27年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2017
- (4) 大川勝宏「斎宮跡方格地割に関する二・三の試論」『斎宮歴史博物館 研究紀要17』斎宮歴史博物館 2008
- (5) 榎村寛之「第3節 下園東区画と斎宮の「蔵部司」の機能」『斎宮跡発掘調査報告Ⅲ 下園東区画の調査 遺構編』斎宮歴史博物館 2020
- (6) 「Ⅱ 第180次調査」『史跡斎宮跡 平成25年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館 2015
- (7) 大川勝宏「斎宮方格地割の変遷・両期についての素描」『斎宮歴史博物館 研究紀要24』2015

### 第2節 特徴的な遺物から見た下園東区画

下園東B期の倉庫群は、第168次調査の「殿部」墨書土器(568)が同時期のものであり、寮庫の各建物が斎宮の各所と個別に関連する可能性を考えなければならない。一方で、常陸や上総・下総から伊賀にいたる東日本の諸国からの調餉雑物を貢納する国別の収納管理も必要とみられる。第178-2次調査の伊賀の須志器とみられる「安」刻書の皿(187)は、これまであまり議論されなかった斎宮と伊賀国との関連を示唆するものである。『延喜斎宮式』では伊賀国は唐米三百四十二石を課せられており、国司や運搬の賦役を担う人々、あるいは物資の移動の実態を反映している可能性がある。同様な事情は志摩式製塩土器でも考えられる。志摩式製塩土器が出土する地点が、塩の貯蔵場所なのか使用場所なのかは慎重に検討しなければならないが、下園東区画のような、祭祀性のある遺物や遺構が乏しい区画で、B期に限られるとはいえ、倉庫群として機能したとみられる区画内部各所の出土量の多寡は、倉庫建物の特定の機能

を反映している可能性があるだろう。東接し同様に寮庫の機能を果たしたとみられる西加座北区画を再整理する中で、合わせて比較検討することが望ましい。

その他の下園東区画の特徴的な遺物の状況を方格街区の他区画と比較して列記する。

- ① 緑軸陶器・貿易陶磁は総量的に少ない。緑軸陶器は西加座北区画と比較しても圧倒的に少ないだけでなく、陰刻花文を持つものや袋物が少ない。9世紀前葉のⅡ-2期から出土する黒埴14号窯式期の緑軸陶器や越州窯系青磁は下園東区画では出土していない。つまり寮庫となるB期には高級陶磁器がみられない。
- ② 金属製品の出土も少ない。少量の鉄製刀子・釘とみられるものがあるだけである。また柳原区画で見られた鍛冶炉のような金属器生産に伴う遺構や輪・埴場や金属滓も出土していない。
- ③ 官人との関連がうかがわれる視類が少なく、墨書土器の数も限られている。
- ④ 周辺の区画と比較して、祭祀具とみられる遺物も少ない。これも西加座北区画と大きな懸隔がある。しばしば土馬や畜車など祭祀具が出土する井戸が、下園東区画では一つも見つかっていないことも無関係ではないだろう。
- ⑤ 大小各種の土鍾が出土している。今回の報告の中では検討を進められなかったが、今後はデータを集積すべき遺物と考える。志摩国等との経済的結びつきや、畜宮と内水面漁業の関連など、これまで注意がはらわれてこなかった実態に迫れるものとする。

最後に、遺構・遺物の両面から下園東区画の変遷を俯瞰する。A期(Ⅱ-1期古～中相)に造営が開始され、B期(Ⅱ-1期新相～2期古相)には5間×2間の掘立柱建物による倉庫群が建ち並び、西加座北区画と並んで「寮庫」として機能した。これは時期的に南接する柳原区画が「寮庁」として整えられ、方格街区南西で八脚門を伴う木葉山西区画など少なくとも4つの区画が造成された畜宮の再編に伴うものである。下園東区画で最も大量の遺物が出土する遺構もⅡ-1～2期のものである。

その後、天長元(824)年～承和六(839)年の畜宮の度会郡移転にあたり、区画の外周道路は埋められ、区画道路の中央にも土坑が掘削され、畜宮を形作った方格街区は、少なくとも下園東区画のような外縁部分は一旦放棄された。C期(Ⅱ-2～3期)に畜宮が再び多気郡に戻り、元の方格街区のプランを活かして畜宮を再構築するのにあたり、下園東区画は「寮庫」の機能は与えられず、区画内の各所にやや大型の建物とそれに付随する小型建物が散在する形になる。出土遺物が減少し、区画全体が一般的な曹司として、あまり特別な役割を担わなくなったように見える。それは、この段階に西加座北区画では多種多様な緑軸陶器が出土するのに比べ、質量ともに大きな格差が生じていることからうかがえる。

E期(Ⅱ-3期新相～Ⅲ-1期)からF期(Ⅲ-2～4期)には建物が徐々に区画北東部にのみ建てられるようになり、区画の衰退は明らかである。遺構だけでなくⅢ期の遺物も少ない。南接する柳原区画ではⅢ-2～3期の土器が多量に出土する土坑や井戸がみられることと対照的である。平安時代を通して祭祀的な遺物が少ないが、下園東区画が実務的な曹司の性格を担い続けたことを示すとみられる。

畜宮跡の過去の発掘調査成果を再整理して総括していく報告書刊行事業は、平安時代の「内院」である鍛冶山西区画・牛葉東区画、「寮庁」と考えられる柳原区画に続いて三箇所目になる。区画ごとの精査により今まで見落とされてきた区画の性格・特徴が見え、それを他所とも比較することは、あらためて畜宮の実態解明を進めることにつながり、畜宮跡の歴史的・文化的価値を高めていくことになる。これからも報告書刊行の意義は大きい。

## 報告書抄録

ふりがな	さいくうあととはつちようさほうこく きん							
書名	斎宮跡発掘調査報告Ⅲ							
副書名	下園東区画の調査 出土遺物編							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	大川勝宏							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL.0596-52-3800							
発行年月日	西暦 2021年 3月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さいくうあと 斎宮跡	さいくうあと 多気郡明和町 斎宮・竹川	24442	210	34度 31分 47秒 ～ 34度 32分 30秒	136度 31分 16秒 ～ 136度 37分 37秒	197403 ～ 20161107 (下園東区画)	約8,200㎡ (下園東区画)	学術調査ほか
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構	主な遺物		特記事項	
斎宮跡 下園東区画	官衙	奈良～平安		掘立柱建物 堀・溝 土坑・溝 道路跡	土師器 須恵器 緑釉陶器 灰釉陶器 貿易陶磁 製塩土器 土製品 金属製品		方格街区の下園東区画の 出土遺物の総括	
要 約	<p>史跡東部の奈良時代末期から平安時代にかけて造営された方格街区(地割)のうち、下園東区画の遺物を総括した。出土遺物のほとんどは土器・陶磁器類である。一部古墳時代にさかのぼるものもあるが、おおむね平安時代全般の遺物が出土している。しかし斎宮の土器編年でⅡ-4期～Ⅲ期の遺物は少ない。黒書土器や、緑釉陶器などの高級陶磁器類も少なく特徴に乏しい。その中で、第23次調査で出土して唐鏡についてはその歴史的意義を考察した。</p>							
	<p>また、須恵器壺Gや緑釉陶器、志摩式製塩土器、小型模造品、墨書土器、定型硯の出土状況について、東接する西加座北区画と比較を行い、9世紀前葉には「寮庫」として機能した時期はあるものの、下園東区画は平安時代を通しておおむね実務的な倉庫であったと考えられた。</p>							

# 齋宮跡発掘調査報告Ⅲ

下園東区画の調査

出土遺物編

2021年3月26日

編集・発行 齋宮歴史博物館

印刷 共立印刷株式会社